

たばしね
**東稲山麓地域の
災害リスク分散型土地利用システム**

岩手県東稲山麓地域



日本農業遺産

概要情報

農林水産業システムの名称

たばしね

東稲山麓地域の災害リスク分散型土地利用システム

日本農業遺産の認定年月日 : 令和5年1月17日

申請団体

・団体名 : 東稲山麓地域世界農業遺産認定推進協議会

・組織構成 :

(自治体) 一関市、奥州市、平泉町、岩手県

(農業団体) いわて平泉農業協同組合、岩手ふるさと農業協同組合、胆沢平野土地改良区、北上川東部土地改良区、照井土地改良区

(都市農村交流団体) いちのせきニューツーリズム協議会、おうしゅうグリーン・ツーリズム推進協議会前沢支部、平泉町グリーン・ツーリズム推進協議会

(集落営農組織) 農事組合法人アグリパーク舞川、農事組合法人アグリ平泉

(地元組織) 舞川地区区長会、生母地区振興会、平泉町区長会、舞川3区集落協定、舞川18区集落協定、赤生津中央地域活性化組合、成岡田農地・水保全管理活動組織、14区集落協定、18区中村集落協定、生母生産森林組合、東稲山さくらの会

(有識者) 千田良一(元一関文化会議所文化事業課長)、小野寺正幸(元前沢図書館館長)、千葉信胤(平泉文化遺産センター参与)、丸山安四(元平泉町助役)

認定地域の位置

・申請地域名 : 岩手県東稲山麓地域

(一関市・奥州市・平泉町 2市1町)

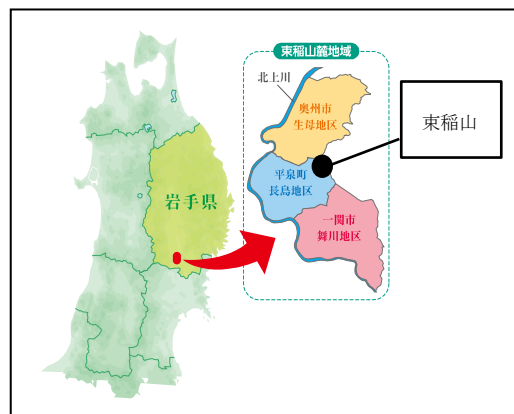
・申請地域の位置に関する説明

岩手県南部の一関市、奥州市及び平泉町の境界に位置する東稲山の西麓で、山裾を東北地方最大河川の北上川が流れている。

・地理座標(緯度経度)

東経 141 度 7 分 16 秒～141 度 14 分 00

北緯 38 度 55 分 45 秒～39 度 4 分 18 秒



主要都市から認定地域までのアクセス

・鉄道

東京 → (JR 東北新幹線、約 2 時間 10 分) → 一ノ関 → (JR 東北本線、7 分) → 平泉 → (車、約 10 分) → 東稲山麓

・車

浦和 IC → (東北自動車道、427.0km) → 平泉前沢 IC → (約 10 分) → 東稲山麓

仙台宮城 IC → (東北自動車道、99.4km) → 平泉前沢 IC → (約 10 分) → 東稲山麓

面積 78.34 km ² ※国土地理院調査
地形的特徴 ・東稲山麓地域の西側を一級河川の北上川※が流れ、東側には北上山地があり、標高 595m の東稲山を中心とする連峰が形成されている。 ・北上川から東稲連峰までは 4 ～ 6 km に過ぎず、この狭いエリアに、北上川沿いの低平地（沖積地）と山麓地（中山間地）、山地が存在し、生活の拠点となる集落は山麓地に立地している。 ※ 岩手県中央部を北から南に流れ、宮城県東部の石巻市で太平洋に注ぐ一級河川。流路延長 249km、流域面積 10,150 km² は、東北地方の河川の中では最大、日本全国では 4 番目の規模である。日本の河川としては勾配がかなり緩いことが特徴。
気候区分 温暖湿潤気候 年平均気温：11.7℃ 年間降水量：1,211.6mm ※気象データはアメダス—観測地点データ平年値(1991～2020)
人口（うち受益者） 6,241 人（総農家数 1,143 戸） ※各市町集計データ（R4.4.1 現在）、農林業センサス 2020
主な生計源 農業、林業

農林水産業システムの概要

岩手県東稲山麓地域において、たび重なる洪水害や干ばつ等の自然災害に適応しながら、山麓地の暮らしと営農に必要なため池や森林の共同管理を行い、山麓地と低平地の両方に農地を所有し、地域一体となった立体的な土地利用や水源管理等の取組により、自然災害のリスク分散を図る独自の農林業システムが構築され、今日まで継承されている。

（地理的特性とシステム形成の背景）

当地域は、北上川から東稲連峰までの約4～6km圏内の狭いエリアに、川沿いの低平地、山麓地及び山地が存在する特徴的な地形を有している。

北上川は岩手県内陸部の降水を集めて流下するが、当地域の直下流部に約30km続く狭窄部を抱えているため、低平地では、たびたび洪水害が発生している。

一方、低平地に隣接する山麓地は、集水域が極端に狭く、水源が乏しいため、干ばつや水不足に悩まされている。さらに、山麓地上部の山地は、急峻な地形と相まって土砂災害リスクを抱えている。

農林業が地域経済を支える当地域の継続的な発展のためには、こうした自然災害の影響を最小限に抑え、できるだけ多くの食料と収益を確保する必要があった。

（伝統的な知識システムの概要）

当地域の農家は、約300年前から、低平地と山麓地の農地の分散所有により、主に山麓地では食料（米等）を確保し、水害リスクを抱えるものの肥沃で生産力の高い低平地で商品作物を栽培するとともに、冠水による影響を低減するための作目選定や地域固有の栽培方式を確立した。

また、貴重な水資源を棚田等へ供給するため、藩政時代以前から、ため池を築造し、水路とともに、集落共同で維持・管理する仕組みを継続し、干ばつ・水不足に備えてきた。さらに、村有林や部落有林を保全・管理し、現在もなお広葉樹の植林等を行うなど、土砂災害の発生防止と水源の涵養に努めてきた。

以上のように、狭いエリアに標高差のある土地が立地する条件を生かし、共同・互助の精神を礎として、多様な知恵や技術を有機的に組み合わせながら、他に例をみない重層的なリスク分散システムを構築したところである。

（地域の特徴）

地域の農家・住民が協力し合いながら、長年にわたって取り組んできた行動様式は、今なお受け継がれている巨石に纏わる祭りや神楽等の活動にも現れている。

また、低平地、山麓地及び山地を一体的に管理することにより、多様な生物の生育環境が確保され、豊かな生態系が維持されている。

特徴的な山容を持つ東稲山と北上川、その対岸には世界遺産「平泉」が位置し、その景観は、古くから和歌にも詠まれるなど、地域の象徴として昔から親しまれてきた。

（システムの重要性）

本システムは、気象変動や社会経済の変化に適応しながら、世代を越えて食料と生計を保障し、レジリエンスに優れたシステムであり、世界各地で自然災害が頻発する状況にあって、その現代的な意義は大きい。

また、SDGsへの貢献が大いに期待され、Eco-DRR[※]等の先進事例であり、中山間地域における持続可能な農林業システムと評価されるものである。

※ 生態系を活用した防災・減災（Ecosystem-based disaster risk reduction）

災害から生命と生活を守り未来へつなぐ「東福山麓地域の災害リスク分散型土地利用システム」

概要

- 岩手県東福山^{※1}麓地域(奥州市生母地区、平泉町長島地区及び一関市舞川地区)は、たび重なる洪水害や干ばつ等の自然災害に見舞われてきた
- 地域一体となった立体的な土地利用や水源管理等の取組により、自然災害のリスク分散を図る独自の農林業システムが構築・継承
- 豊かな農業生態系と個性ある文化が育まれ、独特のランドスケープが形成

※1 東福山：経塚山、音羽山、東福山の三つの山の総称

特別な価値と重要性

- 気象変動や社会経済の変化に適応しながら、世代を越えて食料と生計を保障。レジリエンスに優れたシステムであり、世界各地で自然災害が頻発する状況下、その現代的意義は大きい
- SDGsへの貢献が期待され、Eco-DRR^{※2}等の先進事例であり、中山間地域における持続可能な農林業システムと評価

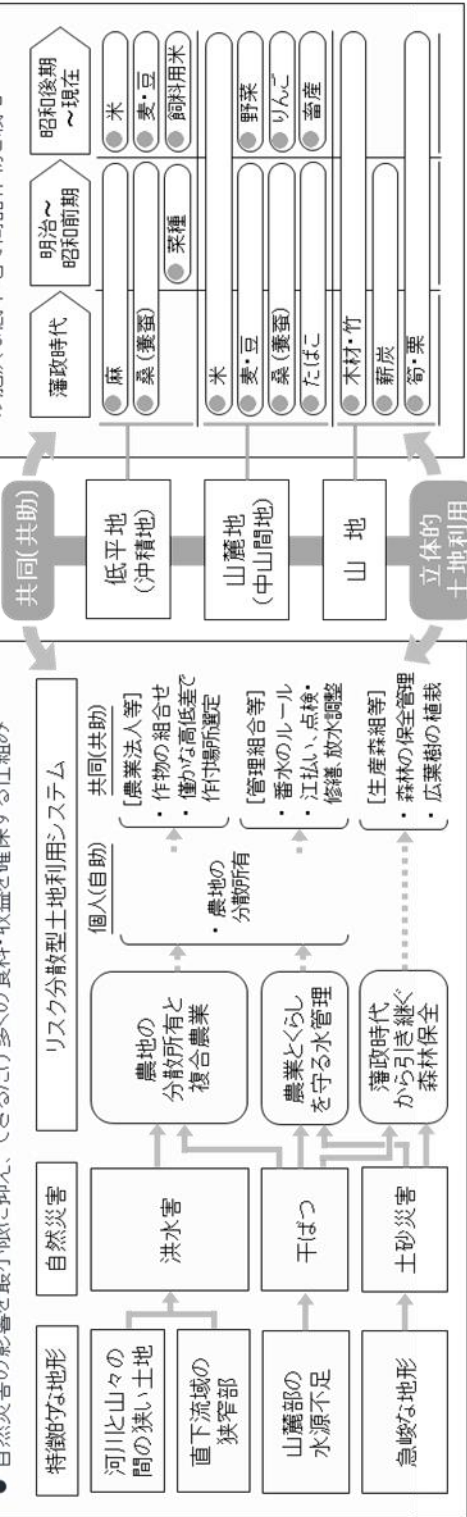
※2 Eco-DRR：生態系を活用した防災・減災(Ecosystem-based disaster risk reduction)

伝統的な知識システム

- 当地域の農家は、藩政時代から、山麓地と低平地の双方に土地を分散所有し、複合農業を営むとともに、共同(共助)の精神を礎とし、水利施設の管理や森林の保全に取り組む
- 自然災害の影響を最小限に抑え、できるだけ多くの食料・収益を確保する仕組み

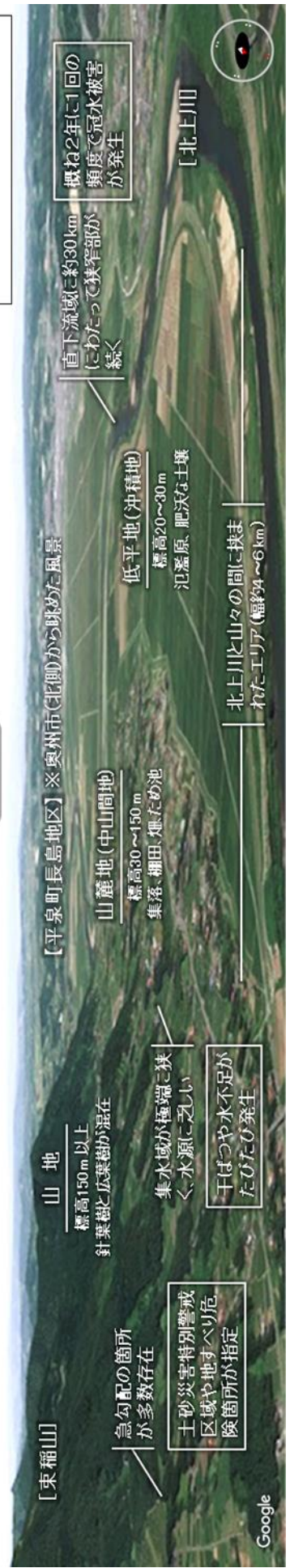
食料と生計の保障

- 時代変化に対応しながら、主に山麓地で食料(米等)を確保し、水害リスクを抱えるものの肥沃な低平地で商品作物を栽培

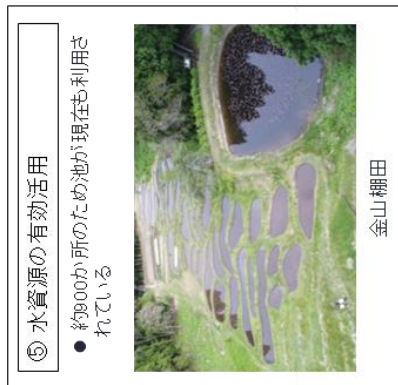
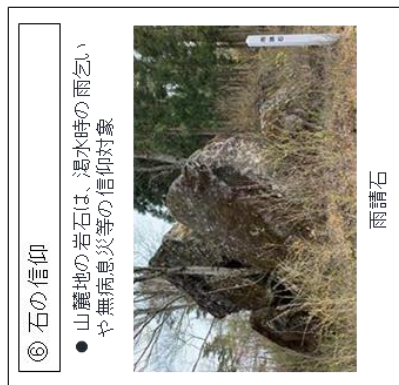
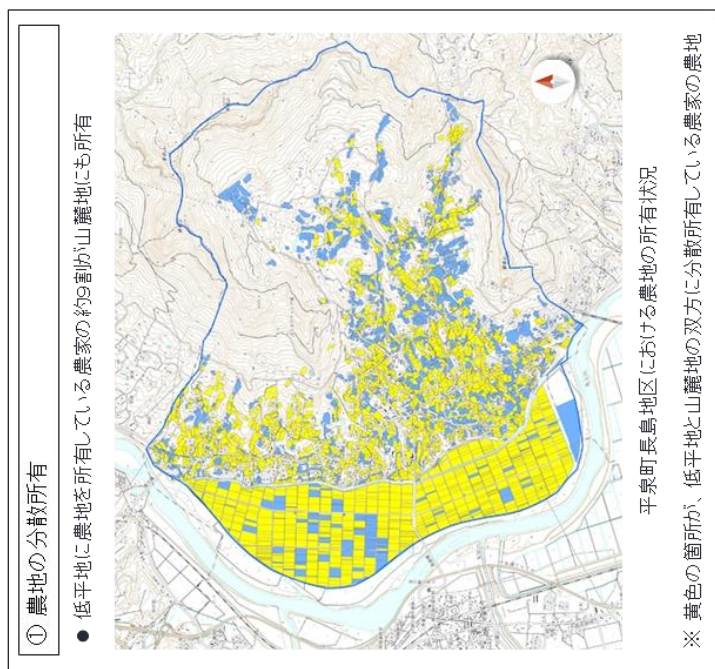


地域の特徴

- 農業生物多様性
立体的な土地利用が育む多様な生態系
・ハクチョウ、マガモ、キキョウ、カラサデシ、水生昆虫 など
- 文化・価値観・社会組織
現在も守り継ぐ石の信仰と農村文化、奥州藤原氏の関わり
・巨岩信仰(雨乞い、無病息災)
・岩石利用(棚田の石垣)
・経塚山と月山神社 など
- ランドスケープ
地域の象徴として親しまれる東福山と北上川
・西行(山家集)
「ききもせず 東福山のさくら花 吉野の外にかかるべしとは」
- 多様な主体の参画
地元・都市の住民や企業等による地域活性化と森林保全活動
・ライス・アート in ひらいずみ
・イロハモミジの森 など
- 6次産業化の推進
地域資源を活用した農業法人や女性団体等による事業化の取組
・キッチンあごづ(コロッケ)
・アグリ平泉(パン、ワイン)
・産直あいあい など



いのちをくらし
災害から生命と生活を守り未来へつなぐ「東稲山麓地域の災害リスク分散型土地利用システム」



目次

1	世界及び日本においての重要性.....	9
	パートA 特別な価値及び特徴.....	9
	パートB 歴史的な関連性.....	25
	パートC 現代的な関連性.....	31
	パートD 比較分析.....	33
2	認定地域の特徴	
	(1) 食料及び生計の保障.....	37
	1) 災害を乗り越えるための複合農業の歴史.....	37
	2) 災害を克服するための営農技術.....	38
	3) 農業と生活を支える山地.....	39
	(2) 農業生物多様性.....	41
	1) 立体的土地利用による生物多様性.....	41
	2) システムと関わりの深い地域資源.....	44
	(3) 地域の伝統的な知識システム.....	46
	1) 土地の所有と利用の実態.....	46
	2) 災害のリスク分散.....	46
	(4) 文化、価値観及び社会組織.....	51
	1) 災害や苦難を乗り越えるためのコミュニティの継承.....	51
	2) 災害や苦難を乗り越えるための農村文化の継承.....	56
	3) システムを支える社会組織.....	58
	(5) ランドスケープ及びシースケープの特徴.....	60
	1) 立体的な土地利用が生み出す東稲山ランドスケープ.....	60
	2) 地域の象徴として親しまれる東稲山と北上川.....	62
	(6) 変化に対するレジリエンス.....	63
	1) 自然災害や社会経済への適応.....	63
	2) 生態系の変化に対する適応.....	63

（７）多様な主体の参画.....	64
1）文化をつなぎ、地域を守る仕組み.....	64
2）企業等と連携した地域の活性化.....	65
（８）６次産業化の推進.....	67
1）地域資源を生かした６次産業化の取組.....	67
2）関係機関・団体等による取組支援.....	68
3 添付資料.....	72

認定基準の各項目に係る農林水産業システムの説明

1 世界及び日本における重要性

東稲山麓地域は、岩手県の南端に位置する北上川流域の農村地域である。西側を流れる北上川と、東の東稲山を中心とする連峰に挟まれた標高差のある土地を立体的に活用し、北上川沿いの低平地（沖積地）と山麓地にある農地の複合的利用と、地域が一体となった水利施設（ため池、水路等）と森林の保全管理等を行ってきた。

これらの取組により、洪水害や干ばつ等の自然災害リスクを分散し、社会や環境に適応しながら何世代にもわたって、地域全体として、食料及び生計を保障してきた独自の農林業システムを作り上げてきたのである。

本システムは、現在まで脈々と引き継がれながら、独特のランドスケープを形成するとともに、豊かな伝統文化と自然生態系を育んできた。

本地域と同様の立地条件を有する国内の水害常襲地域には、同等のシステムは見当たらず、自然災害が頻発する現代において、未来へ受け継ぐべき重要なシステムである。

パートA 特別な価値及び特徴

1. 東稲山麓地域の地理的特性とシステム形成の背景

(1) 地理的・気候的特徴

当地域の西側を、東北地方最大であり、日本で第4位の総延長を誇る北上川が流れ、東側には、北上山地に属する標高595mの東稲山を中心とした連峰が形成されている。北上川から東稲連峰まで、水平距離で約4～6km圏内の狭いエリアに、低平地と山麓地、山地が存在し、生活の拠点となる集落は山麓地に点在している（写真1）。



写真1 北上川と東稲山麓地域 ※奥州市から平泉町長島地区を眺望

北上川は岩手県内陸部の幾多の大小支川を合わせて流下するが、北上川流域の月別降水量は7～9月が多く、洪水のほとんどがこの時期の降雨によるものである。

北上川は、比較的勾配が緩やかであるが、当地域にさしかかる流域は、川が蛇行し、勾配の急変する場所であり、かつ、直下流部に約 30km にも渡って狭窄区間を抱えていることから、洪水が発生しやすい地域となっている（写真 1 及び図 2）。

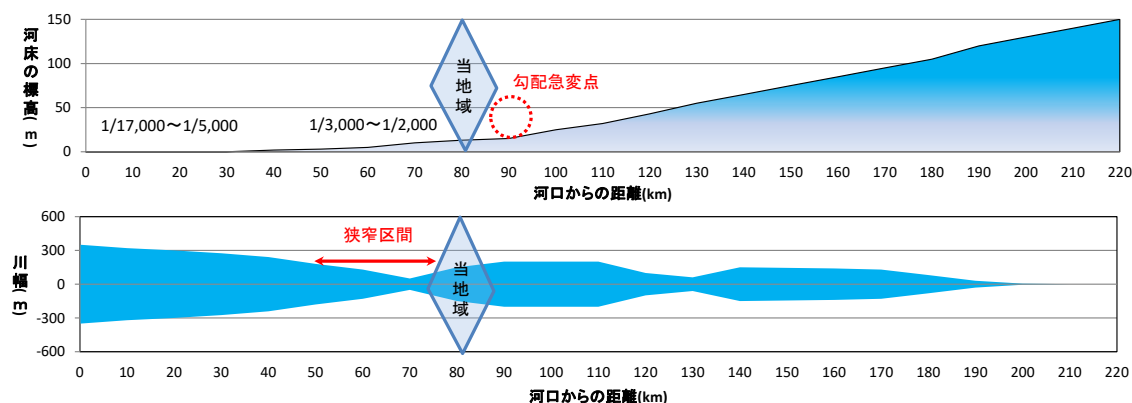


図 2 当地域が洪水害となる地形要因

出典：「北上川水系河川整備計画」国土交通省東北地方整備局 岩手河川国道事務所
「図 北上川の河床勾配と川幅」を加工して作成

北上川の洪水の記録によると、当地域は 1600 年以降の 420 年間で 178 回、明治時代以降でも 73 回(概ね 2 年に 1 回の計算)もの洪水による被害が確認されている（表 3、写真 4 及び 5）。

表 3 近年の主な洪水

年月	気象要因	狐禅寺地点 ^{※1} 最高水位(m)	被害額 ^{※2}
昭和 22 年 9 月	カスリン台風	16.89	約 54 億円
昭和 23 年 9 月	アイオン台風	14.89	約 127 億円
昭和 56 年 8 月	台風 15 号	12.51	約 32 億円
平成 2 年 9 月	台風 19 号	11.03	約 203 億円
平成 10 年 8 月	前線＋台風 4 号	11.14	約 242 億円
平成 14 年 7 月	台風 6 号	13.51	約 705 億円
平成 19 年 9 月	秋雨前線	12.18	約 79 億円
平成 23 年 9 月	台風 15 号	9.54	約 2 億円

※1 狐禅寺地点：氾濫警戒水位(17.10m)、避難判断水位(16.80m)、氾濫注意水位(7.00m)

※2 被害額：岩手県全域のデータ

出典：「一関遊水地事業 北上川」国土交通省東北地方整備局 岩手河川国道事務所「北上川の洪水の歴史」を加工して作成



写真4 昭和22年カスリン台風時の一関中心部(1階部分が浸水)



写真5 平成14年7月洪水時の状況(地域内の沖積地はほぼ浸水)

他方、低平地に隣接する山麓地は、洪水の影響は受けないものの、大きい支川がないことから水源に乏しく、また集水域も狭いため、干ばつや水不足などの災害に悩まされてきた。さらに、山麓地の上部に広がる山地では、豪雨による土砂災害のリスクを抱えてきた(図6)。

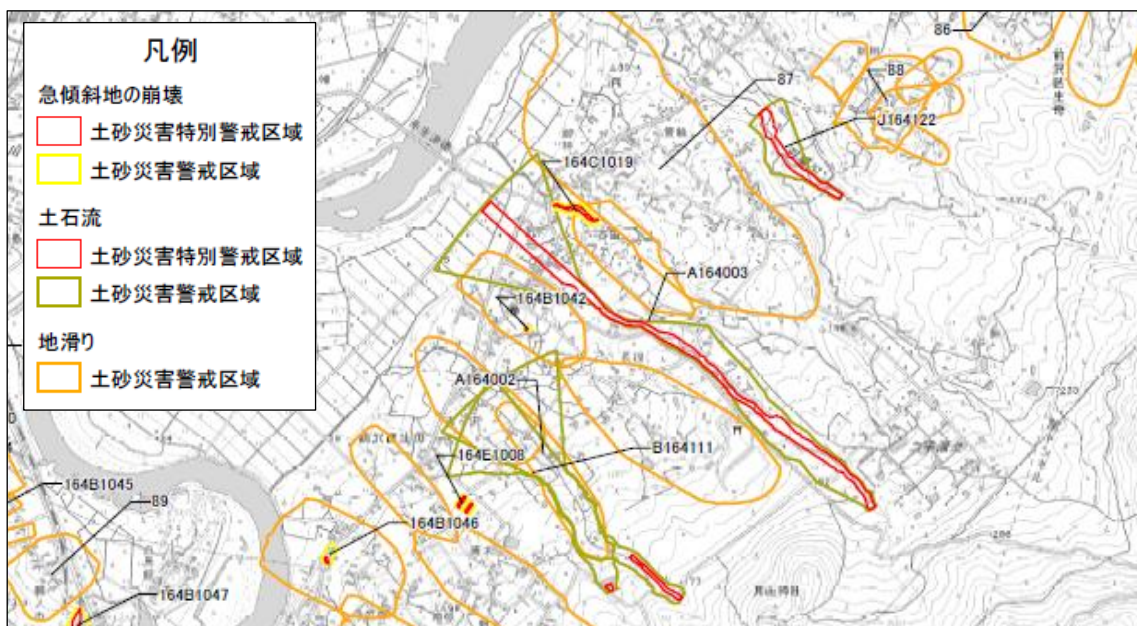


図6 土砂災害警戒区域等位置図(奥州市生母地区) 出典:岩手県県土整備部

(2) 社会経済的特徴

当地域では、江戸初期には、山麓地の田畑や隣接する北上川沿いの低平地に、自給作物(米等)、麻や菜種などの商品作物を作付けし、複合農業を営んでいた。

昭和に入り、低平地の畑で開田が進められるが、昭和22年、23年と連続して襲来したカスリン・アイオン台風による大洪水を契機に(表3、写真4)、昭和49年

から国の治水事業が進められ、当地域の低平地の一部が遊水地とされ、その後のほ場整備事業により、低平地のほ場は大区画に整備されている。

現在、当地域の農家戸数は 1,143 戸で、このうち販売農家数は 804 戸であり、家族経営が大半で、経営耕地面積が 3 ha 未満の小規模な農家が 92%を占める。

低平地の農地においては、集落営農組織が利用調整を図り、担い手によって、米を中心に麦や大豆等の土地利用型作物を商品作物として作付けし、生産性の高い水田農業が展開されている。一方、山麓地では、自給用の米のほか、りんごや野菜などの園芸や肉用牛などの畜産が営まれている（表 7 及び 8）。

表 7 販売目的の作物・家畜の作付面積・飼養頭数

作 目	経営体数	面積・頭数
稲	733 経営体	810ha
豆類	34 経営体	42ha
野菜	83 経営体	5ha
果樹	27 経営体	32ha
その他	86 経営体	40ha
肉用牛	94 経営体	972 頭

出典：2020 農林業センサス

表 8 地域内の営農事例

区分	個人 A (労働力 3 人)	個人 B (労働力 4 人)	農業法人 C (労働力 15 人)
低平地	100a (米)	70a (米)	57ha (小麦)、10ha (大豆)、31ha (米)、1ha (ねぎ)、2ha (牧草)
山麓地	80a (米)、30a (野菜)、肥育 20 頭	1.4ha (米)、19a 野菜	1.6ha (ぶどう)
山地	3ha (スギ)	1ha (スギ)	—

なお、昭和 49 年から実施されている国の北上川総合治水事業では、当地域の低平地 630ha を含む 1,450ha の水田が遊水地とされた。市街地の洪水被害は大幅に軽減されたが、当地域の低平地については依然として洪水害のリスクを抱えたままとなっている。

2. 災害に適応した伝統的な土地利用

当地域では、個人の立体的土地利用を支える共同の仕組みがあり、さらに、それぞれの災害に対応したリスク分散を「重層的」に行っている。

(1) 土地の所有と利用

土地の所有と利用は個人を基本（図9-1：ピンク色部分）としながらも、山地から低平地に広がる、立体的な土地利用を支える共同・共助の仕組みが、当地域にはある（図9-2：緑色部分）。低平地での農地の利用調整は営農組合が担い、麦や豆などの転作作物の作付は農業法人が担っている。また、山麓地のため池などの水利施設や山地の森林は、地域の共有財産という意識の下、共同で管理が行われている。

このように、様々な共同・共助の仕組みが、当地域の土地利用を立体的なものにしているのである。

	<所有>	<利用>	<調整・管理>
低平地	個人 	米 ：個人・担い手 麦・豆等 ：農業法人(委託)	営農組合等 農地の 利用調整
山麓地	共同 	米・園芸・畜産 ：個人・担い手	管理組合等 水利施設の 維持・ 管理
山地		木材・栗・竹 ：個人・共同	生産森林組等 森林の 保全管理

図9-1 土地の所有と利用（個人：ピンク色部分）

	<所有>	<利用>	<調整・管理>
低平地	個人 	米 ：個人・担い手 麦・豆等 ：農業法人(委託)	営農組合等 農地の 利用調整
山麓地	共同 	米・園芸・畜産 ：個人・担い手	管理組合等 水利施設の 維持・ 管理
山地		木材・栗・竹 ：個人・共同	生産森林組等 森林の 保全管理

図9-2 土地の所有と利用（共同：緑色部分）

(2) 災害のリスク分散

災害のリスク分散についても、個人と共同の取組がある（図 10）。

農地の分散所有が個人の取組で、洪水リスクがあっても収益性のある肥沃な低平地と、洪水の恐れのない山麓地と、両方に農地を所有している。

共同の取組として、低平地では、農業法人が作目の組合せや作付場所の工夫を行いながら洪水害に備えている。また、山麓地では、ため池管理組合が点検・修繕を行い、山地では生産森林組合が災害危険箇所の森林保全を行いながら、干ばつや土砂災害に備えている。

<災害>		<個人（自助）>	<共同（共助）>
低平地	洪水害	農地の分散所有	農業法人等 ・作物の組合せ(米+麦・豆等) ・作付場所の選定 高地：主食用米、 低地：麦、飼料用米等
			管理組合等 ・番水のルール ・江払い、点検、修繕 ・放水量の調整
山地	土砂災害		生産森林組等 ・森林の保全管理 ・災害危険箇所への 広葉樹植栽

図 10 重層的なリスク分散

a) 洪水害に適応した農地利用と営農の知恵

i) 農地の分散所有

洪水害の常襲地である当地域においては、洪水害のリスクを有するものの肥沃な土壌の低平地と、水害の心配のない山麓地の農地の分散所有が古くから行われており、例えば、土地資産の譲渡における「岡田（山麓地の田）3反、岡畑（山麓地の畑）3反、谷起（低平地）1町、山林3町」の規範が今なお受け継がれている。

現在、低平地の農地を所有する農家の87%が山麓地にも農地を所有しており、これらの農家が所有する低平地と山麓地の農地はほぼ同じ面積となっている（表 11 及び 12、図 13 及び 14）。

農地の分散所有は、個々の農家の取組に留まらず、共同・共助の精神を礎に、地域全体のリスク分散の取組として確立し、現在まで継承されている。

表 11 低平地と山麓地の農地の分散所有状況

地区	低平地所有 農家（戸）	うち山麓地所有 農家（戸）	分散所有率 （％）
一関市舞川地区	245	207	84.5
奥州市生母地区	397	352	88.6
平泉町長島地区	448	391	87.3
計	1,090	950	87.2

出典：一関市、奥州市及び平泉町調べ（令和3年度調査）

表 12 分散所有している農地面積

地区	低平地 (ha)	山麓地 (ha)	計 (ha)
一関市舞川地区	169.0	165.5	334.5
奥州市生母地区	232.8	315.2	548.0
平泉町長島地区	297.2	293.1	590.3
計	699.0	773.8	1472.8

出典：一関市、奥州市、平泉町調べ（R3 年度調査）

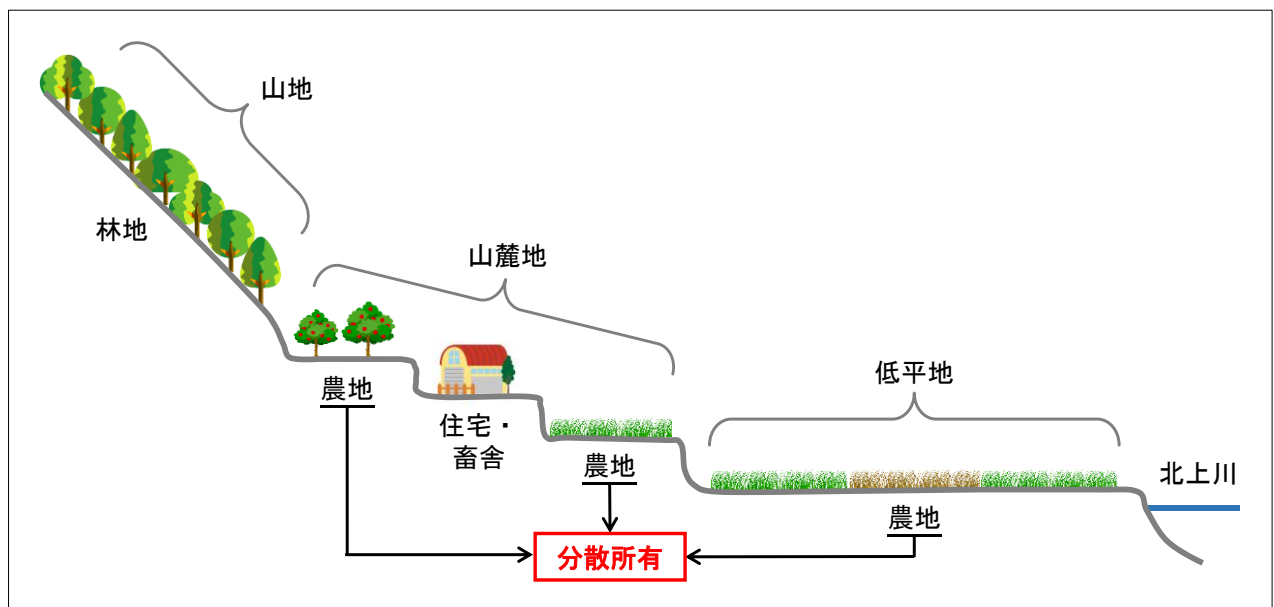


図 13 農地の分散所有の概念図

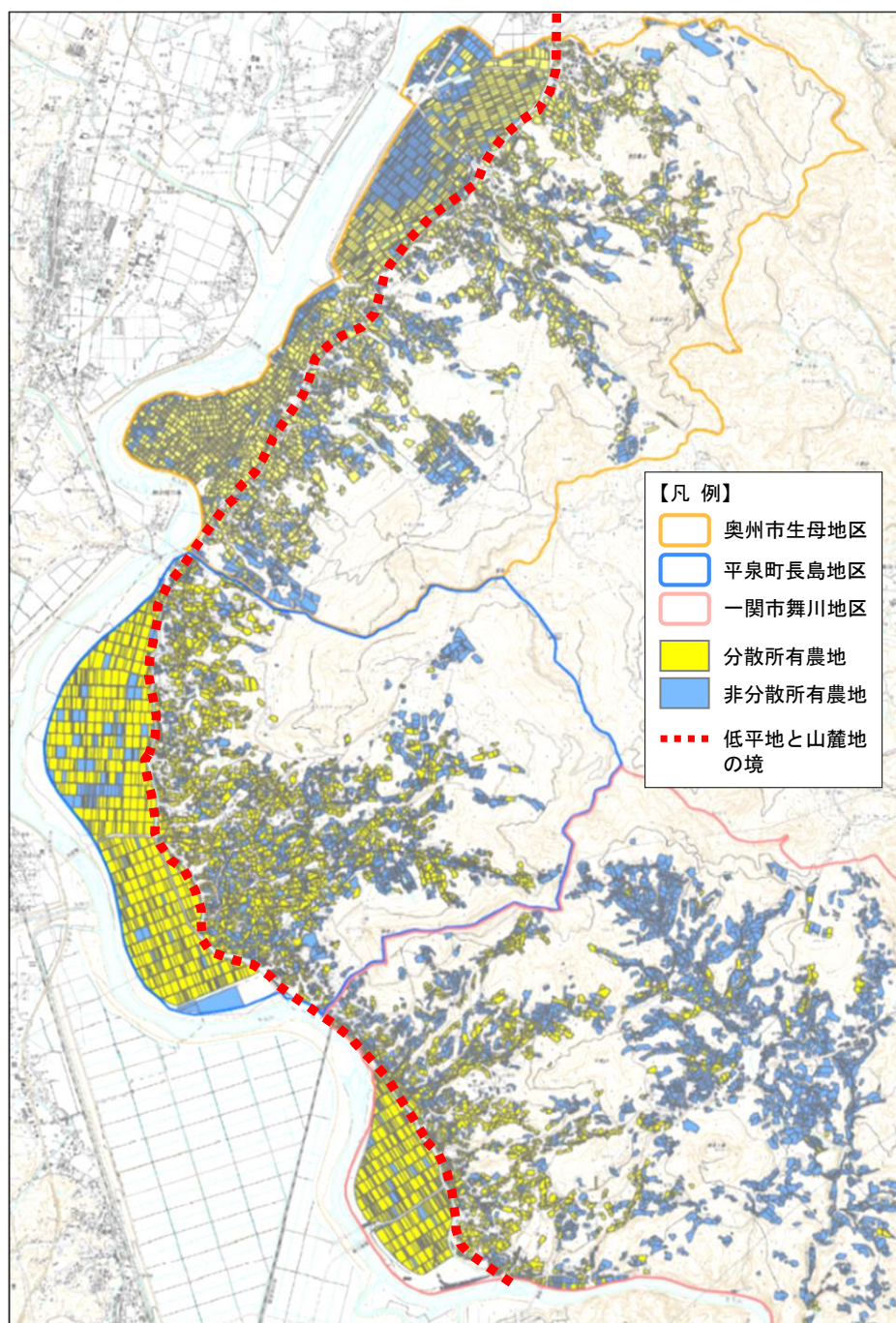


図 14 現在の農地の分散所有状況

ii) 営農の知恵

当地域の低平地では、洪水害のリスク低減を図るため、収穫時期が異なる作目の組合せや、微妙な高低差によって作目の作付場所を選定するなどの工夫が行われている。

洪水害の多くが降水量の多い7～9月に発生しており、被害をできるだけ抑えるため、収穫期が異なる作目を組合せて作付けしている（図 15）。

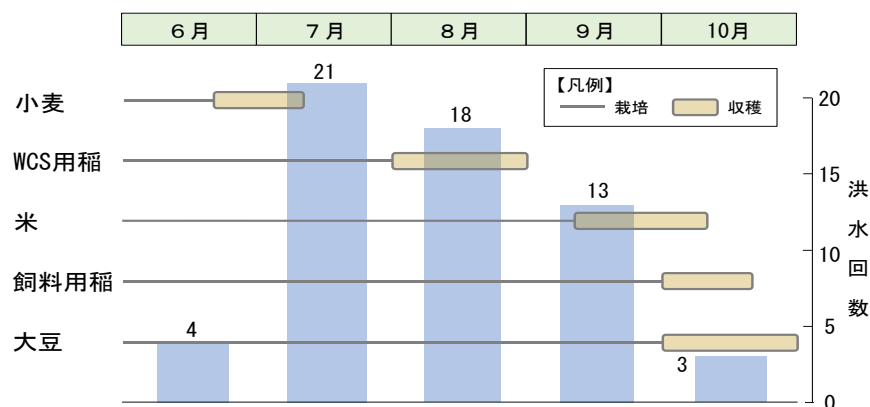


図 15 収穫期の異なる作目の組合せ

また、北上川の狭窄部が当地域の下流（南側）に位置していることから、洪水が発生する際には、下流側の低地から浸水してくる。このため、土地のわずかな高低差によって作付する品目を選定しており、例えば、商品性の高い主食用米を比較的標高の高い農地に作付けし、低い農地や浸水し易い流域の洪水害の発生時期を避けて収穫できる麦や飼料用米等を作付けしている（写真 16、図 17）。

このように、長年の経験を生かした災害に適応した営農の知恵が伝統的知識として継承されている。



写真 16 令和元年 10 月洪水時の状況

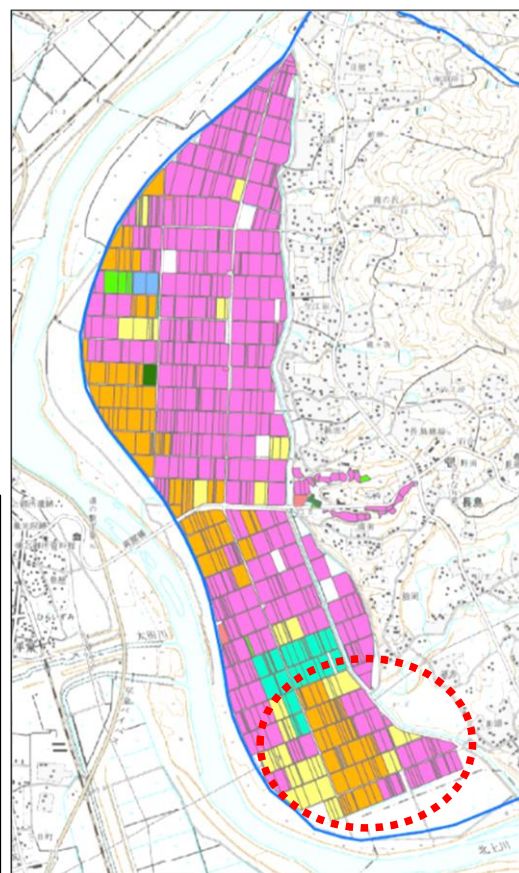


図 17 低平地（沖積地）の作付状況
（平泉町長島地区）

iii) 洪水害による恩恵

当地域の農業は洪水害の歴史とともに営まれており、北上川が氾濫するたびに上流から運ばれる土が堆積し、川沿いの低平地に肥沃な農地が形成されている。

岩手県農業研究センターの調査によると、洪水の際に栄養分の高い土が堆積されていることが確認されており、当地域の小麦の単位収量は県平均を大きく上回っている（表 18 及び 19）。

当地域の農家は、低平地の肥沃な土壌がもたらす恩恵を理解し、洪水害による減収にたびたび見舞われながらも、長年にわたって耕作し続けてきたのである。

表 18 冠水被害地域に流入した土壌の特徴

区分	可給態窒素 (mg/100g)	C E C※ ² (塩基置換容量) (me/100g)
洪水で堆積した土	17.1	23.8
元々の削土	13.1	22.7

※ 1 可給態窒素：土壌中の窒素濃度で土壌の肥沃度を表す

※ 2 C E C：この数値が高いと保肥力が高い

出典：平成 14 年度岩手県農業研究センター試験研究成果

「平成 14 年 7 月の台風 6 号による水稻冠水被害の解析
(4)冠水被害地域に流入した土壌の特徴」を抜粋

表 19 小麦の収穫量の比較 (kg/10a)

区分	H28	H29	H30	R 元	R2
県平均	219	203	167	266	220
当地域 ※	482	405	317	404	330
対比 (%)	220	200	190	152	150

※ 当地域のデータは農事組合法人アグリ平泉の実績

出典：県平均データは作物統計（農林水産省）

b) 干ばつ等に対応した水管理

i) ため池の造成

北上川の洪水から生命と財産を守るため、生活の拠点を山麓地に置いていたが、そこには水源となる大支川がなく、水は湧き水や沢水、それらを再利用するため池に限られることから、干ばつ時の生活用水や農業用水の確保等に苦労が絶えなかった。

そこで、山麓地の貴重な水資源を棚田等の農地へ供給するため、森林内の湧

き水から平等に分配する導水路を構築するとともに、安定した水源を確保するため、一つの谷筋にいくつものため池が造られた。

「安永風土記」に記載されているため池・堤が継承され、現在では、約 900 カ所ものため池・堤が造成されている（表 20、図 21）。

なお、豪雨の際には、急激な出水とならないよう土のう等を使用してため池の放水量を調整し、下流域で土砂が崩れないように地域全体で危機管理を行っている。

表 20 東稲山麓地域におけるため池等^{※1} (箇所)

区分	安永風土記(1772 年)による記録		ため池諸元調査 ^{※2} 結果(2017)
	堤(ため池)	堰	
一関市舞川地区	79	17	136
奥州市生母地区	72	21	539
平泉町長島地区	48	20	201
計	199	58	876

※1 水量の確保と水温上昇を目的として設置

※2 東稲山麓地区ため池諸元調査(平成 28 年度：北上川東部土地改良区)

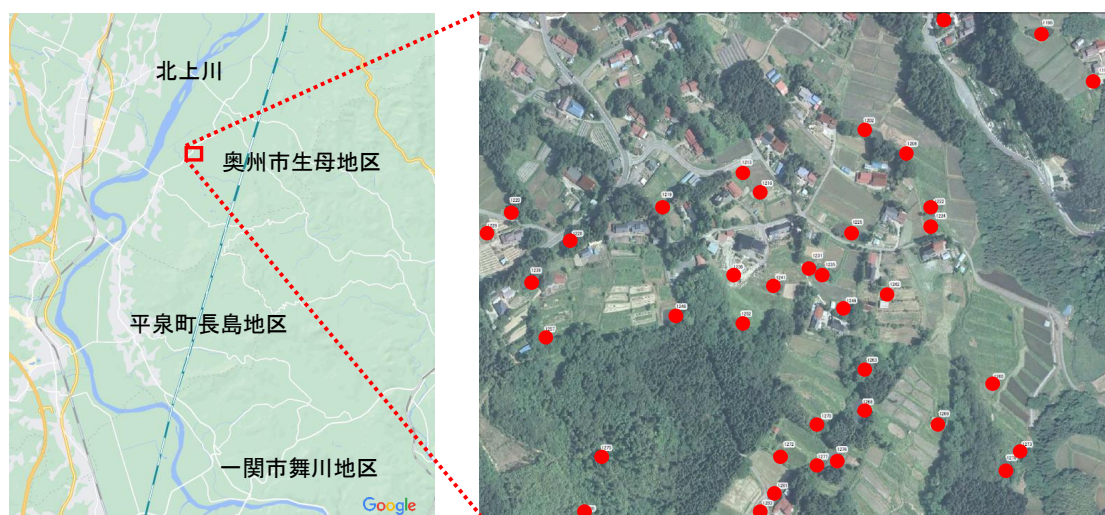


図 21 ため池位置図(奥州市生母地区を一部抽出)

ii) 水利施設の維持・保全

水の分配は、「番水」と呼ばれるルールに従って、地域内に満遍なく、公平に供給されており、現在でも、山麓中腹まで開墾された棚田を含む貴重な農地に利用されている。

干ばつ時の対応としては、受益者によって、水路の水の流れを良くするための江払い（えばらい）のほか、水漏れを防ぐ点検・修繕が現在も行われている。

昭和 30 年代の開田によって、山麓地の農業用水が不足するようになると、沢なりに揚水場を設け、北上川から水を引き、受益者が、水系ごとに昔ながらの水路等を維持・活用しながら、水田に水を供給している（図 22）。

現在においても、湧き水や沢水、ため池などを水源とする山麓地の農地が多いことから、水利施設の維持・保全活動を地域が共同で行っている（図 23）。

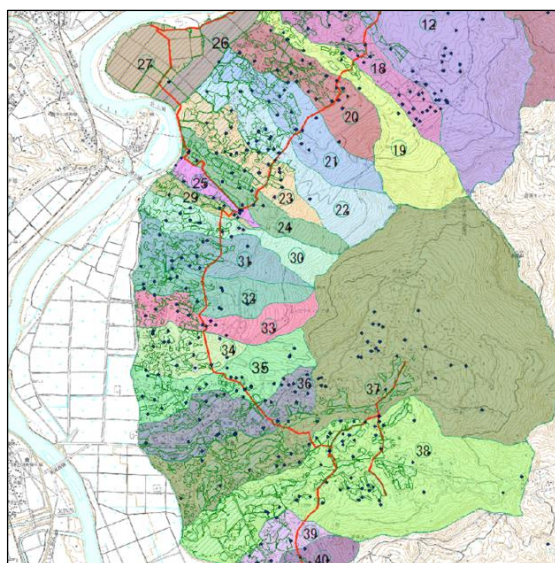


図 22 少量の沢水やため池を最大限に活用するための用水配分システム（一部抜粋）

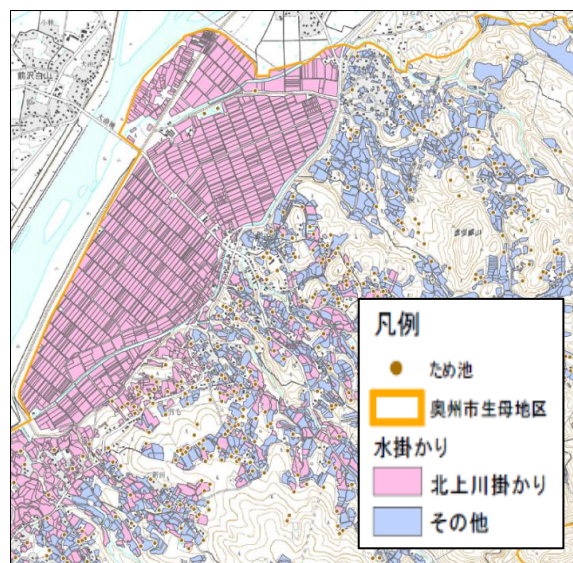


図 23 現況用水受益図(奥州市生母地区)

※ 沢水の水系（色別）を利用するとともに、ため池（●印）や水路等の維持補修を行いながら、棚田等の農地（緑色斜線部）に効率的に用水を供給

c) 土砂災害対策と水源涵養のための治山管理

森林資源の確保と恒久的な維持のため、藩政時代、仙台藩が森林を管理保護する公益的な取組として領内に「御林」を設けていた。この「御林」の考えが今もなお継承されており、奥州市生母地区では、森林面積 1,400ha のうち半数の 700ha が共有林または生母生産森林組合の所有となっている。

生母生産森林組合では、土石流災害の防止と水源涵養を目的に、災害危険箇所のスギ林を皆伐し、広葉樹（イロハモミジ）を植樹している（図 24 及び 25）。

なお、この取組は、当初、「イロハモミジの森づくり」として、地元小学校の卒業記念植樹として始められ、現在はいわて生協と連携した取り組みに発展している（写真 26）。

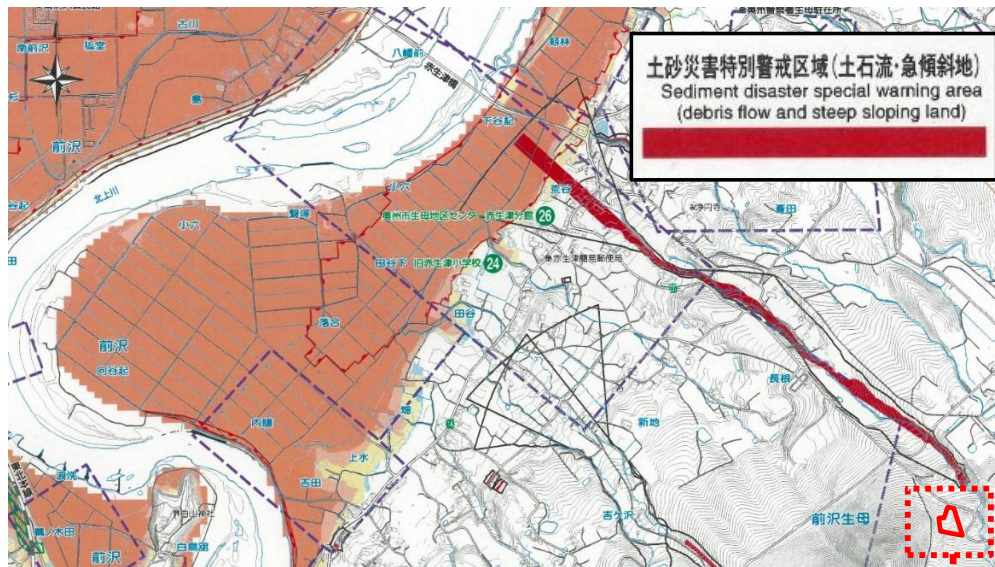


図 24 奥州市生母地区の土砂災害特別警戒区域とイロハモミジの森
赤線枠内：イロハモミジの森（奥州市ハザードマップを一部加工）

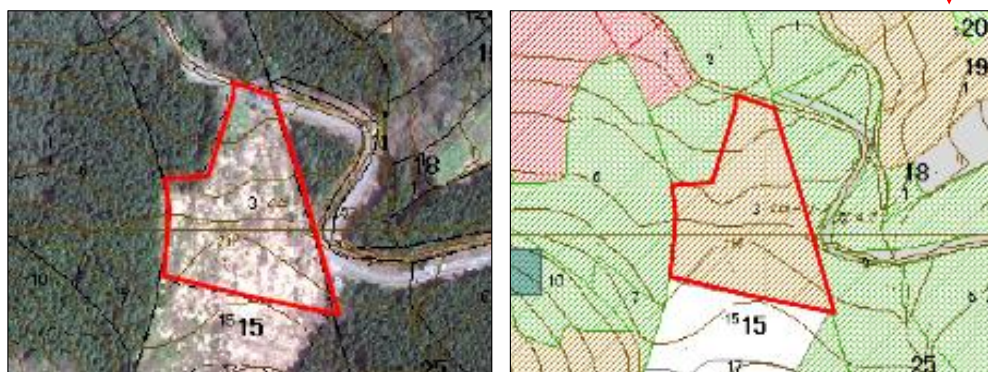


図 25 イロハモミジの森の位置図（森林資源管理図を一部加工）
左：オルソ画像、右：樹種別
※ イロハモミジの森周辺はスギ（緑色）とアカマツ（赤色）が植えられている。



写真 26 イロハモミジの森

(3) 独自の知識システム

北上川から東稲山を中心とした連峰までの水平距離で4～6kmの狭いエリアに、河川沿いの低平地、山麓地、山地が存在する特徴的な立地条件にあつて、20～500mの標高差のある土地を立体的に活用し、洪水害、干ばつや水不足、土砂災害等の複数の自然災害のリスク分散を図るため、共同・共助の精神を礎として、地域一体となった重層的な取組を積み重ね、独自の知識システムを形成するに至っている。

このように、複数の自然災害を総合的に克服する取組事例は、国内の水害常襲地（青森県南部町、山形県大石田町、愛媛県大洲市、熊本県八代市他）には見当たらず、自然災害が頻発する現代において、未来へ受け継ぐべき重要なシステムである。

3. 災害リスクの分散による食料及び生計の保障

(1) 米と商品作物による複合農業

東稲山麓地域では、古くから、主に山麓地の農地では、米などの食料を確保し、水害リスクを抱えるものの肥沃な低平地の農地では、商品作物を作付けしていた。

たび重なる洪水害や干ばつ等の自然災害を克服するため、地域一体となって、災害リスクを分散する土地利用システムが構築されたことにより、自然災害や社会経済の変化に柔軟に対応しながら、長年にわたって、米と商品作物を組み合わせた複合農業が継承され、食料及び生計の保障が維持されている。

(2) 6次産業化の推進

こうした知識システムを作り上げる過程で培った共同・共助の精神が受け継がれ、現在においては、農業法人や女性団体等が、地域の農産物等の地域資源を活用した6次産業化の取組を積極的に展開し、地域の所得向上に大いに寄与している。

4. 立体的な土地利用が育む多様な生態系

(1) 良好な里山環境

東稲山麓地域においては、自然災害に対応し、低平地、山麓地及び山地を立体的に利用し保全することで、多様な生態系を育んできている。

一例として、生態系の上位に位置するサシバは、春に南西諸島から当地域に渡来し、環境省の資料によると、「谷底の平地が水田になっていて周囲を丘陵林が囲んでいる谷津田（やつた）と呼ばれる里山環境」に生息している。

山林に営巣し、「繁殖期前期（早春～初夏）は、水田等の草丈の低い場所でおもに両生類や爬虫類等を捕食し、繁殖期後期（初夏～夏）には、林冠で昆虫類等を捕食する」ことから、平地と山麓地の「両方の採食環境が必要であり、人によって適正に管理されている谷津田のある場所」にのみ渡来して来ると言われている。サシバの生息は、山地、山麓地及び低平地において、「里山環境の保全状態が良好であること」、「多様性の高い生態系が保全されていること」を示す証とも言われている。

※）「」内 サシバの保護の進め方（平成25年12月、環境省自然環境局野生生物課）から引用

(2) 人間の生活と共生する多様な動植物

当地域には、環境省や県の絶滅危惧種に指定される希少な動植物をはじめ、660 種以上の動植物が生息している。

北上川沿いの低平地は、ほ場整備事業により灌漑施設が整備され、畑地から水田へ転換したことによって、畑作では見られなかったハクチョウやマガンなど野鳥の中継飛来地になっている。

山麓地では、棚田やため池の周辺において、環境省レッドリストの絶滅危惧種等に指定されているキキョウ、カワラナデシコ等の「秋の七草」が大切に管理されている。また、希少な浮葉植物ヒメビシ、トウキョウダルマガエルなどが生息しており、山地においても、キクタニギク等の希少種が確認されるなど、当地域では、人間の生活と共生する豊富な生物の生息環境が維持されている（図 27）。



図 27 里山環境が育む豊かな生態系

5. 受け継がれる信仰と独特のランドスケープ

(1) 巨岩信仰

束稲山が連なる北上山地は、堆積岩と花崗岩で形成され、山麓地には多数の岩が出土している。地域内には、信仰の対象とされる巨石が数多く残っており、地域コミュニティの結束に寄与している（写真 28）。

山麓地には大支川がなく、干ばつ時には大きな被害をもたらすことから、雨乞いを祈念する神楽を奉納したとされる「雨請石」や「箱石」などの史跡が数多く残され、巨石信仰が地域住民にとって重要な文化として位置づけられている。なお、出土した岩石のうち小さなものは棚田の石垣に利用されている。

住民の減少・高齢化が進行し、コミュニティの脆弱化が懸念される中で、当地域においては、伝統的知識システムを育んだ共同・共助の精神に基づき、巨石に纏わる祭りや神楽等は世代間交流により次世代の子供たちに継承されている。



写真 28 雨請石

(2) 地域の象徴として親しまれるランドスケープ

特徴的な山容を持つ束稲山を中心とした山々、山麓に展開する集落と棚田、その下を流れる北上川と低平地に広がる水田の風景は、古くから地域の象徴として親しまれており、対岸に位置する世界遺産「平泉」から眺めた景観は和歌などに詠まれている（写真 29）。

近年は、ボランティアなど地域外の住民との連携による棚田や西行桜の森、イロハモミジの森などの自然・景観を守る取組が行われており、さらなる維持・発展が期待される。



写真 29 束稲山麓と北上川沿いの低平地からなる独特なランドスケープ

パートB 歴史的な関連性

1. 土地利用の歴史

(1) 地域農業の起源

東稲山麓地域には、縄文時代の土器・石器が多く出土する遺跡が発掘されており、3千年前には、既に集落が存在していたものと考えられる。また、北上川流域の低平地においても、10世紀まで遡る農地の遺構が確認されており、古くから農業が行われていた地域である。

当地域は、平成23年に世界遺産に登録された「平泉」と、北上川を挟んで近接していることから、12世紀の平泉の発展を、食料や建築資材等の重要な供給元として支えていたと考えられる。

古来より、山麓に多い狭小な浸食谷を流れる湧水や天水を水源として田を、谷を挟む高地を畑として拓き、この地を居住の場としてきた。山麓各地にみられるため池と用水路は水を効率的に利用するために作られ、山麓に接する山地の森林は、生活資材を調達する場であった。

江戸初期に、仙台藩によって北上川の河港が整備されると、農産物を移出する条件が整い、山麓地の田で自給作物、畑では商品作物を生産するようになり、その後、隣接する北上川沿いの低平地（沖積地）も利用しながら、複合農業を確立していく。

17世紀後半から18世紀前半に、当地域の状況を描いた古絵図がいくつか残されている。絵図には、北上川の谷起（洪水の際の冠水地帯）や中洲、棚田、畑地、沢水、ため池、御林（仙台藩が直接、管理保護した山林）、樹木、寺社、家等が描かれており、当時の状況を知ることができる（図30）。

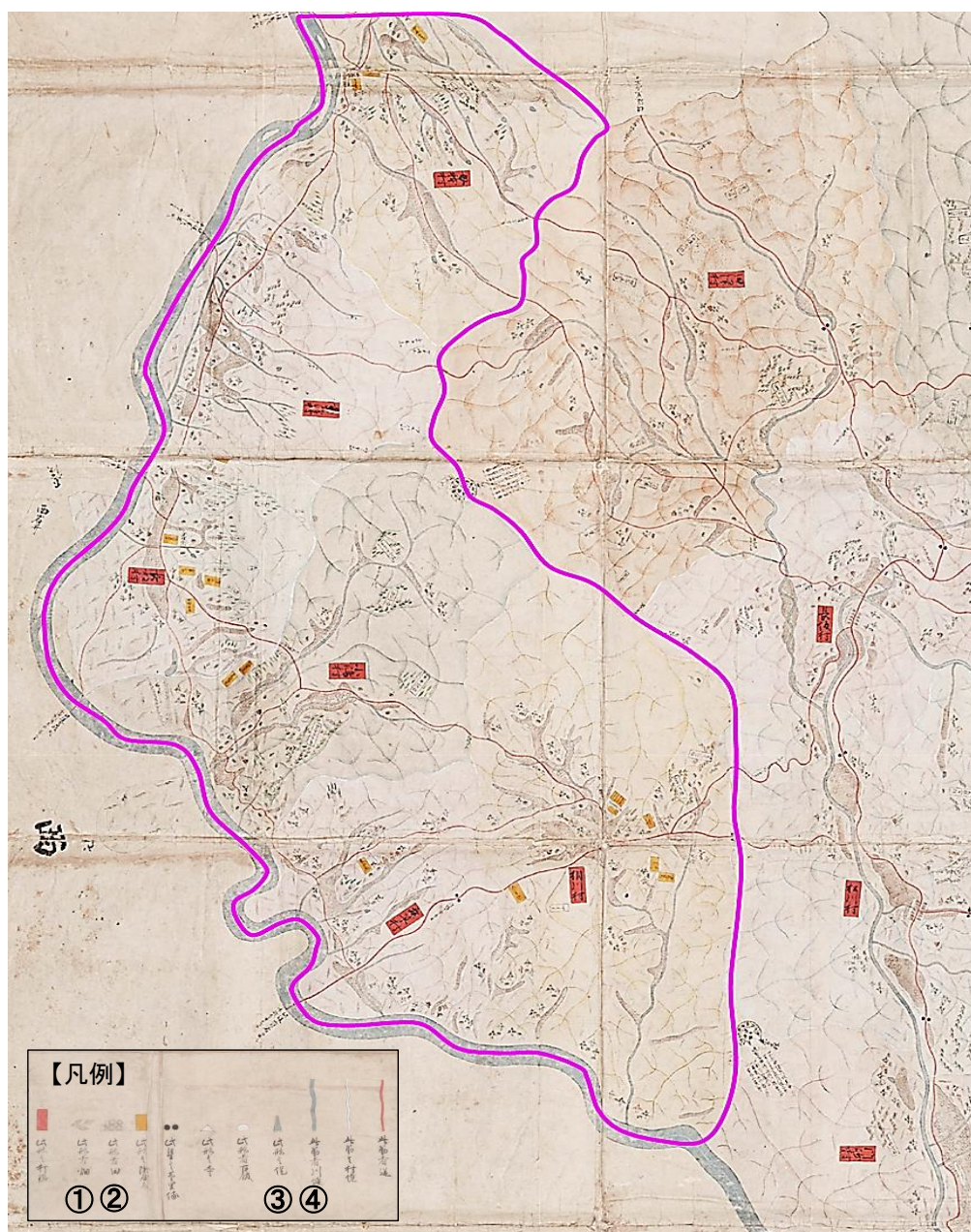
(2) 洪水害に適応した農地利用

当地域は、北上川の氾濫により、1600年以降に178回もの洪水被害が確認されている。源義経の家来の清悦（せいえつ）が記した「清悦物語」には、「文治5（1189年）閏4月28日、北上川洪水に因り、甚だしき湛水あり（平泉地域）」や、明治初期の岩手県河川調査書では、「建久3（1192年）、北上川にて20尺（6m）増水、堤防110間（約190m）破堤す（母体村）」と残されている。

このように、北上川沿いの低平地は、洪水害の常襲地であったことから、人々は「水害を恐れて田とせず、傾斜地帯から暫時開墾」していったという記録も残っている（「長島・風土記」）。一方で、洪水害のリスクは高いが、川の氾濫によってもたらされた肥沃な土地は貴重な農地であったことから、洪水に伴う河道の変遷によって変わる谷起や中洲を巡って、北上川の両岸の村でしばしば境界紛争が起きたという記録がある。

1660年頃、洪水によって北上川に約30haの中島が出現し、そのうち8haの谷起畑を赤生津村（現・奥州市生母地区）の農家が耕作していたが、1682年に河川西岸

これらの記録から、約 300 年前には、農家が山麓地に住居や農地を所有するほか、低平地に農地を分散所有し、その利用調整を集落や村単位で行っていたことがわかる。



※ 枠内(ピンク色)が東稲山麓地域



図 31 1731 年に作成された低平地の耕地図
※大石喜清氏（奥州市）所蔵絵図

また、当地域で 10 代以上続く旧家の土地所有状況を調べた結果、概ね 100 年以上前から、低平地、山麓地及び山地にそれぞれ土地を所有し、今日まで利用していることがわかっている（表 32）。

表 32 概ね 100 年継承されている旧家の土地所有状況

地区	氏名	低平地（沖積地）	山麓地（中山間）	山
一関市舞川	A 氏	和田62-3 他 2 筆	境40 他 3 筆	境37-1 他 8 筆
	B 氏	西中島157 他 1 筆	平90-1	平70 他 4 筆
	C 氏	河岸2-1 他11筆	河岸19-2 他 4 筆	河岸19-1 他 9 筆
	D 氏	土橋77-1 他 9 筆	山根114-5 他 6 筆	湯坪45-2 他 1 筆
	E 氏	—	平石23 他 9 筆	水無沢59-2 他21筆
奥州市生母	F 氏	—	笹森98 他 8 筆	笹森102-1 他 3 筆
	G 氏	—	長根19-1 他 5 筆	—
	H 氏	—	下沢田5-1 他 4 筆	天王27-1 他 1 筆
	I 氏	上谷起109 他 1 筆	壇ノ腰37-1 他 8 筆	下沢田34-3 他 4 筆
	J 氏	—	北羽毛71-11 他24筆	北羽毛71-1 他 7 筆
	K 氏	中道186-2	市ノ渡144-2 他 5 筆	市ノ渡70
	L 氏	—	地藏壇42	—
	M 氏	—	地藏壇18-53 他15筆	地藏壇18-3 他 2 筆
平泉町長島	N 氏	字沢口67 他 1 筆	字柳沢15 他 2 筆	字前林55 他 1 筆
	O 氏	字下古川31-1 他 7 筆	字二反田68 他 2 筆	字月館73-1 他 2 筆
	P 氏	字里前82 他 3 筆	字滝ノ沢52 他 4 筆	字滝ノ沢52-3 他 2 筆
	Q 氏	字里82 他 3 筆	字竜ヶ坂50-2 他 1 筆	—
	R 氏	字菊の沢49 他 9 筆	字矢崎44-1 他 1 筆	字石合43 他 3 筆
	S 氏	字出谷起170	字下田21-ア 他 2 筆	字小倉39
	T 氏	字覆盆子77 他 9 筆	—	字大槻田2-7 他 2 筆
	U 氏	—	—	字大槻田3-1 他 1 筆
	V 氏	字中島16 他 4 筆	字田頭2	—

- ・ 概ね 10 代以上続く旧家 22 戸を抽出
- ・ 法務局の旧土地台帳及び閉鎖登記簿を照らし合わせて確認

(3) ため池・堤の管理

山麓地では、貴重な水資源を棚田等の農地へ供給するため、森林内の湧き水を効率的に分配する水路を構築するとともに、安定した水資源を確保するため、約 900 カ所のため池・堤が造成されている（表 20：19 ページ）。

なお、18 世紀後半の「安永風土記」に記録されているため池・堤の多くは現在も継承されている（写真 33）。



写真 33 ため池の管理作業

一関市舞川地区では、この「安永風土記」にも記録されており、中世に築造された石製の水路が今なお保全・活用されている（写真 34）。貴重な沢水を地域内にまんべんなく供給するため、沢水の本流は残し、石製水路により分岐させるなど、先人の工夫の跡が残されている（写真 35）。



写真 34 森林内にある古い石製水路



写真 35 石製水路による沢水の分岐
○内：分岐点

(4) 災害対策と水源涵養のための治山管理

1698(元禄 11)年に当地域の状況を描いた古絵図「東山分間絵図」では、仙台藩が直接、管理保護した山林である「御林」が多数描かれており、古くから森林は大切に保全管理されている(図 36)。

「御林」は、藩の森林資源の確保と恒久的な維持のために各地に設置され、災害時には、住民を飢えや寒さから守るため、住居用の木材や薪炭等を供給するほか、治山や治水などの公益的な機能も有していた。「御林」は、これらの機能も継承し、後に「村有林」等から「共有林」へ移行していく。

「御林」の払下げの事例としては、明治 35 年に、長島村(現・平泉町長島地区)の農民 12 名が連名で願い出て、観音山の北斜面にある「青木平御林」の払下げを受け、火入れ等の管理作業を共同で行っていたという記録が残っている。

また、当地域の山地の多くは、元々集落で共同利用していた「入会山」であったので、各集落はかつての「入会山」としていた山地を共同萱野として所有・管理している。生母地区の二子萱野利用組合では、その後、造林組合から生産森林組合へと組織を変えながらも、地域共同による森林の保全管理が現在まで継承されている(写真 37)。



図 36 東山分間絵図拡大
(円内：御林)

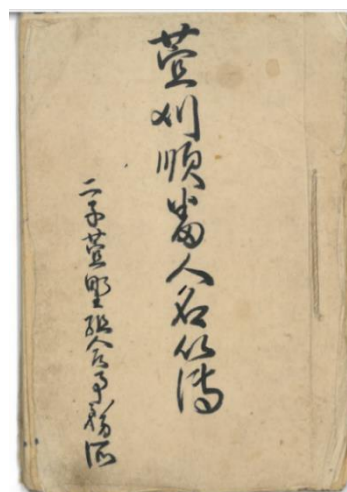


写真 37 萱刈順番人名簿

(二子萱野組合事務所)

2. 伝統的な土地利用システムによる地域農業の発展

東稲山麓地域では、藩政時代から明治、大正、昭和初期にかけて、山麓地では自給用の米、麦、大豆等が作られ、低平地の畑地で麻、桑等の商品作物が作付けされていた。

桑は低樹高による栽培が一般的であるが、当地域では樹高を高くした栽培方法（高刈）により洪水害を軽減するとともに、複数の品目を組み合わせることで洪水害からリスク分散できる栽培体系となっていた。

昭和後期には、低平地がほ場整備事業により大区画となり、現在は、米を中心に麦や大豆等の土地利用型作物を商品作物として作付けし、営農を発展させてきた。

現在は、山麓地では、貴重な水を効率的に利用した自給用米などを栽培し、麻等に変わる新たな商品作物として、りんごや野菜、また、山腹の豊富な草資源等を活用した肉用牛が飼育されている。

低平地では、現在は、集落営農組織等の担い手を中心とした生産性の高い水田農業が進められており、本県独自の良食味品種「金色の風」等の商品性の高い米や、台風が発生が多くなる前に収穫できる良質の小麦等が生産されている（図 38）。

	藩政時代	明治～昭和前期	昭和後期～現在
低平地 (沖積地)	● 麻 ● 桑(養蚕)	● 菜種	● 米 ● 麦・豆 ● 飼料用米
山麓地 (中山間地)	● 米 ● 麦・豆 ● 桑(養蚕) ● たばこ		● 野菜 ● りんご ● 畜産
山 地	● 木材・竹 ● 薪炭 ● 筍・栗		

図 38 東稲山麓地域における農林業の変遷

パートC 現代的な関連性

1. 気候変動への適応による地域発展と食料安全保障への貢献

(1) 地域の継続した発展

東稲山麓地域における伝統的なリスク分散土地利用システムは、自然災害による影響をコントロールのうえ、被害を最小化しながら、食料及び収益を最大限に確保し、農業経営の継続を可能とする仕組みである。

また、自然災害に加え、社会経済の変化に適合し、異なる立地条件の農地を利用しながら、米と商品作物を組み合わせた複合農業を確立しており、農林業を中心とした地域の継続した発展に寄与するレジリエンスに優れたシステムである。

(2) 変化する農政への対応

低平地が遊水地として大区画ほ場に整備されたことで、土地利用型作物が効率的に作付可能となり、また、農業生産法人へ農地の集約・集積化とあわせて、転作作物の集積による品質向上が図られ、麦、大豆及び飼料用米の作付による収益向上につながっている。

農地の分散所有による農林業システムは地域に根付いており、現在は、個人経営だけではなく、法人化された組織を中心に、担い手に確実に継承され、低平地では規模拡大による近代的な農業が展開され、山麓地には、立地条件に適した品目導入が進められている。

また、中山間地域などの条件不利地においては、少子高齢化や人口減少が急速に進展し、地域社会の存続が危ぶまれる状況にあって、自然災害のリスク分散を図り、農業を核として地域を継続してきた当地域の事例は極めて意義あるものである。

(3) 食料安全保障への貢献

我が国においては、近年、農業保険制度の充実が図られ、自然災害による経営リスクは以前と比較して低くなっているが、国内外の各地で頻発する自然災害等による食料不足が深刻化する中で、当地域の伝統的知識システムは、食料安全保障への貢献が期待されるものである。

2. 生物多様性への貢献

(1) 動植物の生息環境の維持

低平地及び山麓地の農地を分散所有し、地域が共同で森林やため池等の保全管理を行うことにより、当地域には、環境省レッドリストの絶滅危惧種等に指定されている動植物が多数確認されており、人間の生活と共生する動植物の生息環境が維持されている。

(2) 森林や棚田等の保全活動

前述のような自然環境を維持していくために、子供達や地域内外の住民を対象にした生き物調査や自然観察会、森林や棚田等の保全活動が活発に行われており、当地域の知識システムは生物多様性の取組に貢献するものである。

3. グローバル目標等への貢献

(1) 持続可能な開発目標（SDGs）

人々が自然災害に見舞われながらも、知恵と努力で克服してきた当地域のシステムは、持続可能な開発目標（SDGs）に示される以下の課題の解決に貢献するものである。

Goal 2「持続可能な食料生産システムを確保しレジリエントな農業を实践」

Goal 6「水に関連する生態系の保護」

Goal12「持続可能な消費と生産」

Goal13「自然災害に対するレジリエンス及び適応能力の強化」

Goal15「山地生態系の保全」「生物多様性の損失を阻止」 等

(2) 生態系を活用した防災・減災（Eco-DRR）

当地域のシステムは、生態系を活用した防災・減災（Eco-DRR）の考え方にも合致するものであり、山麓地ではため池による斜面崩壊防止、山地では森林保全による水源涵養や山地災害の防止等の機能を有している。

加えて、山麓地と低平地の農地を分散所有することで洪水害のリスクを分散しているほか、低平地は、遊水地として洪水を緩和する機能を有し、下流域の人命・財産をも守っているのである。

パートD 比較分析

1. 世界の類似地域との比較

洪水被害は毎年のように世界各地で問題となっており、特に洪水被害が集中する地域は東・東南アジア、サブサハラアフリカ、中南米など開発途上諸国を中心に拡大している。しかし、農地の分散所有による洪水害のリスク分散について、海外事例として知られるほどの地域は見当たらないため、河川流域等で稲が栽培されているアジア地域と比較をしたい。

(1) アジア地域との比較

アジア地域のモンスーン地帯では、湿潤な気候のため、古くから稲作が行われてきた。豊富な水資源を農業生産に利用する一方、過剰な降雨は洪水を引き起こし毎年のように冠水被害が発生している。このような洪水常襲地帯では水田の氾濫パターンや地形の変化に応じた生産、いわゆる氾濫稲作が伝統的に営まれてきた。

例えば、雨季の洪水による氾濫が顕著なカンボジアのメコンデルタ地域の水田では、緩やかに増水しながら、1 m前後の水深が長期間にわたって続く場合があるが、そこでは深水イネ、浮イネの栽培がおこなわれている。また2～3 m以上の水深が長期間にわたる場合は、増水中にイネの作付けはおこなわれず、水が引いた後の減水期に作付けを開始する減水栽培が行われている。このように、メコン河流域では、洪水環境を積極的に活用した稲作が展開されている。

(2) 当地域の特異性

当地域では、洪水害に適応した技術だけでなく、洪水の恐れのない山麓地に生活拠点を置き、農地を分散所有することで、災害のリスクを分散している。さらに、山麓地の干ばつや山地の土砂災害といった複数の自然災害にも適応した土地利用システムは、アジア地域の稲作地帯では見当たらない。

2. 国内の類似地域との比較

(1) 水害常襲地及び水田利用されている遊水地との比較

日本国内においても、特に近年、各地で豪雨による災害が頻発しているが、このうち、国内の水害常襲地及び水田利用されている遊水地（以下「水害常襲地」という。）の土地利用の実態について比較検証した。

水害常襲地としては、「日本の水害常襲地の分布とその特性」（土木学会論文集B1(水工学) Vol.70, No.4, I_1489-I_1494, 2014.)において抽出された水害常襲地箇所から、当地域と類似する「大河川狭隘型・狭窄部上流タイプ」と「土地利用一体型水防災事業実施地域」である「馬淵川/青森県南部町」、「最上川/山形県大石田町」「肱川/愛媛県大洲市」及び「球磨川/熊本県八代市」の4地域を選定した。

また、水田利用されている遊水地は、「日本における遊水地の分布と立地特性, 2020」から、遊水地内の土地利用が「水田」に区分され、かつ、立地特性が北上川に類似する地域である「大和田遊水地/北海道留萌市」、「品井沼遊水地/宮城県大崎市、松島町」、「大久保遊水地/山形県村山市、河北町」、「母小島遊水地/茨城県筑西市」、「田中調節池/千葉県柏市、我孫子市」、「菅生調節池/千葉県野田市、茨城県守谷市」及び「上野遊水地/三重県伊賀市」の7箇所を選定し、さらに、平常時に農地として利用している遊水地として、一関遊水地、田中調節池に次いで国内3番目の面積を有する「北村遊水地/北海道岩見沢市」を選定した。

その結果、「球磨川/熊本県八代市」を除く11地域で水害常襲地の農地利用が行われており、このうち9地域では、水害常襲地から離れた平地に農地を分散所有しており、水害常襲地と山麓地の農地所有者は異なっている。例えば、品井沼遊水地は、元は沼地だったところで、近代になってから入植者が開墾した農地であり、遊水地周辺の丘陵地の農地所有者とは異なっている。また、大久保遊水地では、遊水地近くに集落があるが、高低差があるため水害の恐れはなく、遊水地の耕作者全員が遊水地とは別に周辺平野も耕作している（表39）。

一方、山麓地にも農地を分散所有している農家が存在する「馬淵川/青森県南部町」においては、山麓地に近接しているエリアを対象に調べたところ、分散所有の割合は45%であった。また、そのエリア周辺の山地の所有状況は、個人所有が9割以上となっており、地元森林組合への聞き取り調査によれば、あまり管理されていない状況にある（表40）。

このことから、低平地と山麓地の両方に農地を所有し、山地も含めて地域全体で自然災害のリスク管理を共同で行っている例はなく、当地域が唯一と言える。

表 39 国内の主な水害常襲地※¹及び遊水地※²の農地利用状況

No	河川・遊水地名 /市町村	水害常襲地の 農地利用	水害常襲地以外の 農地利用	水害常襲地での 水害への備え
	北上川・一関遊水 地/束稲山麓地域	有 (米、麦、大豆等)	有 (<u>山麓地</u>) ※約9割の農家が山麓 地にも農地を所有	・分散所有(<u>山麓地</u>) ・共済制度に加入 ・収穫時期を分散
1	最上川 /山形県大石田町	有 (米、ソバ)	有 (平坦地が主)	・収穫時期を分散 ・共済制度に加入
2	馬淵川 /青森県南部町	有 (米、野菜)	有 (<u>平坦地と山麓地</u>) ※約5割の農家が山麓 地にも農地を所有	・分散所有(<u>平地</u>) ・共済制度に加入
3	肱川 /愛媛県大洲市	有 (米、麦等)	有 (平坦地が主) ※山間の農地所有者と 平坦地の農地所有者 は異なる。	・共済制度に加入
4	球磨川 /熊本県八代市	無	無	無
5	大和田遊水地 /北海道留萌市	有 (米、ホウキ)	有 (周囲堤外の隣接農地 を所有)	・対応していない
6	品井沼遊水地 /宮城県大崎市、松 島町	有 (米、大豆)	有 (遊水地以外の平地に 所有) ※周辺丘陵地の農地所 有者と平坦地の農地 所有者は異なる	・分散所有(<u>平地</u>) ・共済制度に加入
7	大久保遊水地 /山形県村山市、河 北町	有 (米、大豆等)	有 (遊水地以外の平地に 所有)	・分散所有(<u>平地</u>) ・共済制度に加入
8	母小島遊水地 /茨城県筑西市	有 (米、麦、大豆)	有 (遊水地以外の平地に 所有)	・共済制度に加入
9	田中調節池 /千葉県柏市、我孫 子市	有 (米、麦等)	有 (遊水地以外の平地に 所有)	・共済制度に加入
10	菅生調節池 /千葉県野田市、茨 城県守谷市	有 (米)	有 (遊水地以外の平地に 所有)	・共済制度に加入
11	上野遊水地 /三重県伊賀市	有 (米)	有 (堤防外の平地に所 有)	・分散所有(<u>平地</u>) ・共済制度に加入
12	北村遊水地 /北海道岩見沢市	有 (米、麦、大豆)	有 (遊水地に隣接する平 地に所有)	・共済制度に加入

※1 No 1～4の水害常襲地は、「日本の水害常襲地の分布とその特性」(土木学会論文集 B1(水工学) Vol. 70, No. 4, I_1489-I_1494, 2014.)において抽出された水害常襲地箇所のうち、当地域に類似する箇所を選定 (No1, 2は大河川狭隘型・狭窄部上流タイプ、No3, 4は土地利用一体型水防災事業実施地域)。

※2 No 5～11は、「日本における遊水地の分布と立地特性, 2020」においてリスト化された遊水地のうち、遊水地内の土地利用が「水田」に区分され、かつ、立地特性が一関遊水地と同じ遊水地を選定 (地形分類「氾濫平野」と「旧河道」)。

※3 山地の所有状況は、「山麓地にも農地を所有」している青森県南部町にのみ追加調査を実施した。

表 40 水害常襲地の農地利用と山地の共同所有状況の比較

河川名 /市町村	水害常襲地の 農地利用	水害常襲地以外の 農地利用	水害常襲地での 水害への備え	山地の 共同所有状況
北上川 /東稲山麓地域	有 (米、麦、大 豆等)	有 (山麓地) ※約 9 割の農家が 山麓地にも農地 を所有	有 ・分散所有(山麓 地) ・共済制度に加入 ・収穫時期を分散	有 (生母地区) ※森林面積の約 5 割が共同所有
馬淵川 /青森県南部町	有 (米、野菜)	有 (平坦地・山麓地) ※約 5 割の農家が 山麓地にも農地 を所有	有 ・分散所有(平地) ・共済制度に加入	有(森越・福田地 区) ※森林面積の 4% が共同所有

(2) 当地域の特異性

現代農業においては、平坦な立地条件で、農地を集積・集約して効率的な営農を行うのが一般的であるが、当地域は、平坦で効率の良い低平地と非効率な山麓地の農地それぞれの特徴を生かした営農を行っており、さらに山地も含めた自然災害のリスク分散土地利用を行っている。

また、当地域の低平地は、治水対策となる遊水地としての能力を有しており、遊水地でありながら農地として利用している面積は日本最大である(表 41)。

当地域に隣接している都市部のみならず、下流の宮城県側の洪水害も軽減されるため、北上川の流域全体にとって、当地域の低平地は、重要な役割となっている。

表 41 日本国内で平常時に農地として利用している遊水地

遊水地名	都道府県	河川名	面積(ha)
一関遊水地	岩手県	北上川	1,450
田中調節池	千葉県	利根川	1,175
北村遊水地	北海道	石狩川	950

出典：国土交通省東北地方整備局 岩手河川国道事務所資料

2 認定地域の特徴

(1) 食料及び生計の保障

当地域では、古くから、山麓地の農地では米などの食料を確保し、洪水害のリスクを抱えるものの肥沃な低平地の農地では商品作物を作付けし、米と商品作物を組み合わせた複合農業が継承されている。

伝統的土地利用システムにより、自然災害や社会経済の変化に柔軟に対応しながら、世代を越えて、食料及び生計の保障が維持されている。

1) 災害を乗り越えるための複合農業の歴史

a) 生命を守る水田農業の変遷

当地域では、古来より、山麓に多い狭小な浸食谷を流れる湧き水や天水を水源として主に自給用の米、麦、大豆等が作られていた。

一方、北上川沿いの広大な低平地は、明治から大正までは畑地として利用されてきたが、商品作物の価格下落や大凶作の影響を受け、昭和8年～9年の長島地区、昭和11年～16年の舞川地区における耕地整理と併せ、揚水機場や用水路の整備が進み、徐々に水田へと推移し、価格が安定していた米が栽培されてきた。

現在は、ほぼ100%が水田となり、1ha区画の大区画において、米を中心に麦や大豆等の土地利用型作物の作付による生産性の高い農業が展開されている。

北上川は、洪水害をもたらす一方、肥沃な土を運ぶことで、低平地での効率的な営農が発展し、現在は県内有数の米産地となっている。

米は、食味で高い評価を受けている「県南ひとめぼれ」のほか、県のフラッグシップ米である「金色の風」(写真42)が生産されており、全国的なブランドとして有利販売されている。また、麦、大豆についても、水稻とのブロックローテーションにより洪水害のリスクの分散を図るとともに、地元食品企業等との契約栽培に取り組むなど、安定的な所得確保につながっている。農業法人や担い手農家が中心となり、米を主体として、麦、大豆等の生産性向上を図りながら、効率的な集落営農による水田農業に取り組んでいる(写真43)。



写真42 県フラッグシップ米「金色の風」



写真43 低平地の水田農業(米、麦、大豆等)

b) 生活を守る商品作物の歴史

元禄期の経済の急成長により、貨幣経済が農村にも浸透し、商品作物の栽培が進んだ。「安永風土記」によれば、当時、当地域で作られていた産物は、煙草、麻、紅花、繭、真綿などであった。特に、赤生津村（現・奥州市生母地区）で藩政中期から始まった養蚕は、急速に広まり、明治初期には岩手県屈指の産地に発展した。

明治から大正にかけては、低平地の畑地では麻、菜種、桑等の商品作物が作られており、麻はこの地域の主力作物であった。また、現在は栽培されていないが、舞川地区では、明治 30 年に地元観福寺の当時の住職がサフランの球根を入手し栽培を奨励し、大正末期には価格高騰により一時盛んに栽培されていた。

現在の山麓地では、貴重な水源を巧みに利用した棚田での自給用米のほか、麻等に変わる新たな商品作物として、りんごや野菜、また、山腹の豊富な草資源等を活用した肉用牛などが飼育されている。

りんごについては、稲作を補完する作物として、昭和初期から栽培が始まり、昭和 40 年代からは、わい化栽培の導入とともにりんご団地が形成され、現在、「大文字りんご」（写真 44）等として有利販売されている。



写真 44 大文字りんご

野菜については、トマトやきゅうり等の果菜類、白菜やキャベツ等の葉菜類のほか、伝統的な作物である「和からし」、地域特産物として取り組んでいる「黄金メロン」、自然薯など、バラエティに富んだ品目が栽培されている。

また、農耕用として牛馬を飼養していた時代の技術を継承し、肉用牛の有畜複合経営が営まれており、当地域で生産される「前沢牛」や「いわて南牛」は全国的なブランドとなっている。

このように、生活拠点となっている山麓地では、個々の農家が米などの自給食料を確保するだけでなく、冷害や干ばつのリスク分散として、標高差や寒暖差などを生かした様々な地域特産物を生産しながら、生活基盤の安定化を図っており、このことは、レジリエンスの強化につながっている。

2) 災害を克服するための営農技術

洪水害に遭う一方で、肥沃な土が堆積されたことから、低平地は農地として利用され、作付する作物は変遷しても、継続して営農活動が行われてきた。

かつて、低平地の畑では、桑、麻及び菜種等が作付され、これらは、栽培期間や洪水害の時期が異なるため、品目を組み合わせた作付が行われ（表 45）、品目に

よって洪水害があっても、被害に遭った人だけが困らないように地域全体でカバーする「結」の体制があった。

「結」は、困っているときに助け合うという精神であり、洪水害の際は集落で助け合ったり、農繁期はお互いに手伝いながら作業を行うということが、地域に根付いていた。

表 45 品目の組み合わせ（明治～大正頃）

月	1～2月		3～4月		5～6月		7～8月		9～10月		11～12月	
洪水回数	0	0	2	8	4	4	21	18	13	3	0	0
桑					←————→		←————→		←————→			
麻			←————→		←————○————→		←————→					
菜種	————→		————→		————○————→		————→		←————→		————→	

注) 洪水回数は、明治時代以後の洪水害の時期別回数

←————→ は、栽培期間(桑は葉を採取する時期)

○は、収穫前等の洪水害に最も弱い時期

また、桑は低樹高による栽培が一般的であったが、当地域では樹高を高くした栽培方法(写真 46)により、洪水害の影響をできるだけ軽減するような技術や知恵を駆使しながら、営農をの安定化に努力していた。

現在においては、洪水時期を避けるとともに、収穫期が異なる品目を組合せ（米：9～10月、WCS用稲：8月、小麦：6月）、また、下流に狭窄部があるために、洪水の際には下流の南側から浸水してくることから、作付け場所（高地：米、低地：麦・飼料用米等）の工夫により、洪水害のリスクを分散している。

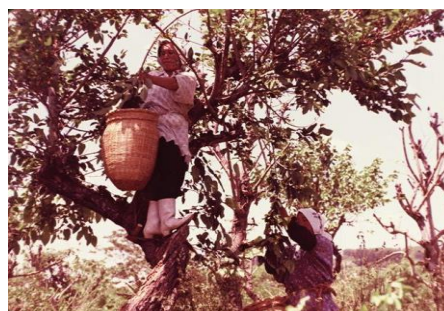


写真 46 高樹高栽培の桑の収穫
(村上護朗氏撮影)

3) 農業と生活を支える山地

かつての農業形態は、現在とは異なり、人里に近い森林等に依存する形で続けられてきた。すなわち、森林を切り開くことにより農地や居住地を確保し、建築材、薪炭、肥料などとして利用することで農業が成り立っていた。

束稲山麓の山々は、生活に必要なものを供給する重要な拠点であったことから、森林は、木材としてだけではなく、薪炭として調理や暖をとることに使われ、山の一部に設けられた茅場からは、家屋の屋根材となる茅が供給された。その他、木の実や山菜、自然薯、ユリ根は食料として収穫され、地域住民によって維持され続けてきた。

大正期の当地域の産物は薪炭が主で、舞川地区では、かつては農業収入を補うための製炭が盛んに行われていた。

＜大正期の主な産物（林業）＞

薪、炭、用材、竹材、薪材、林産物：栗、胡桃、椿、枳、果実

昭和 30 年代の燃料革命により、一般家庭にあってもそれまで燃料として使われてきた薪炭に代わり、プロパンガスや石油が使用されるようになった。昭和 25 年がピークであった木炭の生産量が激減するとともに、農業の機械化、化学肥料の普及など、里山の利用形態に大きな変化をもたらすこととなった。

その結果、薪炭林の役割が失われることとなり、当地域も例外ではなくスギの植林が進み、間伐による木材生産は所有者の臨時的な収入源となっている。

山麓地の水源を涵養し、生活に必要な薪炭や木材の確保など、多様な機能を持つ森林は、地域の財産として管理されてきた。現在でも、生母地区では大半の森林が共同管理されている。

近年では、スギ伐採跡地への漆の植栽（2.68ha、3,700 本）（写真 47）にも取り組んでいる。漆は、平泉の世界遺産（平泉一仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群）の施設や国内の文化財補修に供給することを目的に、利益回収スパンが長いスギ・マツだけでなく、サイクルの短い漆での収入確保のほか、漆掻き職人の養成や地域内での雇用まで視野に入れられている。



写真 47 スギ伐採跡地への漆の植栽

(2) 農業生物多様性

低平地及び山麓地の農地を分散所有し、営農活動を行いながら、森林やため池等の保全管理を一体的に行うことで、地域内には多様な生態系が維持されている。

1) 立体的土地利用による生物多様性

a) 北上川沿い低平地の水田

北上川沿いの低平地では、水田等の整備が行われる前は、畑地のほか、小河川、湿地、河畔林、屋敷林（居久根）を伴った住居など、多様な環境があり、それぞれの生態系が構築されていた。

水田等の整備後は、屋敷林（居久根）などの樹木や住居等がなくなってほぼ平坦になり、畑作から水田農業へ転換したものの、農業の変遷とともに変化しながら生態系が維持されている。

水田農業が主体となった低平地は、農業機械による収穫後のモミがほ場内に残ることや、障害物のない水田は冬鳥の天敵であるキツネなどの接近をいち早く察知できることから、以前には飛来が確認されていなかったハクチョウ類やマガンなどが多く見られるようになっている（写真 48）。北上川沿いの低平地は、越冬する冬鳥の貴重な餌場として重要な中継地点となっている。

また、環境省レッドリストの絶滅危惧Ⅱ類に記載され、生態系の頂点にある猛禽類のハヤブサ（写真 49）が、障害物のない水田付近に飛来する獲物であるキジバトやヒヨドリなどの鳥類を待ち伏せする餌場として利用している。

植物種では、岩手県レッドリストのCランクに記載されているサクラタデ（写真 50）が確認されている。サクラタデは、氾濫原などの低地の日当りのよい水辺に生育するもので、当地域では低平地のみに見られ、農業体系や環境が変遷してきたものの、依然として地域特性に適応して生育している。



写真 48 低平地へのハクチョウ等の飛来



写真 49 生態系の頂点となるハヤブサ



写真 50 低地の水辺に生育する
サクラタデ

b) 山麓地の棚田周辺

当地域には、ため池を活用するとともに、田越しかんがいや土水路によるかん水が行われている開拓当時の姿を残す棚田が残されている。

定期的な草刈り作業が実施され、伝統的な農業形態が維持されている。このことにより、水田、湿地、沢、作業道、山地草原、林縁、池沼などの多様な環境が存在し、「種の多様性」が保たれ、それぞれがお互いに関わりを持ちながら水田周辺の生態系を形作っている。

棚田周辺では、主に水田や湿地、林縁など多様な環境に適応した約 350 種の多様な植物が確認されている。このうち、キキョウ（環境省レッドリストの絶滅危惧Ⅱ類及び岩手県レッドリストのBランク）（写真 51）や、カワラナデシコ、オミナエシ（いずれも岩手県レッドリストのCランク）などの「秋の七草」は古くから和歌に詠われるなど、日本人に親しまれてきたが、急激に減少傾向にある。



写真 51 棚田のそばのキキョウ

当地域では、現在でも水田への日当たりをよくするため、周辺の斜面林下部の草刈りなどが定期的に行われていることにより、半自然草地に適応したこれらの希少植物が見られ、当地域では、盆や彼岸に先祖の御霊を慰める草花として大切にされている。

鳥類では環境省のレッドリストに記載（VU：絶滅危惧Ⅱ類）される猛禽類のハヤブサをはじめ 11 種、両生類はトウホクサンショウウオ（NT：準絶滅危惧）など 6 種、爬虫類はヤマカガシなど 3 種、水生昆虫はコオイムシなど 4 種、淡水貝類はカワニナなど 2 種、甲殻類ではサワガニなど 2 種、昆虫類は水田や湿地、水路、ため池周辺に生息するトンボ類、コオイムシ類、草地に生息するバッタ類やハチやアブの仲間など 118 種であった。

このような棚田において、農業が継続して営まれることで、本来、生物が生息できる環境が保たれており、農作業は多様な生物の生存に欠かすことができないものである。

c) 山麓地のため池周辺

当地域のため池は、棚田に安定的に用水を供給するとともに、集落の防火用水源としても使われるなど、地域の公益的な役割を担っており、これまで、周辺部の草刈りや水源涵養機能を持つ森林の手入れを行うなど、大切に保全管理されている。このことにより、ため池やその周辺部は良好な自然環境が維持され、生物の生息・生育場所としての機能も発揮している。

地域内に点在するため池には、アジ
アイトトンボなどの昆虫類や、それら
を餌とするキンブナなどの淡水魚類、
環境省のレッドリストに記載（NT：準
絶滅危惧）されるトウキョウダルマガ
エル（写真 52）などの両生類、これら
を餌とするアオサギなどの鳥類が確認
されている。

コオイムシやミズカマキリなど止水
性の昆虫の多くは、一時的水域である
水田を繁殖場所として利用し、主な生
息場所をため池などの恒久的水域に依
存している。このように池沼は他の生
息場所とつながりを持ちながら多くの
生き物を育んでいる。

ため池の岸边や堤体のほとんどは管
理が行き届いていることから、水辺に
は、環境省レッドリストの絶滅危惧Ⅱ
類及び岩手県レッドリストの A ラン
クに記載されるヒメビシ（写真 53）などの浮葉植物が生育し、水生昆虫などの恰
好の生息環境となっている。ヒメビシは、岩手県のレッドデータブックによれば、
自然分布は極めて限定されており、平泉町長島地区の生育地は県内では大変貴重
で、多様性の豊かさを示す指標であると言える。



写真 52 トウキョウダルマガエル



写真 53 浮葉植物「ヒメビシ」

d) 森林

森林は、土砂流出防止や洪水調整等の国土の保全、水源の涵養、さらに、生物多
様性の保持等の多面的機能を有するとともに、木材、薪、炭をはじめとする林産物
の供給など、森林は生活や農業生産にとって必要不可欠な役割を果たしている。

当地域の森林の樹種は、主に植林したスギ林と落葉広葉樹林とに分けられ、そ
れぞれ生息する動植物に違いが見ら
れる。植物種では、スギ林の植生は
シダ類など日陰に生育する植物が
多い。落葉広葉樹林では、アカマツ
やコナラなどの樹木の他に、半日陰
に生育するシュンランなど林床の
植物が多く見られる。



写真 54 キクタニギク

当地域の森林では、環境省レッドリストの準絶滅危惧及び岩手県レッドリストのCランクに記載されているキクタニギク(写真54)、岩手県レッドリストのCランクに記載されているミミガタナンテンショウ(写真55)やセンブリなどの希少種を含む約250種の植物種が確認されている。



写真55 ミミガタナンテンショウ

鳥類はモズなど4種、両生類はニホンアカガエルなど4種、爬虫類はカナヘビなど2種である。昆虫にあつては、針葉樹林内ではエゾゼミやヒグラシなど、落葉広葉樹にはミヤマクワガタやノコギリクワガタなど、確認された昆虫類は58種であった。

2) システムと関わりの深い地域資源

a) 農産物

当地域では、低平地における水害のほか、山麓地における冷害により、農作物の減収や品質の低下などの影響を受けてきた。

そのため、米については、多収性、耐冷性、良食味など、その時代の需要に即した品種が栽培され、大正時代以降、陸羽132号やトヨニシキ、ササニシキ等と変遷し、現在は、良食味で耐冷性の強い「ひとめぼれ」が主体となっている。岩手県では、国内の産地間競争に打ち勝つため、障害型耐冷性が「ひとめぼれ」と同等で、食味が「ひとめぼれ」に優る極良食味の「金色の風」を開発し、当地域を中心として平成29年産から導入が進んでいる。

また、米の他にも、古くから、大麻や菜種、葉たばこ、桑(養蚕)、大麦、小麦、そば、あわ、ひえ、高きび、荳胡麻、その他野菜など、多様な品目を工夫しながら生産しており、自然災害に対するレジリエンスの強化に寄与している。

その中でも、戦前まで油料作物として栽培されてきた菜種は、戦後からは、同じアブラナ科の「和からし」(写真56)へと変遷し、系統を維持しながら栽培を継承しており、からし種から作った和からし(写真57)を利用したからし漬が伝統食となっている。



写真56 地域特産物「和からし」



写真57 「からし種」と「和からし」(粉末)

b) 月山松

東稲山麓において最も一般的にみられるナンブアカマツは、仙台藩時代に馬産奨励策として牧野を拡大し、火入れによる管理の結果、牧野にナンブアカマツの群生が形成したといわれている。また、一部には江戸時代にたびたび東北地方を襲った飢饉の際に、ワラビの根を掘り取った跡地への侵入によるものもあると言われている。

ナンブアカマツは東稲山塊の山頂やその尾根沿いに生育し、有機物等の堆積が無く、他の植物が生育できない裸地や風化の容易に進まない岩場などに侵入するとされる。

奥州市生母地区の経塚山にある月山神社奥の院周辺には、マツとしては異例の大きさであるナンブアカマツ群落が存在しており、地元住民から「月山松」（写真 58）として親しまれている。最大のもので胸高直径 119cm、樹高 30m を超える樹齢は約 350 年と推定されている。

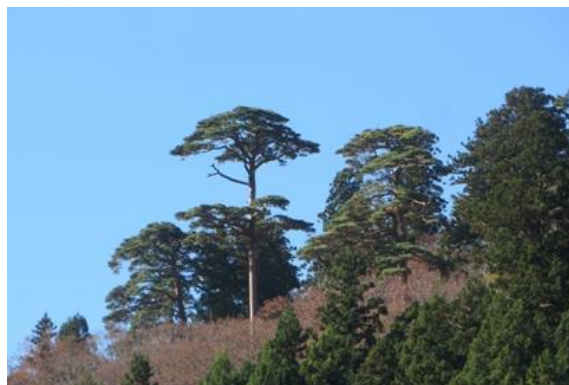


写真 58 月山松

こうしたマツの群落は、植林したとしても同様には育たないと言われ

ており、この松を守るため地元の生母生産森林組合と月山神社総代関係者により「月山松を守る会」を設立し、定期的な監視と予防活動を実施している。1996 年の旧前沢町時代には、「月山松」の保護に向けた行政への働きかけにより、奥州市の条例「月山ふるさと自然景観保護条例」が施行されているほか、地元の「月山松を守る会」を中心に松くい虫対策を実施するなど、地域が一体となって貴重な地域資源である「月山松」の保全活動を行っている。

なお、平成 30 年には、名古屋城天守閣の復元のため、樹齢 350 年の月山松が伐採され、日本の文化財として活用されている。

(3) 地域の伝統的な知識システム

東稲山麓地域では、古くから、山麓地の田畑や隣接する北上川沿いの低平地で、米と商品作物を組み合わせた複合農業を営んできた。

洪水害、干ばつや土砂災害などに対し、低平地、山麓地から山地を立体的に活用して地域全体で自然災害のリスクを分散する独自の土地利用システムを構築し、現在まで継承されている。

1) 土地の所有と利用の実態

現在、農地の所有・利用は、個人を基本としながらも、低平地の農地の利用調整や麦・豆などの転作作物の作業は営農組合や農業法人が担っており、また、山麓地のため池等の水利施設や山地の森林の保全管理は、共有財産という意識の下、共同で行われている（13 ページ掲載 図 9）。

2) 災害のリスク分散

当地域のシステムは、個人と共同による土地利用の仕組みの上に、それぞれの災害に対応したリスク分散を重層的に行っている（14 ページ掲載 図 10）。

a) 農地の分散所有と複合農業

i) 農地の所有の経過

洪水害の常襲地となっている当地域において、約 300 年前には、山麓地に住居や農地を所有するほか、低平地にも農地を所有し、洪水害のリスク分散が行われていた。1731 年に作成された耕地図によると、現在の山麓地に住居及び農地を持っていた農家が、低平地にも農地を所有していたことが分かっている（26 ページ掲載 図 31）。この農家の子孫には、1703 年に分家した際に、家屋は洪水害の無い山側に、農地は「岡田 3 反、岡畑 3 反、谷起 1 町、山林 3 町（山麓地の水田 30 a 及び畑 30 a、低平地 1 ha、山林 3 ha）」を承継したという資料が残っている。当地域では、長年に渡り災害に見舞われながらも、同族家族を中心に同じ土地を継承し続けている（26 ページ掲載 表 32）。

ii) 複合農業の変遷

古くから、山麓地で食料確保のための自給自足型農業を営む一方、低平地で商品作物を生産する複合的な土地利用が行われ、時代とともに作目を変えながら、現在も自然災害に適応した農業が営まれており、低平地と山麓地の農地を併有している農家は 87% と非常に高い割合となっている（15 ページ掲載 表 11）。

低平地では、灌漑施設が整備（1933 年）される以前は、畑として利用されており、主に桑、麻、菜種等といった商品作物が作付され（図 59）、複数の品目

を組み合わせることで洪水害からリスクを分散できるような栽培が行われていた。

灌漑施設の整備後、平坦な農地において、畑から水田へ転換することで、高収益が見込まれる水稻を中心に麦及び大豆等の土地利用型作物が作付され、整備前と同様に、商品作物を作付して営農を発展させてきた（図 60）。

低平地での主食用米や小麦、大豆などの作付けに当たっては、洪水時に水が浸かる低い土地に主食用米は作付けせず、小麦や飼料用米、牧草など、低平地内の微妙な高低によって作目を変えたり、洪水に備えて収穫時期が異なる作目を組み合わせる（米、麦、大豆）等、農家の営農の知恵で収益を確保し、生計を保障している。

長島地区内の低平地の約 3 割の農地を使って営農している法人では、水害に備えた知恵として、小麦を 12 月に播種し、6 月に収穫、その後大豆を 7 月に播種し、12 月収穫というように、1 年 2 作を行っている。また、園芸品目として、ネギを作付けしており、湿害に強い品種を選定するとともに、低平地内の標高の高いところを選んで作付けを行っている。

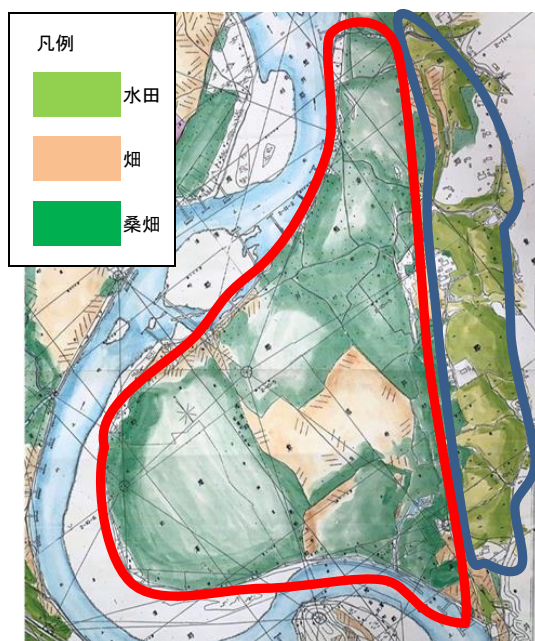


図 59 明治 37 年の土地利用図(奥州市生母地区)

出典:「北上川河川台帳平面図副本」国土交通省東北
地方整備局岩手河川国道事務所を加工して作成
※ 赤枠:低平地の桑畑等 青枠:山麓地の棚田



図 60 現在の土地利用図(奥州市生母地区)

b) 農業と生活を守る水管理

i) 水管理のルール

森林内の湧き水から平等に分配する導水路を構築するとともに、「番水」などの地域のルールに従って、地域内に満遍なく、公平に供給し、山麓中腹まで

開墾された棚田を含めて貴重な農地を維持している。

干ばつ時の対応としては、受益者によって、水の流れを良くするための江払い（えばらい）のほか、水漏れがないように点検・修繕が行われている。

また、かつての山麓地の田は「ひどろ田（年中水を入れた湿田）」であったが、機械化によって水田はすべて乾田化されている。昭和 30 年代の開田によって水が不足するようになると、沢なりに揚水場を設け、北上川から水を揚げ、受益者が、現在も水系ごとに昔ながらの水路等を維持しながら、水田に水を引いている。

ii) 地域別のため池の利用形態

現在のため池の利用形態は地域毎に特徴がみられ、奥州市生母地区では、当地域内で最もため池数が多く、江戸時代以前から築造されたと考えられる小さな個人所有のものや、昭和時代の開田とともに当該地区の共有地や生産森林組合の所有地に築造された大規模なものまで多様である。大岩第 2 堤（1945 年築造、受益面積 8.7ha、受益戸数 25 戸）を管理している「大岩組合」では、特に用水が必要な時期である田植え時期までは、現在でも、受益者間で「番水」が行われており、地域内で共助しながら、棚田を継承している。

平泉町長島地区では、古くからの個人所有のため池に加え、明治時代以降、平泉町や集落の所有地に築造され、大堤水利組合などの組織や集落等が管理している比較的大きなため池もある。大きなため池では、番水などにより用水が平等に供給されるとともに、保全管理もコミュニティ単位に共同で行われてきた。

一関市舞川地区では、沢水沿いの小さな農地が多く、近代以前に築造された個人管理の比較的小さなため池が多いことが特徴である。

なお、当地域のため池は、棚田へ安定的に用水を供給するほか、集落の防火用水源としても使われるなど地域の公益的な役割を担っている。さらに、大雨で急激に出水が増えても、一時的に貯水することによる洪水調整や土砂流出の防止などの役割を持つなど、当地域における防災・減災機能も兼ね備えている。

このように、当地域の貴重な水資源は、山麓地の米づくりにとっては欠かせないものであり、山腹から湧き出る貴重な水資源を確保するための森林の保全はもちろん、現在でも、この水資源を効果的に棚田等の農地へ供給するシステムが機能している。また、地元住民が集落の活動組織を中心に、草刈りや、泥あげ、一部補修など、大切に保全・管理している（写真 61 及び 62）。



写真 61 地元住民によるため池の保全管理



写真 62 地元住民による水路の保全管理

また、山麓地の傾斜地においては、棚田は、大雨時には流域治水の機能も果たしている。なお、飲料水の不足も深刻だったことから、昭和 30 年代には、地域共同で簡易水道組合を組織し、水道工事を行っている。

c) 藩政時代から守り継がれる森林管理

藩政時代に、森林資源の確保と恒久的な維持のために各地に設置された「御林」^{おはやし}は、災害時には、住民を飢えや寒さから守るため、住居用の木材や薪炭等を供給するほか、治山や治水などの公益的な機能も有していた。この他、当地域の山地の多くは、元は「入会地（原野）」であった。

山麓地域の命とも言える水源を涵養し、生活に必要な薪炭や木材の確保など、多様な機能をもつ山地の森林については、地域の財産として、明治時代から集落の共同による村有林や部落有林として管理が行われていた。

赤生津村（現：奥州市生母地区）では、部落有林野が荒廃したため、明治 43 年に、村が部落有林を合併して共有財産とし、森林保全と水源涵養を目的として植林を行ったという記録がある。

「明治 43 年の実施に係る部落有林野の合併にして合併以前は部落民は任意に林野に於いて薪炭葛草の採取を為し自然に放任しあるが故に年を趁ふて林野の荒廃を来し水源地は涸れ山骨露出するの状なるより国土保安上農村の将来企画上大なる事業なると一方には村治上極めて好良なる基本財産造成方法なるより各部落民が永き歴史を有する慣行を打破し幾多の曲折を経てついに部落有を合併し村基本財産に編入し年々三萬本宛の杉の植林は行はれつつあり」

（大正 14 年岩手毎日新聞社発行「岩手県下之町村」より抜粋）

奥州市生母地区では、現在でも 1,400ha の森林面積のうち、約 30% の 425ha が住民による組合員で構成される 4 つの生産森林組合の所有となっている。他の共有林も合わせると、当該地区の森林の半数は地域住民の共同所有となっている（表 63）。

昭和 29 年の市町村合併の際、旧生母村の村有林のうち、比較的、家や田畑に近い林地が、1 戸あたり 60 a ずつ各部落の共有林として払下げられ、それ以外の林地、つまり、家や田畑から遠く、標高の高い林地を、生母生産森林組合が引き受けて、現在も公益事業を実施しているほか、イロハモミジの植栽や広葉樹の管理を行いながら、治山、治水を目的とした森林保全を行っている（写真 64）。

表 63 所有形態別面積割合（奥州市生母地区）

区分	全体	生森組	共有林	個人	市町	他団体	社寺	会社	部落
面積 (ha)	1,407.6	425.24	276.89	572.67	51.27	43.73	31.95	3.23	2.62
割合 (%)	100.0%	30.2%	19.7%	40.7%	3.6%	3.1%	2.3%	0.2%	0.2%

仙台藩が森林を管理保護する公益的な取組である「御林」や、共有財産としての「入会山」の考え方は、現在に継承され、地域が共同で山地を守ることによって、潤沢な湧水や沢水の確保と、土砂災害の防止につながっている。



写真 64 針葉樹と広葉樹が混在するモザイク状の山

(4) 文化、価値観及び社会組織

当地域は奥州市生母地区、平泉町長島地区、一関市舞川地区の3地区にまたがり、市町区分は異なるが、17世紀の初頭以降、仙台藩の磐井郡東山南方内の6村として、現在まで地域のつながりが残っている。

また、当地域には、奥州藤原氏と関わりを示す遺跡や文化財のほか、その関わりを伝える神社・仏閣、文化伝統等も数多く残されている。当地域の住民達は、自然災害が多いなどの厳しい条件下で、奥州藤原氏との関わりを大事にしながらコミュニティ、文化伝統、景観等を守り抜いてきた。

1) 災害や苦難を乗り越えるためのコミュニティの継承

a) 平泉の文化遺産と関わりの深い束稲山麓

平成23年に世界遺産に登録された「平泉」は、奥州藤原氏三代がおよそ百年にわたって築いた仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群である。

平泉は、12世紀日本の本州北部において、仏教に基づく理想世界の実現を目指して造営された政治・宗教拠点であり、北上川を挟んで、当地域が近接していることから、食料や建築資材等の重要な供給元として、12世紀の平泉の発展を支えていたことは自明である。

i) 神社・仏閣

延喜式内社である舞草神社は一関市舞川地区にある（写真65）。平安時代初期、坂上田村麻呂東征に関連して、この社殿に聖観音を勧請したことが始まりとされ、後に、奥州藤原氏の帰依を受けて、平泉全盛の頃は、「吉祥山東城寺」と称する24院を数える一大寺院として発展したと伝えられる。明治初期の廃仏毀釈の後、神社として復興している。



写真65 舞草神社（延喜式内社）



写真66 お大師様

また、平泉町長島地区にある大師堂には、天台宗開祖の「お大師様」の石像が祀られている（写真66）。この石像は、奥州藤原時代の12世紀初頭に造られたものである。長島地区では、近年まで疱瘡の神様として信仰を集めている。

この他にも平泉文化との縁を伝える寺社が数多く存在し、奥州市生母地区に

は、奥州藤原氏四代泰衡夫人の命により、泰衡に仕えていた大善院堅者法印継清が勧請したと伝えられている月山神社がある。

ii) 景観・伝統

平泉町長島地区の東稲山麓中腹一帯は、奥州藤原氏初代清衡の祖父にあたる安倍頼時が1万本の桜を植えたとい伝えられており、かつては一山が薄桃色に霞んで見えるほど桜が咲き誇っていたとされている。

また、古の農民も、この桜の開花を眺めながら、種蒔き等の農作業の適期を判断したとされ、「種まき桜」であったと言われている。

なお、古くは、東稲山が「桜山」、北上川が「桜川」と称されていたほか、当地域の地名にも、「桜川（さくらがわ）」、「桜里（おうり）」、「桜木（さくらのき）」、「三桜（さんざくら）」、「桜森（さらもり）」などが残っており、かつて桜花が盛んであったことにちなんだものと考えられている。

このように、東稲山麓は、奥州藤原氏時代から手間のかかる桜の植樹が行われるなど、古くから地元住民が「保全管理」してきた山であると考えられるとともに、古の桜の景観を現在まで伝承しながら、桜と密接に結びついている地域である。

東稲山に連なる駒形峰では、「平泉大文字送り火」(写真 67) が例年 8 月 16 日に行われている。「奥州藤原氏初代清衡は、仏都平泉の東山と名付けた東稲山の一角に、京都五山の送り火行事も移して、大文字送り火をたき供えたであろう」という地元の思いから、1965（昭和 40）年から戦没者慰霊とともに五穀豊穰を願い行われている。



写真 67 平泉大文字送り火

iii) 農林業

東稲山麓をはじめとする平泉に近接する各村落は、奥州藤原氏や寺院にとって最も身近で重要な食料供給地であり、居館や寺院の経営における地域資源や労働力の供給地であったと考えられる。

東稲山麓地域の北上川沿いの低平地では、既に 10 世紀から、広い範囲で稲作や畑作が行われていたことが発掘調査によって明らかにされている。

また、江戸時代から昭和 30 年代頃まで、布や漁網の原料となる良質の大麻や灯油原料の菜種が大量に栽培されていた。中尊寺金色堂に代表される漆工芸

にとって、麻布は必需品であった。1960 年代に実施された金色堂の全解体修理の際にも、東稲山麓産の大麻を用いた麻布が多用されている。

ｂ) 古の教えを守り、生命と地域を守る

ｉ) 災害と深く関連したコミュニティや農文化等の継承

低平地における農業は、北上川の氾濫によってしばしば被害を受けていたことから、各村落では村鎮守の神社を心のよりどころにしており、正月には初詣、夏には五穀豊穡を祈って毎年盛大に祭礼が催され、秋には感謝の祈りとともに農作物がささげられ、神様とともに豊作を祝っている。

このように、当地域は、頻発する水害や干ばつなどの気象災害に見舞われながらも、低平地での「農業生産」と山麓地での「生活」を両立させてコミュニティを継承してきた。

ii) 伝統的なコミュニティの継承

東稲山麓の集落形態の基本は、「屋敷」（本家を中心とした人家の集まり）というコミュニティが集まって形成されており、17 世紀以前から現在まで 300 年以上にわたり引き継がれてきている。

集落では、鎮守社の例大祭（写真 68 月山神社例大祭）や神社祭礼に関わる神楽（写真 69 蓬田神楽）、仏教行事の死者や祖先の供養に関わる念仏踊り（写真 70 田頭讃念仏）や鹿躍（写真 71 舞川鹿子躍）、除疫に関わる獅子舞など、多くの伝統的な民俗芸能が現代まで継承されている。



写真 68 月山神社例大祭（奥州市生母地区）



写真 69 蓬田神楽（一関市舞川地区）



写真 70 田頭讃念仏（平泉町長島地区）



写真 71 舞川鹿子躍（一関市舞川地区）

また、地域で継承されている様々な年中行事の役割分担や、農業組織、納税組織等も、集落を単位として分担運営されている。

このような文化伝統は、コミュニティ内の結束力の強化につながっており、当地域の伝統なコミュニティの継承に大きな役割を果たしている。

c) 神社、仏閣を中心とした集落移転

北上川流域に広がる肥沃な低平地一帯は、古くから畑地や一部水田などに利用されてきたほか、その肥沃な土地をもとめて、神社・仏閣とともに集落が存在していたことが、「東山分間絵図」(図 72) からも伺われる。この神社・仏閣も、度重なる水害により、集落とともに山麓地側へと徐々に移転していった(図 73)。

この背景には、山麓側と北上川流域の農地を分散所有している農家が多く、それらの住民相互の連携が可能だったことともに、神社・仏閣を核とした伝統的なコミュニティが継承されていることなどから、集落の移転が円滑に行われたためであり、現在も、そのコミュニティは維持されている。



図 72 東山分間絵図

※ 赤線の囲みが神社・仏閣と住居

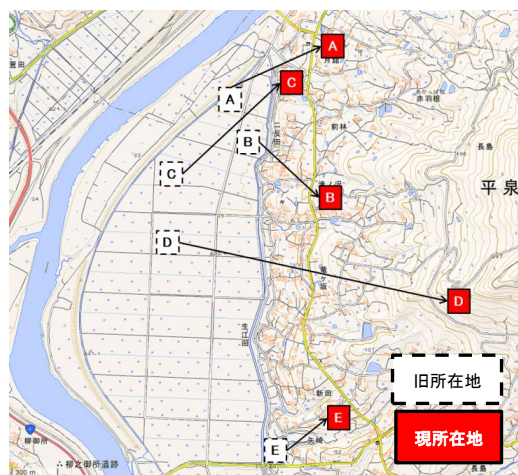


図 73 平泉町長島地区の神社・仏閣の移転状況

出典：国土地理院地図を加工して利用

A：若宮八幡社 B：牛頭天王社（八雲神社）
C：辻観音堂 D：束稲稲荷大明神社
E：矢崎観音堂

長島地区鎮守の八雲神社（明治期以降に「牛頭天王社」から改称）は、今から1,200年前、坂上田村麻呂が東夷征討の際、祈願成就のため「牛頭天王」と称して勧請したとされ、古くは疫病退散、現在は五穀豊穡、諸願成就として地域の人々の信仰を集めていた。



写真 74 八雲神社例大祭

しかしながら、上述のとおり、八雲神社も北上川氾濫による水害に頻繁に見舞われていたことから、大正 2 年（1913 年）に現在地の山麓地側へ修復移転遷座されている。移転後も、例祭（写真 74）はもとより恒例の祭一切の奉仕は従前のコミュニティによって、先人たちが大切に守り伝えてきた儀礼や郷土芸能などが後世に受け継がれている。

d) 遊水地事業による集落移転

昭和 22 年のカスリン台風、昭和 23 年のアイオン台風による大水害を契機に、地域を守り、下流部の安全度を高めるため、昭和 24 年には舞川遊水地（一関地区）が計画され、昭和 48 年には規模を拡大し、一関遊水地計画（一関地区、平泉地区）へと改定された。

一関遊水地は、面積 1,450ha、容量 7,680 万 m³と全国最大規模の遊水地であり、東稲山麓地域の遊水地計画地内においても、低平地内の集落移転が必要となった。

この国家プロジェクトである国内最大規模の北上川遊水地整備事業により、広範囲な集落・住居の移転が行われたが、山麓地側と低平地の農地を分散所有している農家が多く、土地をめぐる確執が小さかったことや、神社・仏閣を核とした伝統的な集落が継承されていたことなどから、低平地内の集落は離散することなく、円滑に山麓地への移転が行われた（図 75）。このことは、神社・仏閣を核とした伝統的な集落が、本家などのリーダーを中心として文化伝統の継承を通じて結束力を高めながら、共助の精神を育んできた結果でもある。



図 75 低平地（平泉町長島地区）の集落移転前後の状況

出典：国土地理院空中写真を加工して利用

左：1970 年代（移転前） 右：現在（移転後）

e) コミュニティ維持の仕組み

当地域では、集落の結束力の強さにより、大飢饉を乗り越えた事例が伝わっている。赤生津村（現：奥州市生母地区）では、「天明の大飢饉」（1782～1788 年）の際、領主の家訓である「①乳飲み子を抱えた母子には食を続けろ。②年寄りも亡くすな。③先立つ者（大人）は我慢しろ。④飢饉の時は蔵を開け。」が徹底され、周辺地域では、急激に人口が減少したものの、当該集落では、一人も死者を出さ

なかったとされている（表 76）。他にも、領主の家系がリーダーとなり、「①北上川の洪水のつく所には家（分家）を建てさせない。②入会の茅野から茅を刈り、結の順番で屋根を葺く。③雑木林を手入して薪・炭を蓄える。」を分家等に徹底し、洪水や飢え、寒さから村人の命と財産を守り抜き、集落を維持してきた先人たちの話が伝わっている。当該集落の領主の家系では、今でも、氏神様を祈願するなどの行事が行われている。

表 76 仙台藩郡方と赤生津村の人口趨勢

地 域	1783（天明 3）年	1785（天明 5）年	人口増減
仙台藩郡方	493 千人	413 千人	-16%
旧赤生津村	736 人	751 人	+2%

※ 天明の大飢饉前後の変化：旧赤生津村では大飢饉での死者がほとんど無い。

また、この領主の子孫には、「1703 年に本家から分家した際に、家屋は洪水害の無い山側に、農地は岡田（山麓地の水田）3 反、岡畑（山麓地の畑）3 反、谷起（低平地の農地）1 町、山林 3 町を承継した」という資料が残っている。

2）災害や苦難を乗り越えるための農村文化の継承

a）石にまつわる信仰文化

東稲山麓は石の宝庫であり、地域には、疱瘡の神とされた「お大師様」、皮膚病を癒す「疣石」、修験者が座禅を組んだ高さ 8 m を超す「座禅石」、すきまをくぐって安産祈願をした高さ約 6 m、巾約 9 m の「胎内石」（写真 77）、源義経が乗った馬の蹄の跡が残っているとされている「馬蹄石」、日照りが続くと火を焚いて雨乞いした「雨請石」、修行の場として使われた「大部ヶ岩」などの巨石が知られている。

これらは、地域住民の信仰の対象となっているほか、東稲山の北側の山毛櫓峠^{ぶな}周辺から採石された角閃石安山岩^{かくせんせきあんざんがん}は、長者ヶ原廃寺跡（11 世紀前半に建立、採石された場所からは直線距離で約 10km）の礎石として使われていたことが確認されている。

また、当地域は、渇水にも悩まされていたことから、雨乞いに関する史跡などが数多く残され、奥州市の生母地区と北上川西岸を結ぶ箱石橋付近の北上川中央



写真 77 胎内石

※ すき間をくぐって安産祈願したといわれる

部にある「箱石」と呼ばれる石(写真 78)は、古くから北上川の水位を測る目安とされ、渇水時には大きく姿を現すため、干ばつに見舞われた際には、この石の上で神楽を奉納して雨乞いをしたと伝えられている。



写真 78 北上川の中程にある「箱石」

b) 信仰と地域をつなぐ食文化

当地域における食文化は、「もち食文化」と「はっと（八斗）食文化」が伝統的な食として現在まで伝承されている。

当地域より北部は、安定的な米栽培が難しく、小麦やソバ、稗、粟などの雑穀栽培が主流であったことから、麦やソバなどの食文化になる。当地域の米は、生産量が少ない時代には貴重であり、多くが税あるいは商品作物とされたため、生産しながらも、長い間、主食となりえなかった。また、北上川沿いの肥沃な低平地は、氾濫洪水域のため畑作に限られていたこと、基本的には畑作が中心だったこと、山麓地では夏の寒さによる冷害の影響を受けにくい小麦が栽培されていたことなどから、日常食としては小麦粉を原料とする「はっと（八斗）食文化」が伝統的に残っている。「はっと」のほかにも、「きりばっと」（手打ちうどん）、「がんづき」、「麦まんじゅう」「げんべた」「葉焼き」など、小麦粉を使った伝統食も多いのが特徴的である。

もちをつく習慣が武士から農家へ広まっていくなかで農作業とも深い関わりを持つようになり、豊作と自然に感謝する「供え餅」、田植えの際の「さなぶりもち」、稲刈りの際の「おかりあげもち」、採油後に食べる「あぶらしめもち」など、共同作業の後に集まった人々にもちを振舞うようになった。もち振る舞いには、まさに家族と集落をつなぐ大切な役割があったといえ、当地域の共助の精神を表す習慣のひとつといえる。

なお、東稲山麓地域を含む一関・平泉地域の「もち食文化」は、農林水産省から「食と農の景勝地」として認定されており、魅力ある「もち食文化」の情報発信や継承による地域活性化に向け、「全国ご当地もちサミット」の開催のほか、もち食に関する新商品や体験プログラムの開発、観光客の受入環境の整備、もちマイスター検定等による伝承活動、小中学校における「もち本膳出前授業」（写真 79）等を実施している。

「はっと（八斗）」とは、小麦粉に水を加えてよく練り、熟成させて薄くのぼした生地を茹で上げる小麦粉料理の一種で、根菜類の入った汁物として食するものである（写真 80）。現在、道の駅や産地直売所などで、当地域を代表する郷土料理として提供されている。



写真 79 小中学校での「もち本膳出前授業」



写真 80 はっと料理

3) システムを支える社会組織

a) 耕地整理組合から現代の土地改良区へ

昭和初期以前の北上川沿いの低平地は、灌漑施設がなく、目の前を潤沢な水源となる北上川が流れているにもかかわらず、用水を利用できる農地はわずかであり、河川の氾濫と併せて、渇水にも悩まされてきた。当時の人々にとって、用水供給が安定的に行われる灌漑施設の整備は、最も重要なことであった。

耕地整理法(明治 32 年)に基づき設立された耕地整理組合は、当地域の灌漑施設等の整備を最初に進めるうえで重要な役割を果たし、さらに、土地改良法(昭和 24 年)に基づく土地改良区は、遊水地事業とあわせたほ場整備事業実施の中核組織として、実施地区全体の調整を行うなど、必要不可欠な組織であり、ほ場整備後も、水系毎に委員・管理者等を配置し、地域の共同作業等により、維持管理が行われ、重要な役割を果たしている(図 81)。

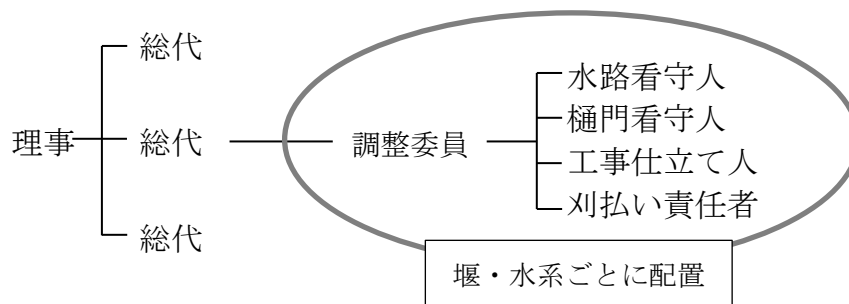


図 81 現在の土地改良区での地域での役割付け

b) 山麓地を支える多様な組織

当地域の山麓地は、農地や共有林等の管理・保全等を目的に活動している集落組織によって支えられている。

平泉町長島地区の 14 区営農環境保全会では、地域の営農環境を保全するため、棚田やため池の管理のほか、水源涵養のためのブナ林の管理や耕作放棄地を農地

に再生する等の取組を地区住民全員で行っている。

また、奥州市生母地区の天王組合では、大正時代から、地区住民全員で共有林を含む農地を管理している。公民館や天王神社の管理も同様に、かつては、「お神酒田」と言われる田んぼを共同で管理し、米の売上金を神社の運営費としていた。

c) 生産森林組合等の役割

奥州市生母地区の生母生産森林組合は、地域の森林の大半を共同管理しており、設立（昭和 31 年）以来、「組合の行う事業は、全て当該地域の公益に資する」という経営理念のもと、経営森林（約 300ha）による利益は公益に供されている。

これまで、地元小学校の改築や、有線放送施設整備、幼稚園の図書購入費等に補助や寄付を行っており、昭和 33 年～平成 26 年までの補助・寄付金総額は約 4 千万円を超えており（現在の価値に換算すると約 5 億円）、地域コミュニティの維持・発展に大きく貢献している。

また、同地区では、平成 23 年 4 月に改正された「森林法」に基づき、持続的な森林経営を行うために新たに制度化された森林経営計画の策定に、県内で最も早く取組を開始した。生母生産森林組合では、平成 24 年に県内で最初となる森林経営計画を策定し、効率的かつ持続的な森林施業（間伐、植林、適切な天然林の更新等）を行っている。

生母生産森林組合の林業経営は、月山松の保護（写真 82）やイロハモミジの森づくり活動、漆の里づくり活動（写真 83）、抵抗性アカマツの植栽等の松くい虫の被害対策、カモシカ等の獣害対策の実施など、多様な主体や地域の協働により、森林を循環利用しながら維持する仕組みが機能している。このような生母森林組合における長年の地域貢献が高く評価され、平成 24 年の「森林病虫害等防除活動優良事例コンクール」の林野庁長官賞のほか、様々な賞を受賞している。



写真 82 月山松



写真 83 林地への漆の植栽

(5) ランドスケープ及びシースケープの特徴

人々が自然災害と対峙しながら、長い時間をかけて造り上げてきた農林業システムによって、束稲山が連なる山々と山麓地、北上川沿いに広がる低平地からなる特徴的なランドスケープを形成されている。世界遺産「平泉」の対岸に位置する景観は、古くから和歌などに詠まれ、地域の象徴として親しまれている。

1) 立体的な土地利用が生み出す束稲山ランドスケープ

a) 蛇行する北上川と低平地及び山麓地の共生

肥沃な土と共に洪水害を発生させてきた山裾を蛇行しながら流れる北上川、川沿いに開けた農地のある低平地、山麓地の棚田とため池、そして共有林として管理されてきた森林等のある山地が、地域の人々の生活に様々な影響を与え、そして人々が工夫をこらしながら生活してきたことにより、独特のランドスケープを形成している(写真 84、85 及び 86)。



写真 84 束稲山麓地域と蛇行する北上川

Source: Esri, DigitalGlobe, GeoEye, Earthstar Geographics, CNES/Airbus DS, USDA, USGS, AeroGRID, IGN, and the GIS User Community

出典：国土地理院地図標高データ利用



写真 85 山麓側から見た蛇行する北上川沿いの低平地

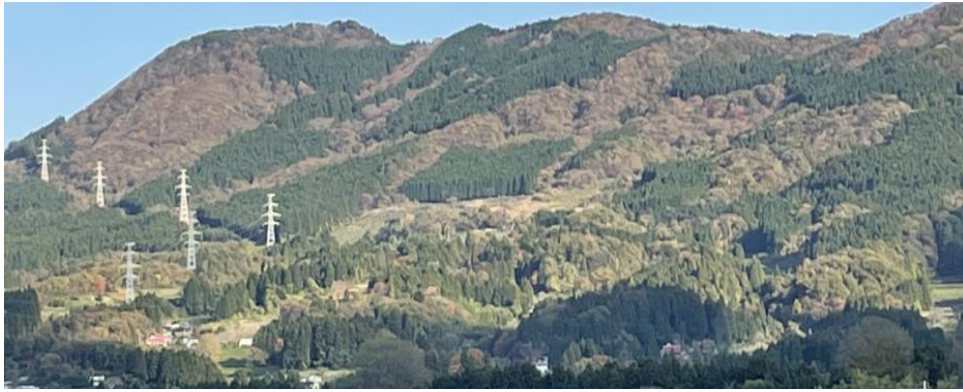


写真 86 広葉樹と針葉樹の混交林

b) 多様な棚田とため池

地域内には、不整形で、開墾時と同様の状況を残す棚田(写真 87)も残っている一方、限られた農地を活用するため、きれいに整形された石積棚田(写真 88)もあり、地域の状況に合わせた棚田を活用した営農・保全活動が行われている。

潤沢な湧水・沢水を有効利用するため、ため池が保全され、山麓地の営農は維持されている。



写真 87 金山棚田



写真 88 石積棚田

c) 森林の保全活動

森林保全(写真 89 及び 90)と一体となった用水の保全活動が行われることで、山麓地の営農が維持され、土砂災害の防止につながっている。



写真 89 月山松の保全活動



写真 90 保全管理されている森林

2) 地域の象徴として親しまれる東稲山と北上川

東稲山の山々、その山麓に展開する集落と棚田、その下に悠々と流れる北上川と低平地の水田によって形作られる東稲山麓地域の独特のランドスケープは、地域の象徴として昔から親しまれてきており、平泉中心域の対岸に位置することから、平泉の文化的景観としても重要であった。

平安時代後期の歌人である西行法師は、平泉を訪れた際に、全山に桜が植えられていたと言われる東稲山の美しさに感動して、次の和歌を詠んでいる（写真 91）。

みちのくにに、平泉にむかひて、東稲と申す山の侍るに、異木は少なきやうに、さくらの限り見えて、花の咲きたるを見てよめる

ききもせず 東稲山の さくら花 吉野の外に かかるべしとは（山家集）

〔現代語訳〕

聞いたこともない東稲山の桜が、桜の名所の吉野（奈良県）に勝るとも劣らないほど美しいとは驚いた。

また、江戸時代前期の俳諧師である松尾芭蕉は、西行法師が訪れてから約 500 年後に平泉を訪れ、源義経が最期を迎えたと伝えられる高館の丘で、次の句を詠んでいる。なお、「山河」とは、この高館から見た東稲山と北上川であったと考えられる。

国破れて山河あり、城春にして草青みたりと、

笠打敷て、時のうつるまで涙を落し侍りぬ（奥の細道）

〔現代語訳〕

「国が滅びてしまっても、山や河は昔と変わらずそのままであり、城跡にも春になると草木が生い茂っている」。笠を置いて腰をおろし、その詩を思い出しながら、いつまでも栄華盛衰の移ろいを思っ涙した。

さらに、平成 23 年に世界遺産登録となった「平泉」の文化遺産を取り巻く環境や景観を保護するために、構成資産の周囲に設けられた「緩衝地帯（バッファゾーン）※」に、当地域の一部が含まれていることから、世界遺産を守るためにも重要な場所であると言える。

※ 緩衝地帯（バッファゾーン）

利用に一定の制限を有する区域をいい、世界遺産登録のためには、緩衝地帯を確保することが条件となる。



写真 91 西行桜の森（現在）

（６）変化に対するレジリエンス

当地域の伝統的知識システムは、たび重なる自然災害や社会経済の変化にも柔軟に適応してきたレジリエンスに優れたシステムである。また、多様な主体による生態系の保全活動が次世代に確実に継承されている。

１）自然災害や社会経済への適応

複合的な災害リスク、すなわち低平地の水害、山麓地の干ばつ、山地の土砂災害に対して構築・継承されてきた地域共同に基づくリスク分散型の伝統的な土地利用システムは、当初から自然災害に備えたレジリエンスの高いシステムである。

低平地と山麓地で、米と商品作物の組み合わせは、災害時でも被害が最小減に抑えられるものであり、社会経済の変化に合わせて柔軟に品目転換を行ってきた。

また、当地域のシステムは、家族経営による小規模農家を中心とした地域コミュニティによって継承されており、災害に関連した文化伝統がコミュニティ内の結束力を強めている。

今後、自然災害が増加することや規模も大きくなることが想定されるが、いかなる自然災害があったとしても、本システムを支える農家および集落に蓄積された知識システムが存続する限り、将来に起こりうる自然災害や社会経済の変化に対しても、早期に回復する能力は十分に見込まれる。

２）生態系の変化に対する適応

低平地の水田、山麓地の棚田やため池、森林を一体的に管理する当地域のシステムにより、生物にとって良好な生息環境が保たれ、生物多様性の保全につながっている。

人の手が入らなくなることによって生物多様性が失われることが危惧されるが、ボランティアなど地域外の住民との連携による棚田（写真 92）やイロハモミジの森（写真 93）などの自然・景観を守る取組が行われており、次世代に確実に継承される仕組みが整いつつある。



写真 92 金山棚田の田植え



写真 93 「イロハモミジの森づくり」の取組

（７）多様な主体の参画

地元住民や多様な主体が参画・連携し、東稲山麓地域の自然や景観等の保全活動が積極的に行われている。

近年は、若い世代が中心となった棚田の保全活動や郷土芸能の継承など、新たな取組が拡大しつつある。

１）文化をつなぎ、地域を守る仕組み

ａ）西行桜の森

2015 年、国名勝「おくのほそ道風景地」に「さくら山」として追加指定されたのを契機に、地元住民等から構成される「東稲山さくらの会」が「西行桜の森」として保全活動に取り組んでいる（写真 94）。

「西行桜の森」は、往時の桜森を復活させ、森林の保全と保健休養を目的に桜の植林や保全管理が行われているとともに、「西行桜の森」内の木工芸館「遊鵬」は、地元木材を活用した工作体験や森林の重要性等について学ぶ場として活用されている。



写真 94 西行桜の森での桜の植樹

ｂ）金山棚田

一関市舞川地区の山麓地にある「金山棚田」では、農地 42a の中に百数枚の小区画の水田があり、百年以上にも渡って手作業による伝統的農耕により水稻栽培が行われている。所有者の高齢化により棚田の維持が困難になったことから、2020 年に地区外の若者有志による地域活動団体「プレイファーム」が継承し、オーナー制度を導入するなどして、棚田及び景観の維持、地域の知名度向上に向けて取り組んでいる。この取組が評価され、2022 年 2 月には農林水産省の「つなぐ棚田遺産」に選定されている（62 ページ掲載 写真 92）。

ｃ）ライス・アート in ひらいずみ

平泉町長島地区の遊水地内において、農事組合法人「アグリ平泉」が、平成 21 年から、水田に有色米で絵を描く田んぼアート「ライス・アート in ひらいずみ」を行っている（写真 95）。毎年、平泉に縁のある図柄を選定し、その田植えや稲刈



写真 95 「ライス・アート」の田植え

りには町内の小中学生や町内外の消費者が多数参加するほか、農業体験で訪れる首都圏等からの修学旅行生も加わり、都市と農村との交流が生まれている。

d) 地域ぐるみで取り組む活性化

世界農業遺産認定に向けた取組を契機に、新たな地域づくりが始まっている。

地域内の自治会・団体等で構成される「赤生津地域活性化協議会」（図 96）では、地域の自然や生態系の保全を目的とした生き物調査や自然観察会などに取り組んでおり、地域の若い世代が中心となって結成した「母体地域活性化協議会・もたい元気の会」では、地域の歴史を学ぶ研修会や郷土芸能の継承などの取組を行っている。地区外の地域活動団体との交流会などとともに、地域全体へ活性化の取組が浸透している。



図 96 経塚・月山植物ガイドブック等

※ 赤生津地域活性化協議会作成

2) 企業等と連携した地域活性化

a) 西行桜の森

「東稲山さくらの会」では、県内企業との連携により、県内外から集まった参加者が「西行桜の森」周辺を散策しながら、東稲山麓の自然や歴史、文化に対する理解を深めるイベント「平泉・ネイチャーウォーキング」を開催するなど、地域活性化や景観保全に取り組んでいる（写真 97）。



写真 97 平泉・ネイチャーウォーキング

b) イロハモミジの森

「生母生産森林組合」と「いわて生活協同組合」が連携し、奥州市生母地区の旧家の庭園にあり、奥州市の天然記念物にも指定されている 2 本のイロハモミジ（樹齢約 580 年、約 300 年）から苗木をつくり、イロハモミジを植栽するとともに、苗木周辺の雑草等の刈り払い等の活動を行い、東稲山を彩る紅葉の森づくり活動を展開している（21 ページ掲載 写真 26）。

c) 社会貢献プログラムの取組

高齢化・人口減少が課題となっている農村活性化の起爆剤として、企業連携の取組を進めており、これまでに首都圏企業2社と一関市舞川地区の「五区楽そば倶楽部」と平泉町長島地区の「14 区営農環境保全会」が協定を締結し、農地等の保全や特産品商品の開発などの活動を行っている。今後とも、連携先企業の拡大等に向けて取り組むこととしている(写真 98)。



写真 98 連携協定締結式

（８）６次産業化の推進

伝統的な知識システムを育んできた共同・共助の精神に基づき、農事組合法人や女性活動団体等が地域の多様な資源を活用した６次産業化の取組が活発化している。

こうした取組は、農家経営の安定と地域活性化とともに、当システムの将来への発展に寄与するものである。

１）地域資源を生かした６次産業化の取組

ａ）農事組合法人の取組

地元の農事組合法人「アグリ平泉」が生産している小麦のみを使用したパン工房が産直施設に併設され、地域の旬の素材(かぼちゃ、りんごなど)を使った 30 種類以上のパンを製造しており、地域内外の方から好評を得ている(写真 99)。また、最近ではワイナリーを保有し、県外から醸造担当者を迎え入れ、地元で生産されたぶどうからワイン製造・販売までを行い、地域の雇用創出と地域活性化に寄与している(写真 100)。



写真 99 地元産小麦 100%のパン



写真 100 地元産ぶどうのワイ

ｂ）女性活動団体等の取組

地元の女性活動団体が、地元産の米と大豆を使用し、昔ながらの製法で自然熟成させた「長島みそ」は、産直施設やイベント等で販売しており、県外からの購入者も多い(写真 101)。

また、地元産直の加工製造部門で開発された「前沢牛コロッケ」は、地元産食材にこだわり、コロッケに適したキタアカリと前沢牛を材料とし、自社の販売所のほか、高速道路 SA や地域内外の産直施設での販売と、飲食店にも提供している(写真 102)。

この他、地域特産の「からし菜」から加工した「和からしソフトクリーム」、「からし肉まん」等も産直施設などで販売しており、地域内外の方から好評を得ている。



写真 101 地元産大豆の味噌



写真 102 「前沢牛コロッケ」

地元農家が運営する産直施設「産直あいあい」や「母ちゃん市場」では、当地域

の農林業システムによって生産される多様な農産物や加工品が販売されている。

c) 農福連携の取組

社会福祉法人平成会の通所授産施設である「マイリバー」と一関市舞川地区が連携し、地元農家との交流や地域農業の活性化を図るため、「いわてカシス研究会」を設立し、休耕地等を活用しながらカシス栽培に取り組んでおり、収穫されたカシスは、施設でジャムやジュース等に加工販売されている。

d) 観光の取組

一関市舞川地区で造林業を営む個人が、仕事場である杉林の環境美化と保全のため、昭和 58 年、ヒメアジサイを挿し木したのが始まりで、近隣住民だけでなく、全国のあじさい愛好家や業者から苗が提供され、全国的にも珍しい原種のヤマアジサイを中心とした東日本最大級の「みちのくあじさい園」(15ha)を開園している。例年 7 月頃、300 種 3 万株以上のアジサイが広大な杉林に咲き、全国から観光客が訪れている(写真 103)。



写真 103 みちのくあじさい園

この他、各地区では、地域資源を生かした観光客の増加と地域住民の地域への愛着増加等を目的に、「束稲山麓周回トレイルコース」の整備や、「地区案内板」の修繕、地域の見どころをまとめた「マップ」の作成など、地域団体が主体となった取組が積極的に行われている。

e) 地域全体の取組

世界農業遺産認定に向けた取組を契機に、3 地区の交流と特産品の販売促進を目的として「束稲山麓地域 3 市町物産販売促進委員会」が新たに設立された。地域内で 6 次産業化等に取り組む 12 の地域団体が参加し、当地域の魅力や特産品等を紹介する「食の恵みマップ」の作成や、地域内外で特産加工品等を販売・紹介する取組を行っている(写真 104)。



写真 104 地元産業まつりで商品販売

2) 関係機関・団体等による取組支援

市町や県では、地元農産物の付加価値向上や新たな雇用創出等を目指し、6次産業化相談会やセミナー等を開催しているほか、新商品開発や加工施設整備、販路開拓等を支援する制度を活用しながら、6次産業化の取組を積極的に支援している。

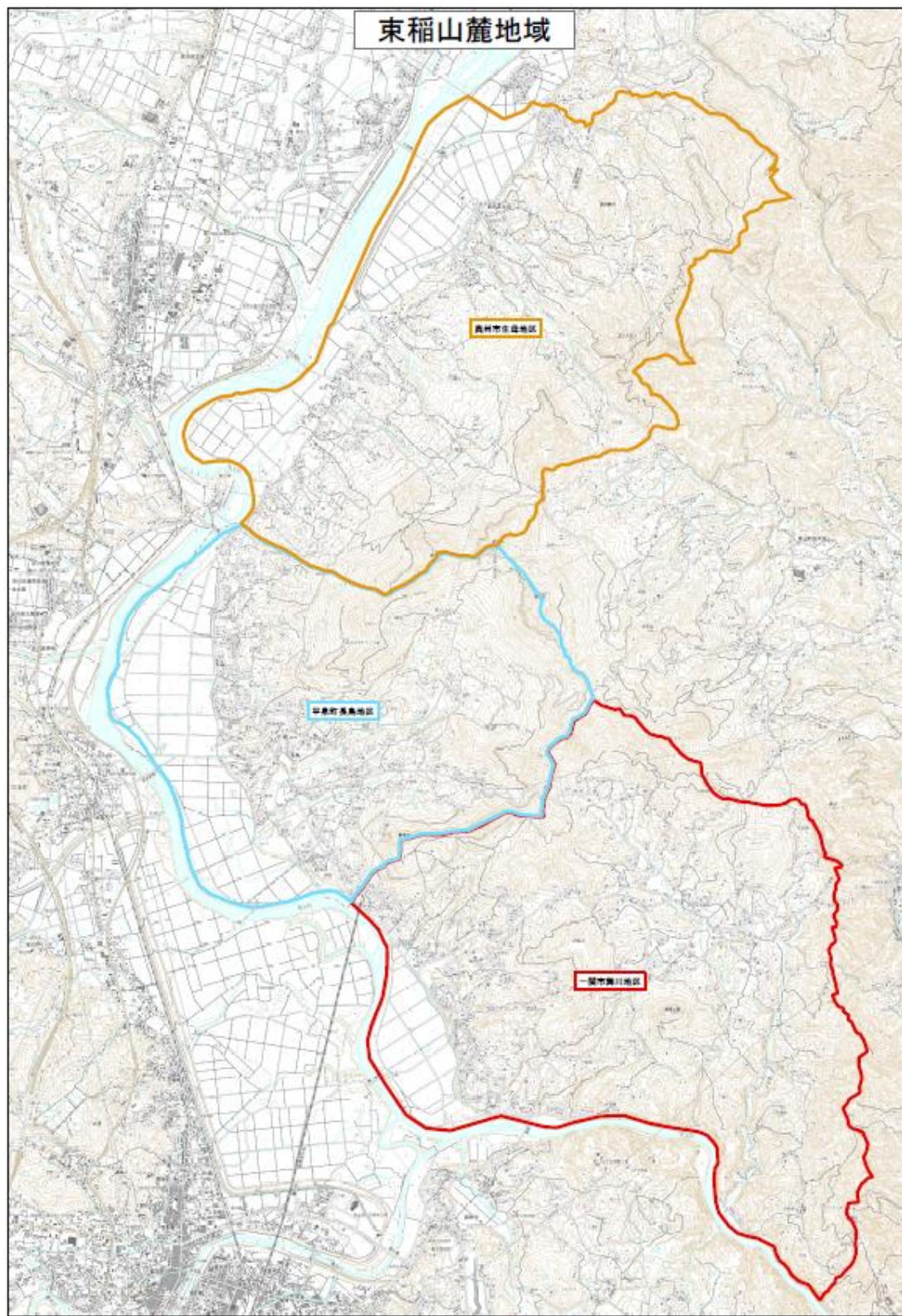
引用・参考文献

1	阿部和夫 北上盆地南端部の水利と農地開発 歴史地理学紀要 22 (1980)
2	阿部和夫 近代平泉の成立と発展 岩手県南史談会研究発表会資料 (2014)
3	阿部和夫 束稲山麓における農村景観の成立とその変化 岩手史学研究 100 号 (2019)
4	丸山幸夫「概観・平泉の産業史 ―農業・商工業―」(1997)
5	山田安彦 明治以降における北上川治水の歴史地理学的分析に関する覚え書 (1975)
6	鈴木軍之進 北上川磐井盆地の治水対策について(1969)
7	梯滋郎・中村晋一郎・沖大幹・沖一雄 「日本の水害常襲地の分布とその特性」 土木学会論文集 B 1 (水工学) (2014)
8	内田和子「遊水地と治水計画 1―応用地理学からの提言―」第 6 章 集落移転と補償問題 株式会社古今書院発行 (1985)
9	「北上川水系河川整備計画」国土交通省東北地方整備局 岩手河川国道事務所
10	「北上川 全 9 輯」国土交通省東北地方整備局 岩手河川国道事務所
11	「北上川・陸と海を結ぶ道―江戸時代の舟運―」一関市博物館編集・発行 (2018)
12	長島耕地整理組合二十周年記念開田誌(1952)
13	平成 28 年度束稲山麓地区ため池諸元調査報告書(2017) 計画機関：北上川東部土地改良区 作業機関：岩手県土地改良事業団体連合会
14	平成 29 年度束稲山麓地区節水モデル検討調査報告書(2018) 計画機関：北上川東部土地改良区 作業機関：岩手県土地改良事業団体連合会
15	一関市博物館第 20 回企画展「地を量る ―描かれた国、町、村―」一関市博物館編集・発行 (2013)
16	絵で見る古里「一関郷村絵図」 株式会社岩手日日新聞社発行 (2003)
17	生母生産森林組合「60 年のあゆみ」生母生産森林組合を支援する会編集 (2015)
18	久本真大 「生産森林組合を核とした森林の管理・経営展開の実情と今後の可能性」岩手大学大学院農学研究科修士課程共生環境専攻 修士論文 (2016)

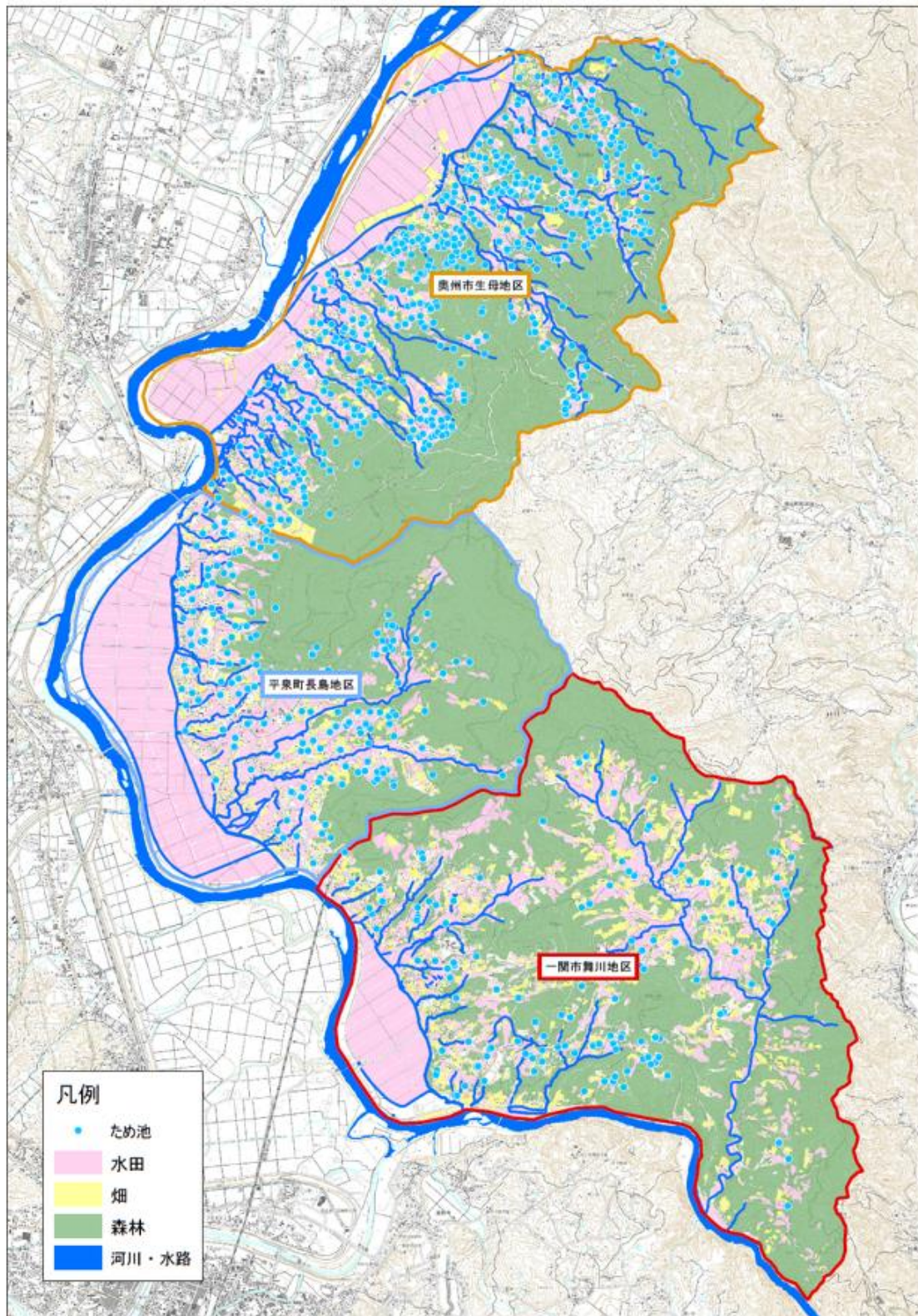
19	長者ヶ原廃寺跡発掘調査報告書—総括編— 岩手県奥州市教育委員会 (2013)
20	南部神楽調査報告書 岩手県一関市文化財調査報告書第5集 一関市教育委員会 (2016)
21	舞川地域づくり計画 舞川地域課題対策協議会 (2017)
22	小野寺信吾ら「みちのく古里物語 —舞川の里—」 「みちのく古里物語—舞川の里—」編集委員会編集・発行 (1984)
23	岩手県東磐井郡 生母 村勢要覧復刻版(昭和29年度版) 「生母村 村勢要覧昭和29年度版」を再刊する会 (2018)
24	平泉歴史的地名調査事業「地名の旅」第1集長島編 平泉郷土館編集・発行 (2004)
25	岩手県史 第4巻 近世編
26	「平泉町史 自然編・民族編(一)」 平泉町発行 (1997)
27	前沢町史 上巻(1974)、中巻(1976)
28	一関市史
29	第4次レッドリスト 環境省 (2012)
30	高橋嘉太郎「岩手県下之町村」岩手毎日新聞社発行 (大正14年)
31	藩史大辞典第1巻 北海道・東北編
32	諏訪夢人・西廣淳 「日本における遊水地の分布と立地特性」 応用生態工学会会誌 23巻1号 (2020)
33	いわてレッドデータブック岩手の希少な野生生物 web版 岩手県環境生活部 自然保護課 (2020)

添付資料

1. 地域の位置図

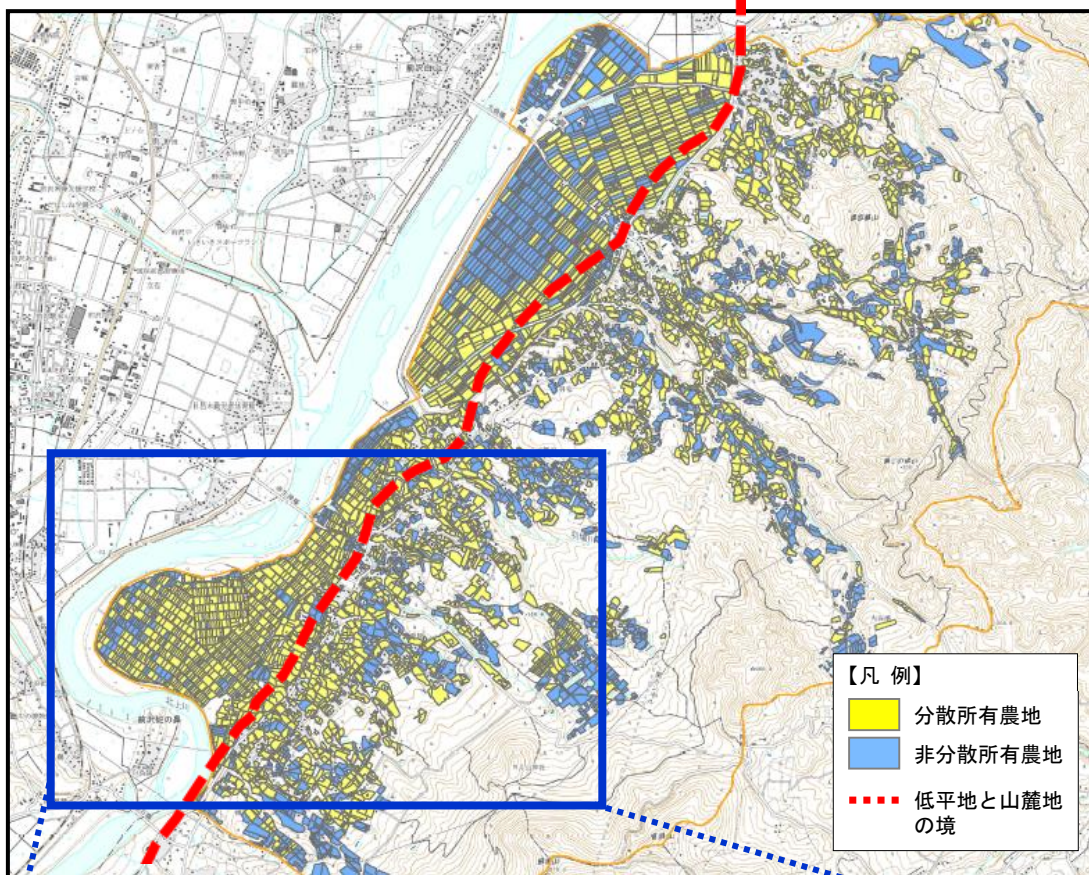


2. 地域の土地利用図

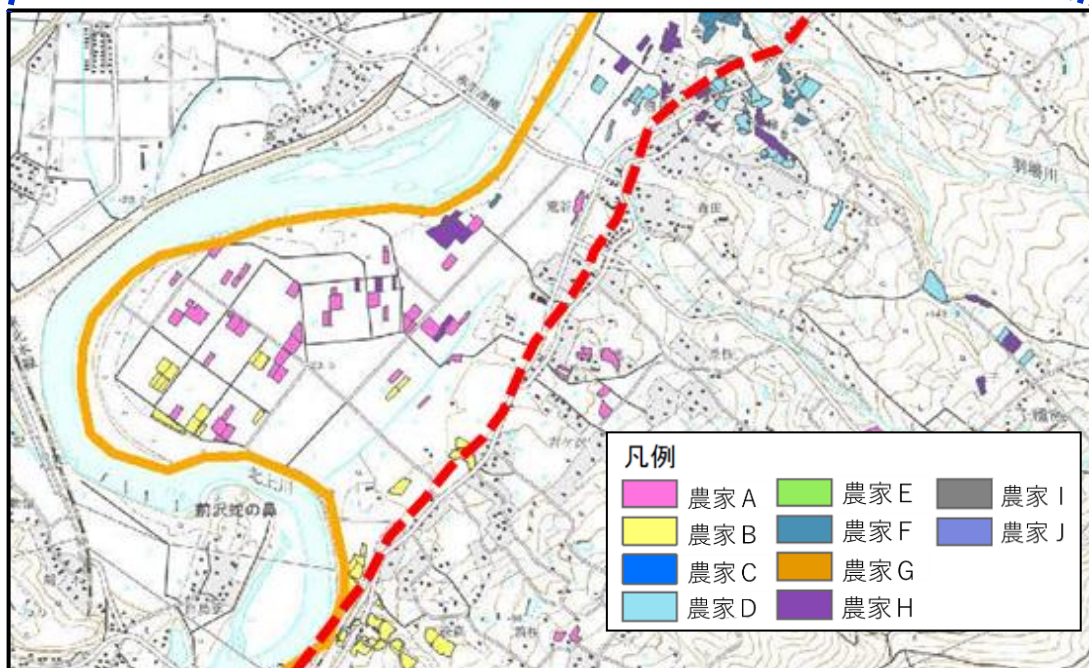


3. 農地の分散所有状況

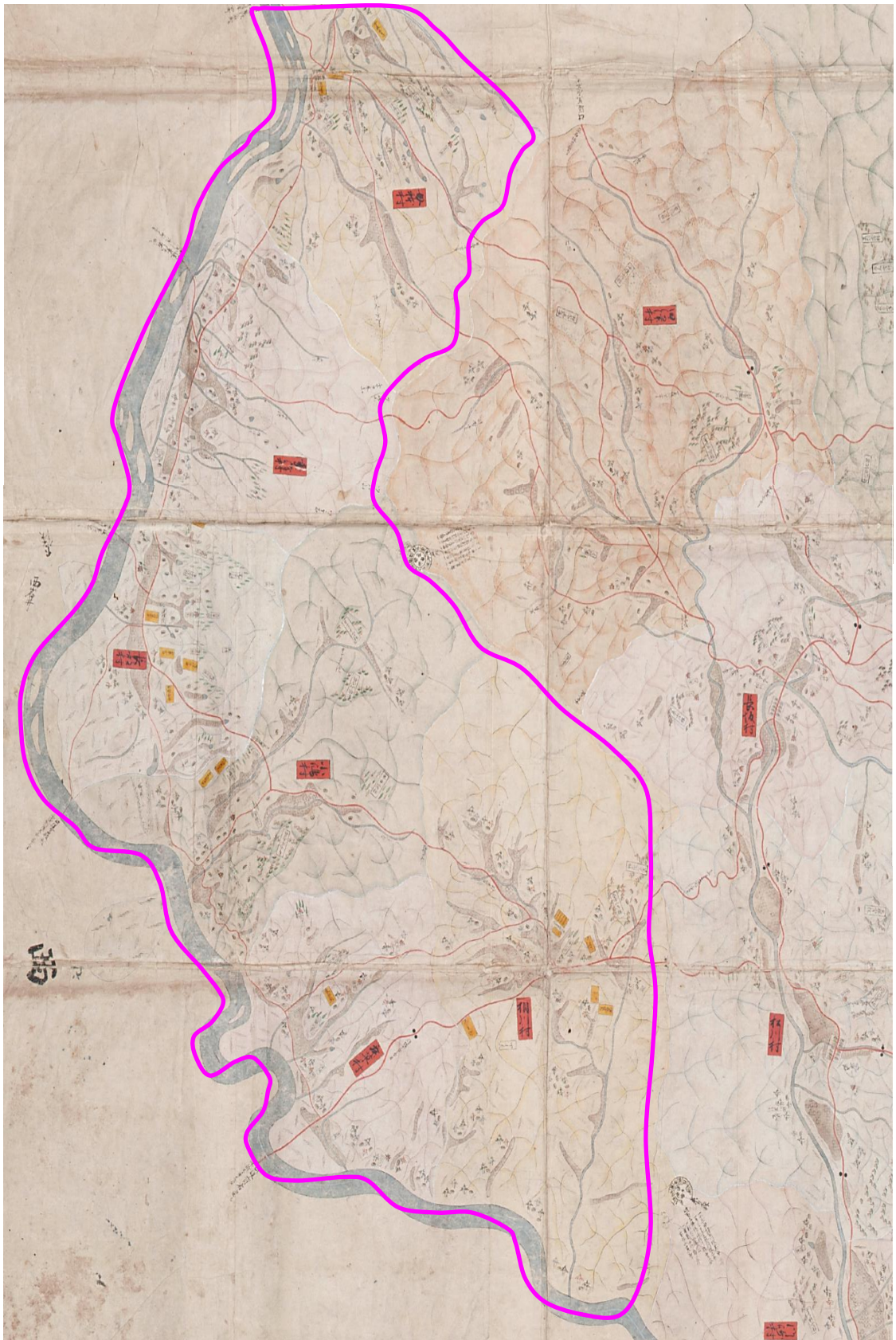
【奥州市生母地区】



【分散所有農地の面積が多い上位 10 戸の所有状況】



4. 東山分間絵図（1698（元禄 11）年）



5. 東稲山麓地域における生物多様性リスト

●RDB-Japan（環境省レッドリスト）

- ・ VU：絶滅危惧Ⅱ類
- ・ NT：準絶滅危惧

●RDB-Iwate（いわてレッドデータブック）

- ・ Aランク：絶滅の危機に瀕している種（環境省 RDB カテゴリーの「絶滅危惧Ⅰ類」の基準に相当する種）
- ・ Bランク：絶滅の危機が増大している種（環境省 RDB カテゴリーの「絶滅危惧Ⅱ類」の基準に相当する種）
- ・ Cランク：存続基盤が脆弱な種（環境省 RDB カテゴリーの「準絶滅危惧」の基準に相当する種）
- ・ Dランク：Cランクに準ずる種、優れた自然環境の指標となる種、岩手県を南限または北限とする種

（１）植物

No.	学名	科名	和名	沖積地	棚田	ため池	森林	RDB-Iwate	RDB-Japan
1	<i>Lycopodium clavatum</i> L.	ヒカゲノカズラ	ヒカゲノカズラ				●		
2	<i>Equisetum arvense</i> L.	トクサ	スギナ	●	●		●		
3	<i>Botrychium ternatum</i> (Thunb.) Sw.	ハナヤスリ	フユノハナワラビ		●		●		
4	<i>Osmunda japonica</i> Thunb.	ゼンマイ	ゼンマイ		●		●		
5	<i>Dennstaedtia wilfordii</i> (Moore) Christ	コバノイシカグマ	オウレンシダ				●		
6	<i>Pteridium aquilinum</i> (L.) Kuhn var. <i>latiusculum</i> (Desv.) Underw. ex Hell.	コバノイシカグマ	ワラビ		●		●		
7	<i>Adiantum pedatum</i> L.	ホウライシダ	クジャクシダ		●		●		
8	<i>Coniogramme japonica</i> (Thunb.) Diels	ホウライシダ	イワガネソウ				●		
9	<i>Asplenium incisum</i> Thunb.	チャセンシダ	トラノオシダ		●		●		
10	<i>Asplenium scolopendrium</i> L.	チャセンシダ	コタニワタリ				●		
11	<i>Blechnum niponicum</i> (Kunze) Makino	シシガシラ	シシガシラ		●		●		
12	<i>Arachniodes borealis</i> Serizawa	オシダ	ホソバナライシダ				●		
13	<i>Arachniodes standishii</i> (Moore) Ohwi	オシダ	リョウメンシダ		●		●		
14	<i>Cyrtomium fortunei</i> J.Sm. var. <i>clivicola</i> (Makino) Tagawa	オシダ	ヤマヤブソテツ				●		
15	<i>Dryopteris bissetiana</i> (Bak.) C.Chr.	オシダ	ヤマイタチシダ		●		●		
16	<i>Polystichum ovato-paleaceum</i> (Kodama) Kurata	オシダ	ツヤナシイノデ				●		
17	<i>Polystichum tripterum</i> (Kunze) Presl	オシダ	ジュウモンジシダ		●				
18	<i>Thelypteris japonica</i> (Bak.) Ching var. <i>japonica</i>	ヒメシダ	ハリガネワラビ				●		
19	<i>Thelypteris palustris</i> (Salisb.) Schott	ヒメシダ	ヒメシダ		●		●		
20	<i>Athyrium deltoideifrons</i> Makino	イワデンダ	サトメシダ		●				
21	<i>Athyrium vidalii</i> (Fr. et Sav.) Nakai var. <i>vidalii</i>	イワデンダ	ヤマイヌワラビ		●		●		
22	<i>Athyrium yokoscense</i> (Fr. et Sav.) Christ	イワデンダ	ヘビノネコザ		●		●		
23	<i>Deparia conilii</i> (Fr. et Sav.) M.Kato	イワデンダ	ホソバシケシダ		●		●		
24	<i>Deparia japonica</i> (Thunb.) M.Kato	イワデンダ	シケシダ		●		●		
25	<i>Deparia pycnosora</i> (Christ) M.Kato var. <i>pycnosora</i>	イワデンダ	ミヤマシケシダ				●		
26	<i>Onoclea orientalis</i> (Hook.) Hook.	イワデンダ	イヌガンソク				●		
27	<i>Onoclea sensibilis</i> L. var. <i>interrupta</i> Maxim.	イワデンダ	コウヤワラビ	●	●		●		
28	<i>Cryptomeria japonica</i> (L.fil.) D.Don	スギ	スギ		●		●		
29	<i>Abies firma</i> Sieb. et Zucc.	マツ	モミ				●	D	

No.	学名	科名	和名	沖積地	棚田	ため池	森林	RDB-Iwate	RDB-Japan
30	<i>Pinus densiflora</i> Sieb. et Zucc.	マツ	アカマツ		●		●		
31	<i>Torreya nucifera</i> (L.) Sieb. et Zucc.	イチイ	カヤ				●	D	
32	<i>Juglans mandshurica</i> Maxim. var. <i>sachalinensis</i> (Miyabe et Kudo) Kitamura	クルミ	オニグルミ		●		●		
33	<i>Populus sieboldii</i> Miq.	ヤナギ	ヤマナラシ				●		
34	<i>Salix gilgiana</i> Seemen	ヤナギ	カワヤナギ		●				
35	<i>Salix integra</i> Thunb.	ヤナギ	イヌコリヤナギ		●				
36	<i>Salix jessoensis</i> Seemen	ヤナギ	シロヤナギ		●				
37	<i>Salix sachalinensis</i> Fr.Schm.	ヤナギ	オノエヤナギ		●				
38	<i>Salix subfragilis</i> Andersson	ヤナギ	タチヤナギ	●					
39	<i>Salix vulpina</i> Andersson	ヤナギ	キツネヤナギ		●		●		
40	<i>Betula maximowicziana</i> Regel	カバノキ	ウダイカンバ				●		
41	<i>Carpinus laxiflora</i> (Sieb. et Zucc.) Bl.	カバノキ	アカシデ				●		
42	<i>Corylus heterophylla</i> Fischer ex Besser var. <i>thunbergii</i> Bl.	カバノキ	ハシバミ				●		
43	<i>Corylus sieboldiana</i> Bl. var. <i>sieboldiana</i>	カバノキ	ツノハシバミ		●		●		
44	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	ブナ	クリ		●		●		
45	<i>Quercus acutissima</i> Carruthers	ブナ	クヌギ				●		
46	<i>Quercus serrata</i> Thunb. ex Murray var. <i>serrata</i>	ブナ	コナラ		●		●		
47	<i>Celtis jessoensis</i> Koidz.	ニレ	エゾエノキ				●		
48	<i>Celtis sinensis</i> Pers. var. <i>japonica</i> (Planch.) Nakai	ニレ	エノキ				●		
49	<i>Zelkova serrata</i> (Thunb.) Makino	ニレ	ケヤキ		●				
50	<i>Broussonetia kazinoki</i> Sieb.	クワ	ヒメコウゾ		●		●		
51	<i>Humulus japonicus</i> Sieb. et Zucc.	クワ	カナムグラ		●				
52	<i>Humulus lupulus</i> L. var. <i>cordifolius</i> (Miq.) Maxim.	クワ	カラハナソウ		●		●		
53	<i>Morus australis</i> Poir.	クワ	ヤマグワ	●	●		●		
54	<i>Boehmeria tricuspidata</i> (Hance) Makino var. <i>tricuspidata</i>	イラクサ	アカソ	●	●		●		
55	<i>Pilea mongolica</i> Wedd.	イラクサ	アオミズ		●		●		
56	<i>Antennaria filiformis</i> (Thunb.) Robert et Vautier	タデ	ミズヒキ		●		●		
57	<i>Persicaria conspicua</i> (Nakai) Nakai	タデ	サクラタデ	●				C	
58	<i>Persicaria hydropiper</i> (L.) Spach	タデ	ヤナギタデ	●	●				
59	<i>Persicaria longiseta</i> (De Bruyn) Kitag.	タデ	イヌタデ	●	●		●		
60	<i>Persicaria nepalensis</i> (Meisn.) H.Gross	タデ	タニソバ		●				
61	<i>Persicaria nipponensis</i> (Makino) H.Gross	タデ	ヤノネグサ		●				
62	<i>Persicaria sieboldii</i> (Meisn.) Ohki	タデ	アキノウナギツカミ		●				
63	<i>Persicaria thunbergii</i> (Sieb. et Zucc.) H.Gross	タデ	ミゾソバ	●	●				
64	<i>Persicaria yokusaiana</i> (Makino) Nakai	タデ	ハナタデ		●		●		
65	<i>Reynoutria japonica</i> Houtt. var. <i>japonica</i>	タデ	イタドリ		●		●		
66	<i>Rumex obtusifolius</i> L.	タデ	エゾノギシギシ	●	●		●		
67	<i>Rumex acetosa</i> L.	タデ	スイバ	●	●		●		
68	<i>Rumex longifolius</i> DC.	タデ	ノダイオウ		●			C	VU
69	<i>Phytolacca americana</i> L.	ヤマゴボウ	ヨウシュヤマゴボウ		●				
70	<i>Portulaca oleracea</i> L.	スベリヒユ	スベリヒユ	●	●				
71	<i>Arenaria serpyllifolia</i> L.	ナデシコ	ノミノツヅリ		●				
72	<i>Cerastium holosteoides</i> Fries var. <i>hallaisanense</i> (Nakai) Mizushima	ナデシコ	ミミナグサ		●				
73	<i>Cucubalus baccifer</i> L. var. <i>japonicus</i> Miq.	ナデシコ	ナンバンハコベ		●				
74	<i>Dianthus superbus</i> L. var. <i>longicalycinus</i> (Maxim.) Williams	ナデシコ	カワラナデシコ		●	●		C	
75	<i>Myosoton aquaticum</i> (L.) Moench	ナデシコ	ウシハコベ		●		●		

No.	学名	科名	和名	沖積地	棚田	ため池	森林	RDB-Iwate	RDB-Japan
76	<i>Sagina japonica</i> (Sw.) Ohwi	ナデシコ	ツメクサ	●					
77	<i>Stellaria alsine</i> Grimm var. <i>undulata</i> (Thunb.) Ohwi	ナデシコ	ノミノフスマ	●	●				
78	<i>Stellaria media</i> (L.) Villars	ナデシコ	コハコベ(ハコベ)	●	●		●		
79	<i>Chenopodium album</i> L.	アカザ	シロザ		●				
80	<i>Achyranthes bidentata</i> Blume var. <i>japonica</i> Miq.	ヒユ	イノコズチ				●		
81	<i>Achyranthes bidentata</i> Blume var. <i>tomentosa</i> (Honda) Hara	ヒユ	ヒナタイノコズチ	●	●				
82	<i>Amaranthus lividus</i> L. var. <i>ascendens</i> (Lois.) Thell.	ヒユ	イヌビユ		●				
83	<i>Magnolia obovata</i> Thunb.	モクレン	ホオノキ		●		●		
84	<i>Magnolia praecoxissima</i> Koidz. var. <i>borealis</i> (Sargent) Koidz.	モクレン	キタコブシ		●		●		
85	<i>Schisandra nigra</i> Maxim.	マツブサ	マツブサ				●		
86	<i>Lindera praecox</i> (Sieb. et Zucc.) Blume var. <i>praecox</i>	クスノキ	アブラチャン		●		●		
87	<i>Lindera umbellata</i> Thunb. var. <i>membranacea</i> (Maxim.) Momiyama	クスノキ	オオバクロモジ		●		●		
88	<i>Clematis apiifolia</i> DC. var. <i>apiifolia</i>	キンポウゲ	ボタンヅル		●		●		
89	<i>Coptis japonica</i> (Thunb.) Makino var. <i>dissecta</i> (Yatabe) Nakai	キンポウゲ	セリバオウレン		●				
90	<i>Ranunculus cantoniensis</i> DC.	キンポウゲ	ケキツネノボタン	●	●		●		
91	<i>Ranunculus silerifolius</i> var. <i>silerifolius</i>	キンポウゲ	ヤマキツネノボタン		●		●		
92	<i>Thalictrum minus</i> L. var. <i>hypoleucum</i> (Sieb. et Zucc.) Miq.	キンポウゲ	アキカラマツ		●		●		
93	<i>Caulophyllum robustum</i> Maxim.	メギ	ルイヨウボタン				●		
94	<i>Epimedium koreanum</i> Nakai	メギ	キバナイカリソウ				●		
95	<i>Akebia quinata</i> (Thunb.) Decaisne	アケビ	アケビ		●		●		
96	<i>Akebia trifoliata</i> (Thunb.) Koidz.	アケビ	ミツバアケビ		●		●		
97	<i>Cocculus trilobus</i> (Thunb.) DC.	ツツラフジ	アオツツラフジ		●				
98	<i>Houttuynia cordata</i> Thunb.	ドクダミ	ドクダミ		●		●		
99	<i>Chloranthus japonicus</i> Sieb.	センリョウ	ヒトリシズカ				●		
100	<i>Chloranthus serratus</i> (Thunb.) Roem. et Schult.	センリョウ	フタリシズカ		●				
101	<i>Asiasarum sieboldii</i> (Miq.) F.Maek. var. <i>sieboldii</i>	ウマノスズクサ	ウスバサイシン				●		
102	<i>Actinidia arguta</i> (Sieb. et Zucc.) Planch. ex Miq.	マタタビ	サルナシ		●		●		
103	<i>Actinidia polygama</i> (Sieb. et Zucc.) Planch. ex Maxim.	マタタビ	マタタビ		●				
104	<i>Camellia japonica</i> L. var. <i>japonica</i>	ツバキ	ヤブツバキ				●		
105	<i>Hypericum erectum</i> Thunb.	オトギリソウ	オトギリソウ		●				
106	<i>Sarothra laxa</i> (Blume) Y.Kimura	オトギリソウ	コケオトギリ	●	●				
107	<i>Chelidonium majus</i> L. var. <i>asiaticum</i> (Hara) Ohwi	ケシ	クサノオウ	●	●				
108	<i>Cardamine flexuosa</i> With.	アブラナ	タネツケバナ		●				
109	<i>Cardamine regeliana</i> Miq.	アブラナ	オオバタネツケバナ		●				
110	<i>Draba nemorosa</i> L.	アブラナ	イヌナズナ		●				
111	<i>Lepidium virginicum</i> L.	アブラナ	マメグンバイナズナ	●					
112	<i>Rorippa indica</i> (L.) Hiern	アブラナ	イヌガラシ	●	●		●		
113	<i>Rorippa islandica</i> (Oeder) Borbás	アブラナ	スカシタゴボウ		●				
114	<i>Wasabia japonica</i> (Miq.) Matsum.	アブラナ	ワサビ		●				
115	<i>Sedum aizoon</i> L. var. <i>floribundum</i> Nakai	ベンケイソウ	キリンソウ		●				
116	<i>Sedum sarmentosum</i> Bunge	ベンケイソウ	ツルマンネングサ	●			●		
117	<i>Sesum bulbiferum</i> Makino	ベンケイソウ	コモチマンネングサ		●				
118	<i>Astilbe thunbergii</i> (Sieb. et Zucc.) Miq. var. <i>congesta</i> H.Boiss.	ユキノシタ	トリアシショウマ		●		●		
119	<i>Deutzia crenata</i> Sieb. et Zucc.	ユキノシタ	ウツギ		●		●		
120	<i>Hydrangea paniculata</i> Sieb. et Zucc.	ユキノシタ	ノリウツギ		●		●		

No.	学名	科名	和名	沖積地	棚田	ため池	森林	RDB-Iwate	RDB-Japan
121	<i>Hydrangea petiolaris</i> Sieb. et Zucc.	ユキノシタ	ツルアジサイ		●		●		
122	<i>Schizophragma hydrangeoides</i> Sieb. et Zucc.	ユキノシタ	イワガラミ				●		
123	<i>Agrimonia nipponica</i> Koidz.	バラ	キンミズヒキ		●		●		
124	<i>Aruncus dioicus</i> (Walt.) Fern. var. <i>tenuifolius</i> (Nakai) Hara	バラ	ヤマブキショウマ		●		●		
125	<i>Duchesnea chrysantha</i> (Zoll. et Mor.) Miq.	バラ	ヘビイチゴ	●	●		●		
126	<i>Geum japonicum</i> Thunb.	バラ	ダイコンソウ		●				
127	<i>Kerria japonica</i> (L.) DC.	バラ	ヤマブキ		●		●		
128	<i>Malus toringo</i> (Sieb.) Sieb. ex Vriese var. <i>toringo</i>	バラ	ズミ		●				
129	<i>Potentilla centigrana</i> Maxim.	バラ	ヒメヘビイチゴ	●	●				
130	<i>Prunus grayana</i> Maxim.	バラ	ウワミズザクラ		●		●		
131	<i>Prunus pendula</i> Maxim. f. <i>ascendens</i> (Makino) Ohwi	バラ	エドヒガン		●		●		
132	<i>Prunus verecunda</i> (Koidz.) Koehne	バラ	カスミザクラ				●		
133	<i>Rosa multiflora</i> Thunb.	バラ	ノイバラ		●		●		
134	<i>Rubus crataegifolius</i> Bunge	バラ	クマイチゴ		●				
135	<i>Rubus microphyllus</i> L.fil.	バラ	ニガイチゴ		●		●		
136	<i>Rubus palmatus</i> Thunb. var. <i>coptophyllus</i> A.Gray	バラ	モミジイチゴ		●		●		
137	<i>Rubus parvifolius</i> L.	バラ	ナワシロイチゴ		●		●		
138	<i>Stephanandra incisa</i> (Thunb.) Zabel	バラ	コゴメウツギ		●		●		
139	<i>Albizia julibrissin</i> Durazz.	マメ	ネムノキ		●		●		
140	<i>Amphicarpaea bracteata</i> (L.) Fernald subsp. <i>edgeworthii</i> (Benth.) Ohashi var. <i>japonica</i> (Oliver) Ohashi	マメ	ヤブマメ		●		●		
141	<i>Desmodium podocarpum</i> DC. subsp. <i>oxyphyllum</i> (DC.) Ohashi	マメ	ヌスビトハギ		●		●		
142	<i>Lespedeza bicolor</i> Turcz.	マメ	ヤマハギ		●				
143	<i>Lespedeza cyrtobotrya</i> Miq.	マメ	マルバハギ		●		●		
144	<i>Lespedeza juncea</i> (L.fil.) Pers. var. <i>subsessilis</i> Miq.	マメ	メドハギ		●				
145	<i>Lespedeza pilosa</i> (Thunb.) Sieb. et Zucc.	マメ	ネコハギ		●				
146	<i>Pueraria lobata</i> (Willd.) Ohwi	マメ	クズ	●	●		●		
147	<i>Trifolium pratense</i> L.	マメ	ムラサキツメクサ	●	●		●		
148	<i>Trifolium repens</i> L.	マメ	シロツメクサ	●	●				
149	<i>Vigna angularis</i> (Willd.) Ohwi et H. Ohashi var. <i>nipponensis</i> (Ohwi) Ohwi et H. Ohashi	マメ	ヤブツルアズキ	●	●				
150	<i>Wisteria floribunda</i> (Willd.) DC.	マメ	フジ		●		●		
151	<i>Oxalis corniculata</i> L.	カタバミ	カタバミ		●				
152	<i>Oxalis fontana</i> Bunge	カタバミ	エゾタチカタバミ		●		●		
153	<i>Oxalis stricta</i> L.	カタバミ	オッタチカタバミ	●	●				
154	<i>Geranium nepalense</i> Sweet subsp. <i>thunbergii</i> (Sieb. et Zucc.) Hara	フウロソウ	ゲンノショウコ		●		●		
155	<i>Acalypha australis</i> L.	トウダイグサ	エノキグサ	●	●				
156	<i>Euphorbia supina</i> Rafin.	トウダイグサ	コニシキソウ	●	●				
157	<i>Orixa japonica</i> Thunb.	ミカン	コクサギ		●		●		
158	<i>Zanthoxylum piperitum</i> (L.) DC.	ミカン	サンショウ		●		●		
159	<i>Ailanthus altissima</i> Swingle	ニガキ	ニワウルシ				●		
160	<i>Picrasma quassioides</i> (D. Don) Benn.	ニガキ	ニガキ		●		●		
161	<i>Rhus ambigua</i> Lavall. ex Dipp.	ウルシ	ツタウルシ		●		●		
162	<i>Rhus javanica</i> L. var. <i>roxburghii</i> (DC.) Rehder et Wils.	ウルシ	ヌルデ		●		●		
163	<i>Rhus trichocarpa</i> Miq.	ウルシ	ヤマウルシ				●		
164	<i>Acer amoenum</i> Carr. var. <i>amoenum</i>	カエデ	オオモミジ		●		●		
165	<i>Acer amoenum</i> Carr. var. <i>matsumurae</i> (Koidz.) Ogata	カエデ	ヤマモミジ				●		
166	<i>Acer distylum</i> Sieb. et Zucc.	カエデ	ヒトツバカエデ				●		

No.	学名	科名	和名	沖積地	棚田	ため池	森林	RDB-Iwate	RDB-Japan
167	<i>Acer mono</i> Maxim. var. <i>glabrum</i> (Lév. et Van't) Hara	カエデ	エゾイタヤ				●		
168	<i>Acer mono</i> Maxim. var. <i>marmoratum</i> (Nichols.) Hara f. <i>dissectum</i> (Wesmael) Rehder	カエデ	イタヤカエデ				●		
169	<i>Acer rufinerve</i> Sieb. et Zucc.	カエデ	ウリハダカエデ				●		
170	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	トチノキ	トチノキ				●		
171	<i>Meliosma myriantha</i> Sieb. et Zucc.	アワブキ	アワブキ				●		
172	<i>Meliosma myriantha</i> Sieb. et Zucc.	ツリフネソウ	キツリフネ				●		
173	<i>Impatiens textori</i> Miq.	ツリフネソウ	ツリフネソウ		●		●		
174	<i>Ilex crenata</i> Thunb. var. <i>paludosa</i> (Nakai) Hara	モチノキ	ハイイヌツゲ		●				
175	<i>Ilex macropoda</i> Miq.	モチノキ	アオハダ				●		
176	<i>Ilex serrata</i> Thunb.	モチノキ	ウメモドキ		●				
177	<i>Celastrus orbiculatus</i> Thunb. var. <i>orbiculatus</i>	ニシキギ	ツルウメモドキ		●				
178	<i>Euonymus alatus</i> (Thunb.) Sieb.	ニシキギ	ニシキギ				●		
179	<i>Euonymus fortunei</i> (Turcz.) Hand.-Mazz.	ニシキギ	ツルマサキ		●				
180	<i>Euonymus macropterus</i> Rupr.	ニシキギ	ヒロハツリバナ		●		●		
181	<i>Euonymus sieboldianus</i> Bl. var. <i>sieboldianus</i>	ニシキギ	マユミ		●				
182	<i>Staphylea bumalda</i> (Thunb.) DC.	ミツバウツギ	ミツバウツギ		●		●		
183	<i>Berchemia racemosa</i> Sieb. et Zucc.	クロウメモドキ	クマヤナギ		●		●		
184	<i>Hovenia dulcis</i> Thunb.	クロウメモドキ	ケンポナシ		●		●		
185	<i>Ampelopsis brevipedunculata</i> (Maxim.) Trautv. var. <i>heterophylla</i> (Thunb.) Hara	ブドウ	ノブドウ	●	●		●		
186	<i>Cayratia japonica</i> (Thunb.) Gagn.	ブドウ	ヤブガラシ	●			●		
187	<i>Parthenocissus tricuspidata</i> (Sieb. et Zucc.) Planch.	ブドウ	ツタ		●		●		
188	<i>Vitis coignetiae</i> Pulliat ex Planch.	ブドウ	ヤマブドウ		●				
189	<i>Vitis flexuosa</i> Thunb. var. <i>flexuosa</i>	ブドウ	サンカクヅル		●				
190	<i>Vitis thunbergii</i> Sieb. et Zucc.	ブドウ	エビヅル		●				
191	<i>Viola eizanensis</i> Makino	スミレ	エイザンスミレ				●		
192	<i>Viola grypoceras</i> A.Gray var. <i>grypoceras</i>	スミレ	タチツボスミレ		●		●		
193	<i>Viola mandshurica</i> W.Becker	スミレ	スミレ		●				
194	<i>Viola verecunda</i> A.Gray var. <i>verecunda</i>	スミレ	ツボスミレ	●	●				
195	<i>Gynostemma pentaphylla</i> (Thunb.) Makino	ウリ	アマチャヅル				●		
196	<i>Melothria japonica</i> (Thunb.) Maxim. ex Cogn.	ウリ	スズメウリ	●	●		●		
197	<i>Sicyos angulatus</i> L.	ウリ	アレチウリ		●				
198	<i>Trichosanthes kirilowii</i> Maxim. var. <i>japonica</i> (Miq.) Kitam.	ウリ	キカラスウリ		●				
199	<i>Lythrumanceps</i> (Koehne) Makino	ミソハギ	ミソハギ		●		●		
200	<i>Rotala indica</i> (Willd.) Koehne var. <i>uliginosa</i> (Miq.) Koehne	ミソハギ	キカシグサ		●				
201	<i>Trapa incisa</i> Sieb. et Zucc.	ヒシ	ヒメビシ			●		A	VU
202	<i>Trapa japonica</i> Flerov	ヒシ	ヒシ		●	●			
203	<i>Circaea mollis</i> Sieb. et Zucc.	アカバナ	ミズタマソウ				●		
204	<i>Epilobium pyrricholophum</i> Franch. et Savat. var. <i>pyrricholophum</i>	アカバナ	アカバナ		●				
205	<i>Ludwigia epilobioides</i> Maxim.	アカバナ	チョウジタデ	●	●				
206	<i>Oenothera biennis</i> L.	アカバナ	メマツヨイグサ	●	●				
207	<i>Haloragis micrantha</i> (Thunb.) R.Br.	アリノトウグサ	アリノトウグサ		●				
208	<i>Aucuba japonica</i> Thunb. var. <i>japonica</i>	ミズキ	アオキ				●		
209	<i>Benthamidia japonica</i> (Sieb. et Zucc.) Hara	ミズキ	ヤマボウシ				●		
210	<i>Helwingia japonica</i> (Thunb.) F.G.Dietrich	ミズキ	ハナйкаダ				●		

No.	学名	科名	和名	沖積地	棚田	ため池	森林	RDB-Iwate	RDB-Japan
211	<i>Swida controversa</i> (Hemsl.) Soják var. <i>controversa</i>	ミズキ	ミズキ		●		●		
212	<i>Swida macrophylla</i> (Wall.) Soják	ミズキ	クマノミズキ		●				
213	<i>Acanthopanax sciadophylloides</i> Franch. et Savat.	ウコギ	コシアブラ				●		
214	<i>Acanthopanax spinosus</i> (L.fil.) Miq.	ウコギ	ヤマウコギ		●		●		
215	<i>Aralia elata</i> (Miq.) Seemann	ウコギ	タラノキ		●		●		
216	<i>Hedera rhombea</i> (Miq.) Bean	ウコギ	キツタ		●		●		
217	<i>Kalopanax pictus</i> (Thunb.) Nakai	ウコギ	ハリギリ				●		
218	<i>Cryptotaenia japonica</i> Hassk.	セリ	ミツバ		●				
219	<i>Hydrocotyle ramiflora</i> Maxim.	セリ	オオチドメ	●	●		●		
220	<i>Oenanthe javanica</i> DC.	セリ	セリ	●	●				
221	<i>Osmorhiza aristata</i> (Thunb.) Rydb. var. <i>aristata</i>	セリ	ヤブニンジン				●		
222	<i>Ostericum sieboldii</i> (Miq.) Nakai	セリ	ヤマゼリ				●		
223	<i>Sanicula chinensis</i> Bunge	セリ	ウマノミツバ		●				
224	<i>Torilis scabra</i> (Thunb.) DC.	セリ	オヤブジラミ		●		●		
225	<i>Clethra barbinervis</i> Sieb. et Zucc.	リョウブ	リョウブ				●		
226	<i>Leucothoe grayana</i> Maxim. var. <i>grayana</i>	ツツジ	ハナヒリノキ				●		
227	<i>Rhododendron japonicum</i> (A.Gray) Suringar	ツツジ	レンゲツツジ		●		●		
228	<i>Rhododendron obtusum</i> (Lindl.) Planchon var. <i>kaempferi</i> (Planchon) Wilson	ツツジ	ヤマツツジ		●		●		
229	<i>Pyrola japonica</i> Klenze var. <i>japonica</i>	イチヤクソウ	イチヤクソウ				●		
230	<i>Ardisia japonica</i> (Thunb.) Blume	ヤブコウジ	ヤブコウジ				●		
231	<i>Lysimachia clethroides</i> Duby	サクラソウ	オカトラノオ		●		●		
232	<i>Lysimachia fortunei</i> Maxim.	サクラソウ	ヌマトラノオ		●				
233	<i>Lysimachia japonica</i> Thunb.	サクラソウ	コナスビ		●				
234	<i>Styrax japonica</i> Sieb. et Zucc.	エゴノキ	エゴノキ		●		●		
235	<i>Fraxinus sieboldiana</i> Blume	モクセイ	マルバアオダモ		●		●		
236	<i>Ligustrum obtusifolium</i> Sieb. et Zucc.	モクセイ	イボタノキ				●		
237	<i>Gentiana scabra</i> Bunge var. <i>buergeri</i> (Miq.) Maxim.	リンドウ	リンドウ		●				
238	<i>Swertia bimaculata</i> (Sieb. et Zucc.) Hook. et Thoms.	リンドウ	アケボノソウ		●				
239	<i>Swertia japonica</i> (Schult.) Makino	リンドウ	センブリ				●	C	
240	<i>Tripterospermum japonicum</i> (Sieb. et Zucc.) Maxim.	リンドウ	ツルリンドウ				●		
241	<i>Cynanchum caudatum</i> (Miq.) Maxim.	ガガイモ	イケマ				●		
242	<i>Cynanchum paniculatum</i> (Bunge) Kitag.	ガガイモ	スズサイコ		●			B	NT
243	<i>Cynanchum sublaeolatum</i> (Miq.) Matsum. var. <i>albiflorum</i> (Franch. et Savat.) Hara	ガガイモ	アズマカモメヅル		●				
244	<i>Metaplexis japonica</i> (Thunb.) Makino	ガガイモ	ガガイモ	●	●				
245	<i>Tylophora floribunda</i> Miq.	ガガイモ	コカモメヅル		●			B	
246	<i>Physalisstrum japonicum</i> (Franch. et Savat.) Honda	ナス	イガホオズキ		●				
247	<i>Solanum lyratum</i> Thunb.	ナス	ヒヨドリジョウゴ				●		
248	<i>Calystegia japonica</i> Choisy	ヒルガオ	ヒルガオ	●	●				
249	<i>Cuscuta pentagona</i> Engelm.	ヒルガオ	アメリカネナシカズラ		●				
250	<i>Galium spurium</i> L. var. <i>echinospermon</i> (Wallr.) Hayek	アカネ	ヤエムグラ		●		●		
251	<i>Galium trachyspermum</i> A.Gray	アカネ	ヨツバムグラ		●		●		
252	<i>Galium trifidum</i> L. var. <i>brevipedunculatum</i> Regel	アカネ	ホソバノヨツバムグラ		●		●		
253	<i>Galium trifloriforme</i> Komar. var. <i>nipponicum</i> (Makino) Nakai	アカネ	クルマムグラ		●		●		
254	<i>Hedyotis lindleyana</i> Hook. var. <i>glabra</i> (Honda) Hara	アカネ	オオハシカグサ	●	●				
255	<i>Paederia scandens</i> (Lour.) Merrill	アカネ	ヤイトバナ	●	●		●		

No.	学名	科名	和名	沖積地	棚田	ため池	森林	RDB-Iwate	RDB-Japan
256	<i>Rubia argyi</i> (Lév.) Hara	アカネ	アカネ		●		●		
257	<i>Callicarpa japonica</i> Thunb. var. <i>japonica</i>	クマツヅラ	ムラサキシキブ		●		●		
258	<i>Clerodendrum trichotomum</i> Thunb.	クマツヅラ	クサギ		●		●		
259	<i>Clinopodium chinense</i> (Benth.) O.Kuntze subsp. <i>grandiflorum</i> (Maxim.) Hara var. <i>parviflorum</i> (Kudo) Hara	シソ	クルマバナ	●	●		●		
260	<i>Clinopodium micranthum</i> (Regel) Hara	シソ	イストウバナ		●				
261	<i>Glechoma hederacea</i> L. subsp. <i>grandis</i> (A.Gray) Hara	シソ	カキドオシ		●		●		
262	<i>Mosla dianthera</i> (Hamilt.) Maxim.	シソ	ヒメジソ	●					
263	<i>Mosla punctulata</i> (J.F.Gmel.) Nakai	シソ	イヌコウジュ		●				
264	<i>Prunella vulgaris</i> L. subsp. <i>asiatica</i> (Nakai) Hara	シソ	ウツボグサ		●				
265	<i>Rabdosia inflexa</i> (Thunb.) Hara	シソ	ヤマハッカ		●		●		
266	<i>Stachys riederi</i> Chamisso var. <i>intermedia</i> (Kudo) Kitam.	シソ	イヌゴマ		●				
267	<i>Teucrium japonicum</i> Houtt.	シソ	ニガクサ		●				
268	<i>Phryma leptostachya</i> L. var. <i>asiatica</i> Hara	ハエドクソウ	ハエドクソウ				●		
269	<i>Lindernia angustifolia</i> (Benth.) Wettst.	ゴマノハグサ	アゼトウガラシ		●				
270	<i>Lindernia dubia</i> Pennell	ゴマノハグサ	アメリカアゼナ	●	●				
271	<i>Lindernia procumbens</i> (Krock.) Philcox	ゴマノハグサ	アゼナ		●				
272	<i>Mazus miquelii</i> Makino	ゴマノハグサ	サギゴケ	●	●				
273	<i>Mazus pumilus</i> (Burm.fil.) van Steenis	ゴマノハグサ	トキワハゼ	●	●				
274	<i>Scrophularia kakudensis</i> Franch.	ゴマノハグサ	オオヒナノウスツボ		●				
275	<i>Veronica persica</i> Poir.	ゴマノハグサ	オオイヌノフグリ		●				
276	<i>Plantago asiatica</i> L.	オオバコ	オオバコ	●	●		●		
277	<i>Plantago lanceolata</i> L.	オオバコ	ヘラオオバコ	●					
278	<i>Adenophora triphylla</i> (Thunb.) A.D.C. var. <i>japonica</i> (Regel) Hara	キキョウ	ツリガネニンジン		●		●		
279	<i>Lobelia chinensis</i> Lour.	キキョウ	ミゾカクシ	●	●				
280	<i>Platycodon grandiflorum</i> (Jacq.) A.D.C.	キキョウ	キキョウ		●	●		B	VU
281	<i>Lonicera gracilipes</i> Miq. var. <i>glandulosa</i> Maxim.	スイカズラ	ミヤマウグイスカグラ		●		●		
282	<i>Lonicera japonica</i> Thunb.	スイカズラ	スイカズラ		●		●		
283	<i>Sambucus racemosa</i> L. subsp. <i>sieboldiana</i> (Miq.) Hara	スイカズラ	ニワトコ	●	●		●		
284	<i>Viburnum dilatatum</i> Thunb. ex Murray	スイカズラ	ガマズミ		●		●		
285	<i>Viburnum wrightii</i> Miq. var. <i>wrightii</i>	スイカズラ	ミヤマガマズミ				●		
286	<i>Patrinia scabiosaefolia</i> Fisch.	オミナエシ	オミナエシ		●			C	
287	<i>Patrinia villosa</i> (Thunb.) Juss.	オミナエシ	オトコエシ		●		●		
288	<i>Valeriana flaccidissima</i> Maxim.	オミナエシ	ツルカノコソウ				●		
289	<i>Ainsliaea acerifolia</i> Sch.Bip. var. <i>subapoda</i> Nakai	キク	オクモミジハグマ				●		
290	<i>Ainsliaea apiculata</i> Sch.Bip.	キク	キツコウハグマ				●		
291	<i>Artemisia keiskeana</i> Miq.	キク	イヌヨモギ				●		
292	<i>Artemisia princeps</i> Pamp.	キク	ヨモギ		●		●		
293	<i>Aster ageratoides</i> Turcz. subsp. <i>ovatus</i> (Franch. et Savat.) Kitam. var. <i>ovatus</i>	キク	ノコンギク		●		●		
294	<i>Aster scaber</i> Thunb.	キク	シラヤマギク		●		●		
295	<i>Atractylodes japonica</i> Koidz. ex Kitam.	キク	オケラ				●		
296	<i>Bidens frondosa</i> L.	キク	アメリカセンダングサ	●	●		●		
297	<i>Bidens tripartita</i> L.	キク	タウコギ	●					
298	<i>Cacalia farfaraefolia</i> Sieb. et Zucc. var. <i>bulbifera</i> (Maxim.) Kitam.	キク	タマブキ				●		
299	<i>Carpesium glossophyllum</i> Maxim.	キク	サジガンクビソウ				●		

No.	学名	科名	和名	沖積地	棚田	ため池	森林	RDB-Iwate	RDB-Japan
300	<i>Centipeda minima</i> (L.) A.Br. et Ascherson	キク	トキンソウ	●	●				
301	<i>Cirsium japonicum</i> DC.	キク	ノアザミ		●		●		
302	<i>Cirsium nipponicum</i> (Maxim.) Makino var. <i>nipponicum</i>	キク	ナンブアザミ				●		
303	<i>Cirsium oligophyllum</i> (Franch. et Savat.) Matsum. var. <i>oligophyllum</i>	キク	ノハラアザミ		●		●		
304	<i>Conyza sumatrensis</i> (Retz.) Walker	キク	オオアレチノギク	●	●				
305	<i>Dendranthema boreale</i> (Makino) Kitam.	キク	キクタニギク		●		●	C	NT
306	<i>Erigeron canadensis</i> L.	キク	ヒメムカシヨモギ	●	●				
307	<i>Erigeron philadelphicus</i> L.	キク	ハルジオン	●	●		●		
308	<i>Eupatorium chinense</i> L. var. <i>chinense</i>	キク	ヒヨドリバナ		●		●		
309	<i>Eupatorium lindleyanum</i> DC.	キク	サウヒヨドリ		●				
310	<i>Galinsoga ciliata</i> (Raf.) Blake	キク	ハキダメギク		●				
311	<i>Gnaphalium affine</i> D.Don	キク	ハハコグサ	●	●				
312	<i>Gnaphalium japonicum</i> Thunb.	キク	チチコグサ		●				
313	<i>Helianthus tuberosus</i> L.	キク	キクイモ		●				
314	<i>Hypochoeris radicata</i> L.	キク	ブタナ		●				
315	<i>Ixeris debilis</i> A.Gray	キク	オオジシバリ	●	●		●		
316	<i>Ixeris dentata</i> (Thunb.) Nakai var. <i>dentata</i>	キク	ニガナ				●		
317	<i>Ixeris stolonifera</i> A.Gray	キク	イワニガナ		●				
318	<i>Kalimeris pinnatifida</i> (Maxim.) Kitam.	キク	ユウガギク	●	●		●		
319	<i>Kalimeris pseudoyomena</i> Kitam.	キク	カントウヨメナ	●	●		●		
320	<i>Lactuca indica</i> L.	キク	アキノノゲシ	●	●		●		
321	<i>Lactuca raddeana</i> Maxim. var. <i>elata</i> (Hemsl.) Kitam.	キク	ヤマニガナ				●		
322	<i>Leibnitzia anandria</i> (L.) Turcz.	キク	センボンヤリ				●		
323	<i>Ligularia dentata</i> (A.Gray) Hara	キク	マルバダケブキ				●		
324	<i>Petasites japonicus</i> (Sieb. et Zucc.) Maxim. subsp. <i>japonicus</i>	キク	フキ	●	●		●		
325	<i>Picris hieracioides</i> L. subsp. <i>japonica</i> (Thunb.) Krylov	キク	コウゾリナ	●	●				
326	<i>Rudbeckia laciniata</i> L. var. <i>laciniata</i>	キク	オオハンゴンソウ	●	●				
327	<i>Senecio cannabifolius</i> Less.	キク	ハンゴンソウ		●				
328	<i>Serratula coronata</i> subsp. <i>insularis</i> (Iljin) Kitam.	キク	タムラソウ		●				
329	<i>Siegesbeckia orientalis</i> L. subsp. <i>pubescens</i> (Makino) Kitam.	キク	メナモミ		●				
330	<i>Solidago altissima</i> L.	キク	セイタカアワダチソウ	●	●		●		
331	<i>Solidago gigantea</i> Ait. var. <i>leiophylla</i> Fernald	キク	オオアワダチソウ		●				
332	<i>Solidago virgaurea</i> L. subsp. <i>asiatica</i> Kitam.	キク	アキノキリンソウ		●		●		
333	<i>Sonchus asper</i> (L.) Hill.	キク	オニノゲシ	●	●				
334	<i>Stenactis annuus</i> (L.) Cass.	キク	ヒメジョオン	●	●		●		
335	<i>Swneio vulgaris</i> L.	キク	ノボロギク	●					
336	<i>Synurus pungens</i> (Franch. et Savat.) Kitam.	キク	オヤマボクチ				●		
337	<i>Taraxacum officinale</i> Weber	キク	セイヨウタンポポ	●	●		●		
338	<i>Youngia denticulata</i> (Houttuyn) Kitam.	キク	ヤクシソウ		●		●		
339	<i>Youngia japonica</i> (L.) DC.	キク	オニタビラコ				●		
340	<i>Alisma canaliculatum</i> A.Br. et Bouche ex Samuelsson	オモダカ	ヘラオモダカ		●				
341	<i>Alisma plantago-aquatica</i> L. var. <i>orientale</i> Samuelsson	オモダカ	サジオモダカ	●					
342	<i>Sagittaria trifolia</i> L.	オモダカ	オモダカ	●	●				
343	<i>Ottelia alismoides</i> (L.) Pers.	トチカガミ	ミズオオバコ		●	●		B	VU
344	<i>Potamogeton distinctus</i> A.Benn.	ヒルムシロ	ヒルムシロ		●				
345	<i>Potamogeton natans</i> L.	ヒルムシロ	オヒルムシロ		●	●			
346	<i>Potamogeton pusillus</i> L.	ヒルムシロ	イトモ			●		B	NT
347	<i>Najas graminea</i> Del.	イバラモ	ホッスモ		●				

No.	学名	科名	和名	沖積地	棚田	ため池	森林	RDB-Iwate	RDB-Japan
348	<i>Cardiocrinum cordatum</i> (Thunb.) Makino var. <i>cordatum</i>	ユリ	ウバユリ		●		●		
349	<i>Disporum smilacinum</i> A.Gra	ユリ	チゴユリ				●		
350	<i>Hemerocallis fulva</i> L. var. <i>kwanso</i> Regel	ユリ	ヤブカンゾウ	●	●				
351	<i>Hemerocallis fulva</i> L. var. <i>longituba</i> (Miq.) Maxim.	ユリ	ノカンゾウ		●				
352	<i>Hosta albo-marginata</i> (Hook.) Ohwi	ユリ	コバギボウシ		●		●		
353	<i>Lilium auratum</i> Lindley	ユリ	ヤマユリ		●		●		
354	<i>Liriope minor</i> (Maxim.) Makino	ユリ	ヒメヤブラン		●		●		
355	<i>Ophiopogon japonicus</i> (L.fil.) Ker-Gawl.	ユリ	ジャノヒゲ		●		●		
356	<i>Ophiopogon planiscapus</i> Nakai	ユリ	オオバジャノヒゲ		●		●		
357	<i>Polygonatum macranthum</i> (Maxim.) Koidz.	ユリ	オオナルコユリ		●				
358	<i>Polygonatum odoratum</i> (Mill.) Druce var. <i>pluriflorum</i> (Miq.) Ohwi	ユリ	アマドコロ		●				
359	<i>Smilacina japonica</i> A.Gray	ユリ	ユキザサ				●		
360	<i>Smilax china</i> L.	ユリ	サルトリイバラ		●		●		
361	<i>Smilax riparia</i> A.DC. var. <i>ussuriensis</i> (Regel) Hara et T.Koyama	ユリ	シオデ		●		●		
362	<i>Smilax sieboldii</i> Miq.	ユリ	ヤマカシウ				●		
363	<i>Tricyrtis affinis</i> Makino	ユリ	ヤマジノホトギス		●				
364	<i>Tricyrtis latifolia</i> Maxim.	ユリ	タマガワホトギス				●		
365	<i>Trillium tschonoskii</i> Maxim.	ユリ	シロバナエンレイソウ				●		
366	<i>Lycoris sanguinea</i> Maxim.	ヒガンバナ	キツネノカミソリ		●		●		
367	<i>Dioscorea japonica</i> Thunb.	ヤマノイモ	ヤマノイモ		●		●		
368	<i>Dioscorea tokoro</i> Makino	ヤマノイモ	オニドコロ	●	●		●		
369	<i>Monochoria vaginalis</i> (Burm.fil.) Kunth	ミズアオイ	コナギ	●	●				
370	<i>Iris ensata</i> Thunb. var. <i>spontanea</i> (Makino) Nakai	アヤメ	ノハナジョウブ		●				
371	<i>Iris pseudacorus</i> L.	アヤメ	キショウブ	●	●				
372	<i>Juncus diastrophanthus</i> Buchen.	イグサ	ヒロハノコウガイゼキショウ		●				
373	<i>Juncus effusus</i> L. var. <i>decipiens</i> Buchen.	イグサ	イグサ	●	●				
374	<i>Juncus krameri</i> Franch. et Savat.	イグサ	タチコウガイゼキショウ		●				
375	<i>Juncus leschenaultii</i> Gay	イグサ	コウガイゼキショウ		●				
376	<i>Juncus tenuis</i> Willden.	イグサ	クサイ		●				
377	<i>Luzula plumosa</i> E.Meyer var. <i>macrocarpa</i> (Buchen.) Ohwi	イグサ	ヌカボシソウ		●				
378	<i>Commelina communis</i> L.	ツユクサ	ツユクサ	●	●		●		
379	<i>Murdannia keisak</i> (Hassk.) Hand.-Mzt.	ツユクサ	イボクサ	●	●				
380	<i>Agropyron ciliare</i> (Trin.) Franch. var. <i>minus</i> (Miq.) Ohwi	イネ	アオカモジグサ		●				
381	<i>Agropyron tsukushiense</i> (Honda) Ohwi var. <i>transiens</i> (Hack.) Ohwi	イネ	カモジグサ	●	●				
382	<i>Agrostis alba</i> L.	イネ	コヌカグサ	●					
383	<i>Alopecurus aequalis</i> Sobol. var. <i>amurensis</i> (Komar.) Ohwi	イネ	スズメノテッポウ	●					
384	<i>Anthoxanthum odoratum</i> L.	イネ	ハルガヤ	●	●		●		
385	<i>Arthraxon hispidus</i> (Thunb.) Makino	イネ	コブナグサ	●	●				
386	<i>Arundinella hirta</i> (Thunb.) C.Tanaka	イネ	トダシバ		●		●		
387	<i>Calamagrostis arundinacea</i> (L.) Roth var. <i>brachytricha</i> (Steud.) Hack.	イネ	ノガリヤス				●		
388	<i>Dactylis glomerata</i> L.	イネ	カモガヤ		●		●		
389	<i>Digitaria ciliaris</i> (Retz.) Koel.	イネ	メヒシバ	●	●				
390	<i>Digitaria violascens</i> Link	イネ	アキメヒシバ	●					
391	<i>Echinochloa crus-galli</i> (L.) Beauv. var. <i>caudata</i> (Roshev.) Kitag.	イネ	イヌビエ	●	●				
392	<i>Echinochloa phyllopogon</i> Stapf	イネ	タイヌビエ	●	●				

No.	学名	科名	和名	沖積地	棚田	ため池	森林	RDB-Iwate	RDB-Japan
393	<i>Eleusine indica</i> (L.) Gaertn.	イネ	オヒシバ		●				
394	<i>Eragrostis ferruginea</i> (Thunb.) Beauv.	イネ	カゼクサ	●	●				
395	<i>Eriochloa villosa</i> (Thunb.) Kunth	イネ	ナルコビエ	●	●				
396	<i>Festuca arundinacea</i> Schreb.	イネ	オニウシノケグサ	●	●		●		
397	<i>Festuca japonica</i> Makino	イネ	ヤマトボシガラ		●				
398	<i>Imperata cylindrica</i> (L.) Beauv.	イネ	チガヤ	●	●				
399	<i>Isachne globosa</i> (Thunb.) O.Kuntze	イネ	チゴザサ		●				
400	<i>Leersia sayanauka</i> Ohwi	イネ	サヤヌカグサ	●	●				
401	<i>Microstegium japonicum</i> (Miq.) Koidz. var. <i>japonicum</i>	イネ	ササガヤ		●		●		
402	<i>Miscanthus sacchariflorus</i> (Maxim.) Benth.	イネ	オギ	●	●	●			
403	<i>Miscanthus sinensis</i> Anderss.	イネ	ススキ		●		●		
404	<i>Oplismenus undulatifolius</i> (Arduino) Roemer et Schultes var. <i>undulatifolius</i>	イネ	チヂミザサ		●		●		
405	<i>Panicum bisulcatum</i> Thunb.	イネ	ヌカキビ		●				
406	<i>Paspalum thunbergii</i> Kunth	イネ	スズメノヒエ	●	●				
407	<i>Pennisetum alopecuroides</i> (L.) Spreng.	イネ	チカラシバ	●					
408	<i>Phalaris arundinacea</i> L.	イネ	クサヨシ	●	●				
409	<i>Phragmites communis</i> Trin.	イネ	ヨシ	●	●				
410	<i>Poa annua</i> L.	イネ	スズメノカタビラ	●	●				
411	<i>Poa pratensis</i> L.	イネ	ナガハグサ	●	●				
412	<i>Setaria faberi</i> Herm.	イネ	アキノエノコログサ	●	●				
413	<i>Setaria glauca</i> (L.) Beauv.	イネ	キンエノコロ		●				
414	<i>Spodiopogon sibiricus</i> Trin.	イネ	オオアブラススキ		●				
415	<i>Zoysia japonica</i> Steud.	イネ	シバ		●		●		
416	<i>Pleioblastus chino</i> (Franch. et Savat.) Makino	タケ	アズマネザサ		●		●		
417	<i>Sasa nipponica</i> Makino et Shibata	タケ	ミヤコザサ				●		
418	<i>Sasa senanensis</i> (Franch. et Savat.) Rehder	タケ	クマイザサ		●				
419	<i>Sasaella ramosa</i> Makino	タケ	アズマザサ		●		●		
420	<i>Acorus calamus</i> L.	サトイモ	ショウブ	●	●				
421	<i>Acorus gramineus</i> Soland	サトイモ	セキショウ		●				
422	<i>Arisaema serratum</i> (Thunb.) Schott	サトイモ	マムシグサ		●		●		
423	<i>Arisaema undulatifolium</i> Nakai var. <i>ionostemma</i> (Nakai et F.Maek.) Ohashi et J.Murata	サトイモ	ミミガタテンナンショウ				●	C	
424	<i>Pinellia ternata</i> (Thunb.) Breit.	サトイモ	カラスビシャク		●		●		
425	<i>Lemna aoukikusa</i> Beppu et Murata	ウキクサ	アオウキクサ	●	●				
426	<i>Spirodela polyrrhiza</i> (L.) Schleid.	ウキクサ	ウキクサ		●				
427	<i>Typha latifolia</i> L.	ガマ	ガマ	●	●	●			
428	<i>Carex alba</i> Boott	カヤツリグサ	ミノボロスゲ		●				
429	<i>Carex dispalata</i> Boott	カヤツリグサ	カサスゲ	●	●				
430	<i>Carex dolichostachya</i> Hayata var. <i>glaberrima</i> (Ohwi) T.Koyama	カヤツリグサ	ミヤマカンスゲ				●		
431	<i>Carex lanceolata</i> Boott	カヤツリグサ	ヒカゲスゲ		●		●		
432	<i>Carex siderosticta</i> Hance	カヤツリグサ	タガネソウ				●		
433	<i>Carex thunbergii</i> Steud. var. <i>thunbergii</i>	カヤツリグサ	アゼスゲ	●	●				
434	<i>Cyperus brevifolius</i> (Rottb.) Hassk. var. <i>leirolepis</i> (Franch. et Savat.) T.Koyama	カヤツリグサ	ヒメクグ	●	●				
435	<i>Cyperus difformis</i> L.	カヤツリグサ	タマガヤツリ		●				
436	<i>Cyperus flavidus</i> Retz.	カヤツリグサ	アゼガヤツリ		●				
437	<i>Cyperus microiria</i> Steud.	カヤツリグサ	カヤツリグサ		●				
438	<i>Cyperus sanguinolentus</i> Vahl	カヤツリグサ	カワラスガナ		●				
439	<i>Cyperus serotinus</i> Rottb.	カヤツリグサ	ミズガヤツリ		●				
440	<i>Eleocharis acicularis</i> (L.) Roem. et Schult. var. <i>longisetata</i> Svenson	カヤツリグサ	マツパイ		●				

No.	学名	科名	和名	沖積地	棚田	ため池	森林	RDB-Iwate	RDB-Japan
441	<i>Eleocharis congesta</i> D.Don var. <i>congesta</i>	カヤツリグサ	ハリイ		●				
442	<i>Eleocharis kuroguwai</i> Ohwi	カヤツリグサ	クログワイ		●				
443	<i>Eleocharis wichurae</i> Böckl.	カヤツリグサ	シカクイ		●				
444	<i>Fimbristylis squarrosa</i> Vahl var. <i>eaquarrosa</i> Makino	カヤツリグサ	メアゼテンツキ		●				
445	<i>Fimbristylis subbispicata</i> Nees et Mey.	カヤツリグサ	ヤマイ		●				
446	<i>Lipocarpa microcephala</i> (R.Br.) Kunth	カヤツリグサ	ヒンジガヤツリ		●				
447	<i>Scirpus fuirenooides</i> Maxim.	カヤツリグサ	コマツカサススキ		●				
448	<i>Scirpus juncooides</i> Roxb. var. <i>ohwianus</i> T.Koyama	カヤツリグサ	イヌホタルイ		●				
449	<i>Scirpus nipponicus</i> Makino	カヤツリグサ	シズイ		●				
450	<i>Scirpus tuiqueter</i> L.	カヤツリグサ	サンカクイ		●				
451	<i>Scirpus wichurae</i> Böckl.	カヤツリグサ	アブラガヤ		●				
452	<i>Cremastra appendiculata</i> (D.Don) Makino	ラン	サイハイラン				●		
453	<i>Cymbidium goeringii</i> (Reichb.fil.) Reichb.fil.	ラン	シュンラン				●		
454	<i>Liparis kumokiri</i> F.Maek.	ラン	クモキリソウ		●		●		
種数計				108	350	9	251		

(2) 鳥類

No.	学名	科名	和名	沖積地	棚田	林縁	RDB-Iwate	RDB-Japan
1	<i>Egretta alba</i>	サギ	ダイサギ	●				
2	<i>Egretta intermedia</i>	サギ	チュウサギ	●			C	NT
3	<i>Ardea cinerea</i>	サギ	アオサギ	●				
4	<i>Anas poecilorhyncha</i>	カモ	カルガモ	●				
5	<i>Milvus migrans</i>	タカ	トビ	●	●			
6	<i>Buteo buteo</i>	タカ	ノスリ	●	●		D	
7	<i>Falco peregrinus</i>	ハヤブサ	ハヤブサ		●		A	VU
8	<i>Phasianus colchicus</i>	キジ	キジ		●			
9	<i>Streptopelia orientalis</i>	ハト	キジバト		●			
10	<i>Dendrocopos major</i>	キツツキ	アカゲラ		●			
11	<i>Hirundo rustica</i>	ツバメ	ツバメ		●			
12	<i>Motacilla cinerea</i>	セキレイ	キセキレイ		●			
13	<i>Motacilla alba</i>	セキレイ	ハクセキレイ	●				
14	<i>Hypsipetes amaurotis</i>	ヒヨドリ	ヒヨドリ	●	●	●		
15	<i>Lanius bucephalus</i>	モズ	モズ			●		
16	<i>Cettia diphone</i>	ウグイス	ウグイス		●			
17	<i>Emberiza cioides</i>	ホオジロ	ホオジロ		●			
18	<i>Carduelis sinica</i>	アトリ	カワラヒワ		●	●		
19	<i>Passer montanus</i>	ハタオリドリ	スズメ	●	●	●		
20	<i>Corvus corone</i>	カラス	ハシボソガラス	●	●	●		
21	<i>Corvus macrorhynchos</i>	カラス	ハシブトガラス		●	●		
種数計				10	15	6		

(3) 昆虫

No.	学名	科名	和名	沖積地	棚田	ため池 他	森林	RDB-Iwate	RDB-Japan
1	<i>Calopteryx atrata</i> Selys, 1853	カワトンボ	ハグロトンボ	●	●				
2	<i>Lestes temporalis</i> Selys, 1883	アオイトトンボ	オオアオイトトンボ		●		●		
3	<i>Sympetma paedisca</i> (Eversmann, 1836)	アオイトトンボ	オツネイトトンボ		●				
4	<i>Idolestes peregrinus</i> (Ris, 1916)	アオイトトンボ	ホソミオツネイトトンボ		●				
5	<i>Copera annulata</i> (Selys, 1863)	モノサシトンボ	モノサシトンボ		●		●		
6	<i>Mortonagrion selenion</i> (Ris, 1916)	イトトンボ	モートンイトトンボ		●			D	NT

No.	学名	科名	和名	沖積地	棚田	ため池 他	森林	RDB- Iwate	RDB- Japan
7	<i>Ischnura asiatica</i> Brauer, 1865	イトトンボ	アジアイトンボ			●			
8	<i>Cercion sieboldii</i> (Selys, 1876)	イトトンボ	オオイトトンボ		●				
9	<i>Sieboldius albardae</i> Selys, 1886	サナエトンボ	コオニヤンマ		●				
10	<i>Aeshna nigroflava</i> Martin, 1908	ヤンマ	オオルリボシヤンマ			●			
11	<i>Anax nigrofasciatus nigrofasciatus</i> Oguma, 1915	ヤンマ	クロスジギンヤンマ			●			
12	<i>Anotogaster sieboldii</i> (Selys)	オニヤンマ	オニヤンマ	●	●		●		
13	<i>Lyriothemis pachygastra</i> (Selys)	トンボ	ハラビロトンボ	●	●				
14	<i>Orthetrum japonicum japonicum</i> (Uhler, 1858)	トンボ	シオヤトンボ	●					
15	<i>Orthetrum albistylum speciosum</i> (Uhler, 1858)	トンボ	シオカラトンボ	●	●		●		
16	<i>Orthetrum triangulare melania</i> (Selys, 1883)	トンボ	オオシオカラトンボ	●	●				
17	<i>Crocothemis servilia mariannae</i> Kiauta, 1983	トンボ	ショウジョウトンボ	●	●				
18	<i>Sympetrum pedemontanum elatum</i> (Selys, 1872)	トンボ	ミヤマアカネ	●					
19	<i>Sympetrum frequens</i> (Selys, 1883)	トンボ	アキアカネ		●				
20	<i>Sympetrum eroticum</i> (Selys, 1883)	トンボ	マユタテアカネ		●				
21	<i>Sympetrum kunkeli</i> (Selys, 1884)	トンボ	マイコアカネ	●					
22	<i>Sympetrum infuscatum</i> (Selys, 1883)	トンボ	ノシメトンボ		●		●		
23	<i>Pantala flavescens</i> (Fabricius, 1798)	トンボ	ウスバキトンボ	●	●				
24	<i>Phaneroptera nigroantennata</i> Brunner, 1878	キリギリス	アシグロツユムシ		●				
25	<i>Hexacentrus japonicus</i> Karny, 1907	キリギリス	ハヤシノウマオイ				●		
26	<i>Ruspolia jezoensis</i> (Mastumura et Shiraki, 1908)	キリギリス	ヒメクサキリ	●	●				
27	<i>Eobiana engelhardti subtropica</i> Bey-Bienko	キリギリス	ヒメギス		●				
28	<i>Teleogryllus emma</i> (Ohmachi et Matsuura, 1951)	コオロギ	エンマコオロギ		●		●		
29	<i>Oecanthus longicaudus</i> Matsumura	コオロギ	カンタン		●				
30	<i>Polionemobius mikado</i> (Shiraki, 1911)	コオロギ	シバズ		●				
31	<i>Atractomorpha lata</i> (Motschulsky, 1866)	オンブバッタ	オンブバッタ	●	●				
32	<i>Oxya yezoensis</i> Shiraki	バッタ	コバネイナゴ	●	●				
33	<i>Parapodisma yamato</i> Tominaga et Storozhenko, 1996	バッタ	ヤマトフキバッタ		●				
34	<i>Stethophyma magister</i> (Rehn, 1902)	バッタ	ツマグロイナゴ	●	●				
35	<i>Chorthippus brunneus</i> (Thunberg, 1815)	バッタ	ヒナバッタ		●				
36	<i>Euparatettix insularis</i> Bei-Bienko	ヒシバッタ	ハネナガヒシバッタ		●				
37	<i>Formosatettix larvatus</i> Bei-Bienko, 1951	ヒシバッタ	コバネヒシバッタ				●		
38	<i>Tettix japonica</i> (Bolivar, 1887)	ヒシバッタ	ハラヒシバッタ		●				
39	<i>Tenodera aridifolia</i> (Stoll, 1813)	カマキリ	オオカマキリ		●				
40	<i>Platypleura kaempferi</i> (Fabricius, 1794)	セミ	ニイニイゼミ		●		●		
41	<i>Graptopsaltria nigrofuscata</i> (Motschulsky, 1866)	セミ	アブラゼミ		●		●		
42	<i>Tibicen japonicus</i> (Kato, 1958)	セミ	エゾゼミ		●		●		
43	<i>Tanna japonensis japonensis</i> (Distant, 1892)	セミ	ヒグラシ		●		●		
44	<i>Meimuna opalifera</i> (Walker, 1850)	セミ	ツクツクボウシ		●		●		
45	<i>Oncotympana maculaticollis</i>	セミ	ミンミンゼミ		●		●		
46	<i>Bothrogonia ferruginea</i> (Fabricius, 1787)	ヨコバイ	ツマグロオオヨコバイ		●		●		
47	<i>Orosanga japonicus</i> (Melichar, 1898)	ハゴロモ	ベッコウハゴロモ		●				
48	<i>Gerris (Gerris) latidominis</i> Miyamoto, 1958	アメンボ	ヒメアメンボ	●	●				
49	<i>Aquarius paludum paludum</i> (Fabricius, 1794)	アメンボ	アメンボ	●	●	●			
50	<i>Diplonychus japonicus</i> Vuillefroy, 1864	コオイムシ	コオイムシ		●		●		NT

No.	学名	科名	和名	沖積地	棚田	ため池 他	森林	RDB- Iwate	RDB- Japan
51	<i>Ranatra chinensis</i> Mayer, 1865	タイコウチ	ミズカマキリ			●			
52	<i>Sigara nigroventralis</i> (Matsumura, 1905)	ミズムシ	ハラグロコミズムシ			●			
53	<i>Notonecta triguttata</i> Motschulsky, 1861	マツモムシ	マツモムシ		●		●		
54	<i>Cydnocorus dilatatus</i> (Matsumura, 1913)	サシガメ	ハネナシサシガメ		●				
55	<i>Adelphocoris triannulatus</i> (Stal, 1858)	メクラカメムシ	ブチヒゲクロメクラガメ				●		
56	<i>Palomena angulosa</i> (Motschulsky, 1861)	カメムシ	エゾアオカメムシ				●		
57	<i>Homoeocerus dilatatus</i> Horvath	ヘリカメムシ	ハラビロヘリカメムシ		●		●		
58	<i>Cicindela japana</i> Motschulsky, 1860	ハンミョウ	ニワハンミョウ	●					
59	<i>Chlaenius variicornis</i> Morawitz, 1863	オサムシ	コガシラアオゴミムシ		●				
60	<i>Chlaenius naeviger</i> Morawitz, 1862	オサムシ	アトボシアオゴミムシ				●		
61	<i>Rhantus suturalis</i> (MacLeay, 1825)	ゲンゴロウ	ヒメゲンゴロウ		●				
62	<i>Hydaticus grammicus</i> (Germar, 1830)	ゲンゴロウ	コシマゲンゴロウ		●				
63	<i>Eusilpha japonica</i> (Motschulsky, 1860)	シデムシ	オオヒラタシデムシ				●		
64	<i>Macroderas rectus rectus</i> (Motschulsky, 1857)	クワガタムシ	コクワガタ		●				
65	<i>Lucanus maculifemoratus</i> Motschulsky, 1861	クワガタムシ	ミヤマクワガタ				●		
66	<i>Prosopocoilus inclinator</i> (Motschulsky, 1857)	クワガタムシ	ノコギリクワガタ				●		
67	<i>Popillia japonica</i> Newmann, 1844	コガネムシ	マメコガネ		●				
68	<i>Anomala cuprea</i> (Hope, 1839)	コガネムシ	ドウガネブイブイ		●				
69	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky, 1860	コガネムシ	ヒメコガネ		●				
70	<i>Allomyrina dichotoma dichotoma</i> Linnaeus, 1771	コガネムシ	カブトムシ		●				
71	<i>Rhomborrhina unicolor</i> Motschulsky, 1861	コガネムシ	アオカナブン		●				
72	<i>Eucetonia roelofsi</i> (Harold, 1880)	コガネムシ	アオハナムグリ				●		
73	<i>Protaetia orientalis submarmorea</i> (Brumeister, 1842)	コガネムシ	シロテンハナムグリ	●					
74	<i>Luciola cruciata</i> Motschulsky, 1854	ホタル	ゲンジボタル	●					
75	<i>Aporotritoma consobrina</i> (Lewis, 1874)	オオキノコムシ	アカモンチビオオキノコムシ				●		
76	<i>Coccinella septempunctata</i> Linnaeus, 1758	テントウムシ	ナナホシテントウ		●				
77	<i>Propylea japonica</i> (Thunberg, 1781)	テントウムシ	ヒメカメノコテントウ		●				
78	<i>Plesiophthalmus nigrocyaneus nigrocyaneus</i> Motschulsky, 1857	ゴミムシダマシ	キマワリ		●				
79	<i>Epicauta gorhami</i> Marseul, 1873	ツチハンミョウ	マメハンミョウ		●				
80	<i>Corymbia succedanea</i> (Lewis, 1879)	カミキリムシ	アカハナカミキリ		●		●		
81	<i>Massicus raddei</i> (Blessig, 1872)	カミキリムシ	ミヤマカミキリ				●		
82	<i>Anoplophora malasiaca</i> (Thomson, 1865)	カミキリムシ	ゴマダラカミキリ		●				
83	<i>Liriocoris (Liriocoris) subpolita</i> (Motschulsky, 1860)	ハムシ	アカクビナガハムシ				●		
84	<i>Galeruca vicina</i> Solsky, 1872	ハムシ	アザミオオハムシ				●		
85	<i>Aulacophora indica</i> (Gmelin, 1790)	ハムシ	ウリハムシ		●		●		
86	<i>Plethosmylus hyalinatus</i> (MacLachlan, 1875)	ヒロバカゲロウ	スカシヒロバカゲロウ				●		
87	<i>Panorpa japonica</i> Thunberg, 1784	シリアゲムシ	ヤマトシリアゲ		●				
88	<i>Tipula (Yamatotipula) aino</i> Alexander, 1914	ガガンボ	キリウジガガンボ		●		●		
89	<i>Stratiomys japonica</i> (van der Wulp, 1977)	ミズアブ	ミズアブ	●					
90	<i>Hirosia sapporoensis</i> (Shiraki, 1918)	アブ	キンイロアブ		●				
91	<i>Tabanus chrysurus</i> Loew, 1858	アブ	アカウシアブ		●				
92	<i>Promachus yesonicus</i> Bigot, 1887	ムシヒキアブ	シオヤアブ		●				

No.	学名	科名	和名	沖積地	棚田	ため池 他	森林	RDB- Iwate	RDB- Japan
93	<i>Eristalis (Eristalis) tenax</i> (Linnaeus, 1758)	ハナアブ	ハナアブ		●				
94	<i>Phytomia zonata</i> (Fabricius, 1787)	ハナアブ	オオハナアブ	●					
95	<i>Minettia longipennis</i> (Fabricius, 1794)	シマバエ	ヤブクロシマバエ		●				
96	<i>Lucilia illustris</i> (Meigen, 1826)	クロバエ	ミドリキンバエ		●				
97	<i>Tachina (Eudromyia) nupta</i> (Rondani, 1895)	ヤドリバエ	セスジハリバエ		●				
98	<i>Olethreutes orthocosmus</i> (Meyrick, 1931)	ハマキガ	コクリオビクロヒメハマキ		●				
99	<i>Oncocera semirubella</i> (Scopoli, 1763)	メイガ	アカマダラメイガ		●				
100	<i>Emmelina argoteles</i> (Meyrick, 1920)	トリバガ	ヒルガオトリバ				●		
101	<i>Daimio tethys</i> (Ménétrières, 1857)	セセリチョウ	ダイミョウセセリ		●				
102	<i>Isoteinon lamprospilus ramprospilus</i> C. Felder et R. Felder, 1862	セセリチョウ	ホソバセセリ				●		
103	<i>Thoressa varia</i> (Murray, 1875)	セセリチョウ	コチャバネセセリ		●				
104	<i>Zinaida pellucida</i>	セセリチョウ	オオチャバネセセリ		●		●		
105	<i>Parnara guttata guttata</i> (Bremer et Gray, 1852)	セセリチョウ	イチモンジセセリ		●		●		
106	<i>Papilio machaon hippocrates</i> C. Felder et R. Felder, 1864	アゲハチョウ	キアゲハ	●	●				
107	<i>Papilio protenor demetrius</i> Stoll, 1782	アゲハチョウ	クロアゲハ		●		●		
108	<i>Papilio macilentus</i> Janson, 1877	アゲハチョウ	オナガアゲハ		●				
109	<i>Eurema hecabe hecabe</i> (Linnaeus, 1758)	シロチョウ	キチョウ	●	●		●		
110	<i>Pieris melete melete</i> Ménétrières, 1857	シロチョウ	スジグロシロチョウ		●		●		
111	<i>Pieris rapae crucivora</i> Boisduval, 1836	シロチョウ	モンシロチョウ	●	●		●		
112	<i>Colias erate polygraphus</i> Motschulsky, 1860	シロチョウ	モンキチョウ		●				
113	<i>Lycaena phlaeas daimio</i> (Matsumura, 1910)	シジミチョウ	ベニシジミ	●	●				
114	<i>Taraka hamada hamada</i> (H. Druce, 1875)	シジミチョウ	ゴイシシジミ				●		
115	<i>Zizeria maha argia</i> (Ménétrières, 1875)	シジミチョウ	ヤマトシジミ		●				
116	<i>Celastrina argiolus ladonides</i> (de l'Oriza, 1869)	シジミチョウ	ルリシジミ	●	●		●		
117	<i>Everes argiades hellotia</i> (Ménétrières, 1857)	シジミチョウ	ツバメシジミ	●	●				
118	<i>Argyrogonome laodice japonica</i> (Ménétrières, 1857)	タテハチョウ	ウラギンスジヒョウモン		●				VU
119	<i>Neptis sappho intermedia</i> W. B. Pryer, 1877	タテハチョウ	コミスジ		●				
120	<i>Polygonia caureum caureum</i> (Linnaeus, 1758)	タテハチョウ	キタテハ		●				
121	<i>Kaniska canace no-japonicum</i> (Siebold, 1824)	タテハチョウ	ルリタテハ		●		●		
122	<i>Vanessa indica</i> (Herbst, 1794)	タテハチョウ	アカタテハ		●				
123	<i>Apatura metis substituta</i> Butler, 1873	タテハチョウ	コムラサキ		●				
124	<i>Hestian japonica</i> (C. Felder et R. Felder, 1862)	タテハチョウ	ゴマダラチョウ		●			D	
125	<i>Ypthima argus</i> Butler, 1866	ジャノメチョウ	ヒメウラナミジャノメ		●		●		
126	<i>Minois dryas</i> (Motschulsky, 1860)	ジャノメチョウ	ジャノメチョウ		●				
127	<i>Lethe diana diana</i> (Butler, 1866)	ジャノメチョウ	クロヒカゲ		●		●		
128	<i>Neope nipponica nipponica</i> Butler, 1881	ジャノメチョウ	ヤマキマダラヒカゲ		●				
129	<i>Neope goschkevitchii</i> (Ménétrières, 1857)	ジャノメチョウ	サトキマダラヒカゲ		●				
130	<i>Mycalasis gotama fuliginia</i> Fruhstorfer, 1911	ジャノメチョウ	ヒメジャノメ		●		●		
131	<i>Thyatira batis japonica</i> Werny, 1966	トガリバガ	モントガリバ				●		
132	<i>Scopula superior</i> (Butler, 1878)	シャクガ	キナシロヒメシャク				●		
133	<i>Gandaritis fixseni</i> (Bremer, 1864)	シャクガ	キマダラオオナミシャク				●		
134	<i>Eustroma japonicum</i> Inoue, 1986	シャクガ	キアミナミシャク				●		

No.	学名	科名	和名	沖積地	棚田	ため池 他	森林	RDB- Iwate	RDB- Japan
135	<i>Amblychia insueta</i> (Butler, 1878)	シャクガ	チャマダラエダシャク				●		
136	<i>Epholca arenosa</i> (Butler, 1878)	シャクガ	サラサエダシャク				●		
137	<i>Pterodecta felderi</i> (Bremer, 1864)	イカリモンガ	イカリモンガ		●				
138	<i>Antheraea yamamai yamamai</i> (Guérin-Méneville, 1861)	ヤママユガ	ヤママユ				●		
139	<i>Saturnia japonica japonica</i> (Moore, 1862)	ヤママユガ	クスサン				●		
140	<i>Orgyia recens approximans</i> Butler, 1881	ドクガ	アカモンドクガ		●				
141	<i>Eilema aegrota</i> (Butler, 1877)	ヒトリガ	キシタホソバ		●				
142	<i>Lemyra inaequalis inaequalis</i> (Butler, 1879)	ヒトリガ	カクモンヒトリ				●		
143	<i>Amata fortunei</i> (Orza)	カノコガ	カノコガ		●				
144	<i>Emmelia trabealis</i> (Scopoli, 1763)	ヤガ	キマダラコヤガ		●				
145	<i>Allantus luctifer</i> (Smith, 1874)	ハバチ	ハグロハバチ	●					
146	<i>Anoplius (Lophopompilus) samariensis</i> (Pallas, 1771)	ベツコウバチ	オオモンクロベツコウ		●				
147	<i>Oreumenes decoratus</i> (Smith, 1852)	スズメバチ	スズバチ		●				
148	<i>Polistes mandarinus</i> Saussure, 1853	スズメバチ	キボシアシナガバチ		●				
149	<i>Vespa ducalis pulchra</i> Buysson, 1903	スズメバチ	ヒメスズメバチ		●				
150	<i>Pristomyrmex pungens</i> Mayr, 1866	アリ	アミメアリ				●		
151	<i>Formica (Serviformica) japonica</i> Motschulsky, 1866	アリ	クロヤマアリ				●		
152	<i>Camponotus (Camponotus) japonicus</i> Mayr, 1866	アリ	クロオオアリ		●				
153	<i>Camponotus (Camponotus) obscuripes</i> Mayr, 1878	アリ	ムネアカオオアリ				●		
154	<i>Chalicodoma sculpturalis</i> (Smith, 1853)	ハキリバチ	オオハキリバチ		●				
155	<i>Xylocopa appendiculata circumvolans</i> Smith, 1873	コシブトハナバチ	クマバチ		●				
156	<i>Bombus (Diversobombus) diversus diversus</i> Smith, 1869	ミツバチ	トラマルハナバチ		●				
種数計				28	113	6	59		

(4) 淡水魚類

No.	学名	科名	和名	沖積地	棚田	ため池	林縁	RDB- Iwate	RDB- Japan
1	<i>Carassius</i> sp.	コイ	ギンブナ			●			
2	<i>Carassius auratus</i> subsp.1	コイ	キンブナ			●		C	
3	<i>Phoxinus lagowskii steindachneri</i>	コイ	アブラハヤ	●					
4	<i>Tribolodon hakonensis</i>	コイ	ウグイ	●					
5	<i>Pseudorasbora parva</i>	コイ	モツゴ			●			
6	<i>Gnathopogon elongatus elongatus</i>	コイ	タモロコ	●					
7	<i>Misgurnus anguillicaudatus</i>	ドジョウ	ドジョウ	●	●		●		
8	<i>Pseudobagrus tokiensis Doderlein</i>	ギギ	ギバチ	●					VU
9	<i>Silurus asotus</i> Linnaeus	ナマズ	ナマズ	●					
10	<i>Rhinogobius</i> sp. OR	ハゼ	トウヨシノボリ			●			
種数計				6	1	4	1		

(5) 淡水貝類

No.	学名	科名	和名	沖積地	棚田	林縁	RDB-Iwate	RDB-Japan
1	<i>Cipangopaludina chinensis laeta</i> (Martens)	タニシ	マルタニシ	●	●			VU
2	<i>Semisulcospira libertina libertina</i> (Gould)	カワニナ	カワニナ		●			
3	<i>Limnaea auricularia</i>	モノアラガイ	モノアラガイ		●			NT
種数計				1	3	0		

(6) 爬虫類

No	学名	科名	和名	沖積地	棚田	林縁	RDB-Iwate	RDB-Japan
1	<i>Takydromus tachydromoides</i>	カナヘビ	カナヘビ	●	●	●		
2	<i>Elaphe quadrivirgata</i>	ヘビ	シマヘビ	●	●			
3	<i>Elaphe climacophora</i>	ヘビ	アオダイショウ	●				
4	<i>Rhabdophis tigrinus</i>	ヘビ	ヤマカガシ		●			
種数計				3	3	1		

(7) 両生類

No	学名	科名	種名	沖積地	棚田	林縁	RDB-Iwate	RDB-Japan
1	<i>Hynobius lichenatus</i> Boulenger	サンショウウオ	トウホクサンショウウオ		●		C	NT
2	<i>Cynops pyrrhogaster</i>	イモリ	アカハライモリ		●	●		
3	<i>Hyla japonica</i> Günther	アマガエル	アマガエル		●	●		
4	<i>Rana japonica japonica</i> Gunther	アカガエル	ニホンアカガエル		●	●	C	
5	<i>Rana porosa porosa</i> Cope	アカガエル	トウキョウダルマガエル	●	●	●	D	NT
6	<i>Rana catesbeiana</i> Shaw	アカガエル	ウシガエル	●				
7	<i>Rhacophorus schlegelii</i>	アオガエル	シュレーゲルアオガエル		●			
種数計				2	6	4		

(8) 甲殻類その他

No	学名	科名	種名	沖積地	棚田	林縁	RDB-Iwate	RDB-Japan
1	<i>Procambarus clarkii</i>	アメリカザリガニ	アメリカザリガニ	●				
2	<i>Paratya compressa improvisa</i>	ヌマエビ	ヌカエビ	●	●	●		VU
3	<i>Geothelphusa dehaani</i>	サワガニ	サワガニ		●	●		
4	<i>Hirudinea</i>		シマヒル	●				
5	<i>Hirudinea</i>		ヒル		●	●		
種数計				3	3	3		

6. 東稲山麓地域における農業多様性リスト

作物分類	品目	学名
米	うるち米	<i>Oryza sativa</i>
米	もち米	<i>Oryza sativa</i>
麦類	小麦	<i>Triticum aestivum.</i>
穀物類	そば	<i>Fagopyrum esculentu</i>
穀物類	トウモロコシ	<i>Zea mays</i>
豆類	花豆	<i>Phaseolus coccineus</i>
豆類	青豆	<i>Glycine max</i>
豆類	大豆	<i>Glycine max</i>
豆類	小豆	<i>Vigna angularis</i>
豆類	黒豆	<i>Glycine max</i>
豆類	落花生	<i>Arachis hypogaea</i>
葉茎菜類	赤しそ	<i>Perilla frutescens var. crispa</i>
葉茎菜類	きゃべつ	<i>Brassica oleracea L. var. capitata</i>
葉茎菜類	小松菜	<i>Brassica rapa var. perviridis</i>
葉茎菜類	サニーレタス	<i>Lactuca sativa var. crispa</i>
葉茎菜類	サラダ菜	<i>Lactuca sativa var. crispa</i>
葉茎菜類	春菊	<i>Glebionis coronaria</i>
葉茎菜類	チンゲンサイ	<i>Brassica rapa subsp. Chinensis</i>
葉茎菜類	つぼみ菜	<i>Brassica chinensis f.honsaitai</i>
葉茎菜類	なばな	<i>Brassica chinensis f.honsaitai</i>
葉茎菜類	白菜	<i>Brassica rapa ssp. Pekinensis</i>
葉茎菜類	ほうれんそう	<i>Sp. inacia oleracea</i>
葉茎菜類	モロヘイヤ	<i>Corchorus olitorius</i>
葉茎菜類	ルッコラ	<i>Eruca vesicaria subsp. sativa.</i>
葉茎菜類	レタス	<i>Lactuca sativa var. crispa</i>
花菜類	カリフラワー	<i>Brassica oleracea var. botrytis</i>
花菜類	食用菊	<i>Chrysanthemum</i>
花菜類	ブロッコリー	<i>Brassica oleracea var. italica</i>
花菜類	みょうが	<i>Zingiber mioga</i>
果菜類	ゆうがお	<i>Lagenaria siceraria</i>
果菜類	インゲン	<i>Phaseolus vulgaris</i>
果菜類	うり	<i>Cucumis melo</i>
果菜類	枝豆	<i>Glycine max</i>
果菜類	エンドウ	<i>Pisum sativum</i>
果菜類	おくら	<i>Abelmoschus esculentus</i>
果菜類	かぼちゃ	<i>Cucurbita maxima</i>
果菜類	きぬさや	<i>Pisum sativum</i>
果菜類	きゅうり	<i>Cucumis sativus L.</i>
果菜類	ゴーヤ	<i>Momordica charantial</i>
果菜類	さやいんげん	<i>Phaseolus vulgaris</i>
果菜類	ししとう	<i>Capsicum annuum L var. grossum</i>
果菜類	ズッキーニ	<i>Cucurbita pepo</i>
果菜類	スナップエンドウ	<i>Pisum sativum</i>
果菜類	唐辛子	<i>Capsicum annuum. ; several pungent cultivars</i>
果菜類	トマト	<i>Lycopersicon esculentum</i>
果菜類	なす	<i>Solanum melongena</i>
果菜類	パプリカ	<i>Capsicum annuum var. grossum</i>
果菜類	ピーマン	<i>Capsicum annuum var. grossum</i>

作物分類	品目	学名
果菜類	フルーツトマト	<i>Lycopersicon esculentum</i>
果菜類	水茄子	<i>Solanum melongena</i>
果菜類	ミニトマト	<i>Lycopersicon esculentum var. cerasiforme</i>
果菜類	メロン	<i>Several var. and cultivars of Cucumis melo</i>
果菜類	スイカ	<i>Citrullus lanatus</i>
鱗茎類	行者ニンニク	<i>Allium victorialis L.</i>
鱗茎類	にら	<i>Allium tuberosum</i>
鱗茎類	ニンニク	<i>Allium sativum</i>
鱗茎類	ねぎ	<i>Allium fistulosum</i>
鱗茎類	らっきょう	<i>Allium Chinese</i>
鱗茎類	タマネギ	<i>Allium cepa</i>
根菜類	赤大根	<i>Raphanus sativus</i>
根菜類	かぶ	<i>Brassica napus</i>
根菜類	ごぼう	<i>Arctium lappa</i>
根菜類	聖護院大根	<i>Raphanus sativus</i>
根菜類	大根	<i>Raphanus sativus</i>
根菜類	人参	<i>Daucus carota</i>
根菜類	二十日大根	<i>Raphanus sativus</i>
いも類	キクイモ	<i>Helianthus tuberosus.</i>
いも類	さつまいも	<i>Ipomoea batatas</i>
いも類	里芋	<i>Colocasia esculenta</i>
いも類	自然薯	<i>Dioscorea polystachya</i>
いも類	じゃがいも	<i>Solanum tuberosum</i>
いも類	長芋	<i>Dioscorea polystachya</i>
山菜類	ウルイ	<i>Hosta plantaginea (Lam.) Asch</i>
山菜類	こごみ	<i>Matteuccia struthiopteris</i>
山菜類	たけのこ	<i>Phyllostachys pubescens</i>
山菜類	たらのめ	<i>Aralia elata</i>
山菜類	フキ	<i>Petasites japonicus (Siebold et Zucc.) Maxim.</i>
山菜類	ワラビ	<i>Pteridium aquilinum</i>
果実類	青梅	<i>Prunus mume</i>
果実類	梅	<i>Prunus mume</i>
果実類	ギンナン	<i>Ginkgo biloba</i>
果実類	栗	<i>Castanea crenata</i>
果実類	くるみ	<i>Juglans spp.</i>
果実類	小梅	<i>Prunus mume</i>
果実類	渋柿	<i>Diospyros kaki Thunberg</i>
果実類	南高梅	<i>Prunus mume</i>
果実類	あんず	<i>Prunus armeniaca</i>
果実類	かぼす	<i>Citrus sphaerocarpa</i>
果実類	カリン	<i>Chaenomeles speciosa</i>
果実類	さくらんぼ	<i>Prunus avium</i>
果実類	ナツハゼ	<i>Vaccinium oldhamii</i>
果実類	ブルーベリー	<i>Vaccinium corymbosum</i>
果実類	もも	<i>Prunus persica</i>
果実類	ゆず	<i>Citrus junos</i>
果実類	ラ・フランス	<i>P. pyrifolia</i>
果実類	柿	<i>Diospyros kaki Thunberg</i>
果実類	山ぶどう	<i>Vitis coignetiae</i>

作物分類	品目	学名
果実類	キウイフルーツ	<i>Actinidia deliciosa</i>
果実類	キンカン	<i>Fortunella japonica</i>
果実類	梨	<i>Pyrus communis</i>
果実類	ぶどう	<i>Vitis vinifera L., several cultivars</i>
果実類	りんご	<i>Malus pumila</i>
果実類	洋梨	<i>P. pyrifolia</i>
花卉類	小菊	<i>Chrysanthemum morifolium</i>
花卉類	ひまわり	<i>Helianthus annuus</i>
花卉類	菊	<i>Chrysanthemum morifolium</i>
花卉類	リンドウ	<i>Gentiana scabra</i>
葉茎菜類	バジル	<i>Ocimum basilicum</i>

出典：各農業協同組合や管内直売所の農産物販売リスト等